OpenStack セキュリティガイド

[FAMILY Given]

havana (2014-04-12)

製作著作 © 2013 OpenStack Foundation Some rights reserved.

概要

本書は OpenStack クラウドを安全にするためのベストプラクティスと基本的な考え方 について書かれています。



Except where otherwise noted, this document is licensed under Creative Commons Attribution 3.0 License. http://creativecommons.org/licenses/by/3.0/legalcode

BUILT FOR



はし	<i>゛</i> めに	11
	表記規則	11
	ドキュメント変更履歴	11
1.	謝辞	1
2.	このドキュメントを作成した理由と方法	3
_	本書の目的	
	本書の執筆方法	3
	このドキュメントへの貢献方法	7
3.	OpenStack の概要	-
٠.	クラウドのタイプ	9
	0penStack サービスの概観	11
4.	セキュリティ境界と脅威	15
٦.	セキュリティドメイン	15
	セキュリティドメインのブリッジ	17
	脅威の分類、アクター、攻撃ベクトル	19
5.		25
ο.	事例の概要 事例: プライベートクラウドビルダーのアリス	25 25
		25 25
C	事例: パブリッククラウドプロバイダーのボブ	25 27
6.	システムの文書化要件	
	システムのロールとタイプ	27
	システムインベントリ	27
	ネットワークトポロジー	28
_	サービス、プロトコル、ポート	28
7.	ケーススタディ: システムのドキュメント	31
	アリスのプライベートクラウド	31
	ボブのパブリッククラウド	31
8.	管理の概要	33
9.	継続的なシステム管理	35
	脆弱性の管理	35
	構成管理	37
	セキュアなバックアップとリカバリ	38
	セキュリティ監査ツール	39
10.	完全性ライフサイクル	41
	セキュアブートストラップ	41
	ランタイムの検証	46
11.	管理インターフェース	49
	Dashboard	49
	OpenStack API	50
	・ セキュアシェル (SSH)	51
	管理ユーティリティ	52
	ー 帯域外管理インターフェース	52

12.	ケーススタディ: 管理インターフェース	55
	アリスのプライベートクラウド	55
	ボブのパブリッククラウド	56
13.	SSL/TLSの導入	57
	認証局(CA)	58
	SSL/TLSライブラリ	59
	暗号化アルゴリズム、暗号モード、プロトコル	59
	概要	59
14.	ケーススタディ: PKI と証明書管理	61
	アリスのプライベートクラウド	61
	ボブのパブリッククラウド	61
15.	SSLプロキシとHTTPサービス	63
	例	63
	nginx	67
	HTTP Strict Transport Security	68
16.	APIエンドポイント構成に関する推奨事項	71
	内部API通信	71
	Paste と ミドルウェア	72
17	APIエンドポイントのプロセス分離とポリシー	73
17.	ケーススタディ: API エンドポイント	75
	アリスのプライベートクラウド	75 75
10	ボブのパブリッククラウド	75 77
18.	Identity 認証	77
	認証	78
	認可	80
	ポリシー	81
	トークン	83
	将来	84
19.	Dashboard	85
	基本的なウェブサーバーの設定	85
	HTTPS	86
	HTTP Strict Transport Security (HSTS)	86
	フロントエンドキャッシュ	86
	ドメイン名	87
	静的メディア	87
	シークレットキー	88
	セッションバックエンド	88
	許可されたホスト	89
	クッキー	89
	パスワード自動補完	89
	クロスサイトリクエストフォージェリ(CSRF)	89
	クロスサイトスクリプティング(XSS)	90

	クロスオリジンリソースシェアリング (CORS)	90
	Horizon のイメージのアップロード	90
	アップグレード	91
	デバッグ	91
20.	コンピュート	93
	仮想コンソールの選択	93
21.	オブジェクトストレージ	97
	最初にセキュア化するもの - ネットワーク	98
	サービスのセキュア化 – 一般	100
	ストレージサービスのセキュア化	101
	プロキシサービスのセキュア化	102
	オブジェクトストレージ認証	104
	他の重要事項	104
22.	ケーススタディ: ID 管理	107
	アリスのプライベートクラウド	107
	ボブのパブリッククラウド	107
23.	ネットワークの状態	109
24.	Networking アーキテクチャ	111
	OS ネットワーキングサービスの配置と物理サービス	112
25.	Networking サービス	115
	VLAN とトンネリングを使用した L2 分断	115
	ネットワークサービス	116
	ネットワークサービス拡張	118
	Networking サービスの制限事項	119
26.	OpenStack Networking サービスのセキュリティ強化	121
	OpenStack Networking サービス設定	122
27.	Networkingサービス セキュリティベストプラクティス	123
	テナントネットワークサービスのワークフロー	123
	Networking リソースポリシーエンジン	123
	セキュリティグループ	124
	クォータ	125
28.	ケーススタディ: Networking	127
	アリスのプライベートクラウド	127
	ボブのパブリッククラウド	127
29.	メッセージキューアーキテクチャー	129
30.	メッセージングのセキュリティ	131
	メッセージ通信路のセキュリティ	131
	キューの認証およびアクセス制御	132
	メッセージキュープロセスのアイソレーションとポリシー	134
31.	ケーススタディ: メッセージング	137
	アリスのプライベートクラウド	137
	ボブのパブリッククラウド	137
32	データベースバックエンドの老庫事項	139

	データベースバックエンドのセキュリティ参考資料	139
33.	データベースアクセス制御	141
	OpenStack データベースアクセスモデル	141
	データベースの認証とアクセス制御	143
	SSL 通信利用のための必須ユーザーアカウント	144
	X.509 証明書を用いた認証	144
	OpenStack サービスのデータベース設定	145
	Nova Conductor	145
34.	データベース通信セキュリティ	149
٠.,	データベースサーバーの IP アドレスバインド	149
	データベース通信	149
	MySQL SSL 設定	150
	PostgreSQL SSL 設定	150
35.	ケーススタディ: データベース	153
٠٠.	アリスのプライベートクラウド	153
	ボブのパブリッククラウド	153
36.	データプライバシ関連	155
٠٠.	データの所在	155
	データの処分	156
37.	データ暗号化	161
• • •	Object Storage オブジェクト	161
	Block Storage ボリューム & インスタンスの一時ファイルシ	
	ステム	162
	ネットワークデータ	162
38.	鍵管理	165
	参考資料:	165
39.	ケーススタディ: テナントデータ	167
	アリスのプライベートクラウド	167
	ボブのパブリッククラウド	167
40.	ハイパーバイザーの選択	169
	OpenStack におけるハイパーバイザー	169
	選択基準	170
41.	仮想化層のセキュリティ強化	179
	物理ハードウェア (PCI パススルー)	179
	仮想ハードウェア (QEMU)	180
	sVirt: SELinux + 仮想化	183
42.	ケーススタディ:インスタンス分離	187
	アリスのプライベートクラウド	187
	ボブのパブリッククラウド	187
43.	インスタンスのセキュリティサービス	189
	インスタンスへのエントロピー	189
	ノードへのインスタンスのスケジューリング	190
	信輌されたイメージ	102

	インスタンスのマイグレーション	195
44.	ケーススタディ:インスタンス管理	199
	アリスのプライベートクラウド	199
	ボブのパブリッククラウド	199
45.	フォレンジングとインシデント対応	201
	監視ユースケース	201
		203
46.	ケーススタディ: 監視とログ採取	205
	アリスのプライベートクラウド	205
	ボブのパブリッククラウド	205
47.	コンプライアンス概要	207
.,.	セキュリティ原則	207
48.	監査プロセスの理解	209
10.	監査の範囲を決める	209
	内部監査	210
	外部監査に備える	210
	外部監査	211
	コンプライアンスの維持	211
49.	コンプライアンス活動	213
10.	Information Security Management System (ISMS)	213
	リスク評価	213
	アクセスとログの検査	213
	バックアップと災害対策	214
	セキュリティトレーニング	214
	セキュリティの検査	214
	脆弱性の管理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	214
	データの分類	215
	例外プロセス	215
50.	認証とコンプライアンスの報告書	217
JU.	商業規格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	217
	SOC 3	218
	ISO 27001/2	219
	HIPAA / HITECH	219
	政府標準	220
51.	プライバシー	223
52.	ケーススタディ: コンプライアンス	
JZ.	アリスのプライベートクラウド	225
	ボブのパブリッククラウド	226
Α.	コミュニティのサポート	227
Λ.	ゴミュニティのリホート	227
	ask. openstack. org	228
	OpenStack メーリングリスト	229
	OpenStack メーリングリスト	229

JpenStack イド	セキュリティカ 	April 12, 2014	na 	avana
	•	バグエリア		
	OpenStack .	IRC チャネル		230
	ドキュメン	トへのフィードバック		231

OpenStackディストリビューション

用語集

231

233

図の一覧

21.1. OpenStack Object Storage Administration Guide (2013)	
からのサンプル図	98
21.2. マネジメントノードを持つオブジェクトストレージネット	
ワークアーキテクチャー (OSAM: Object storage network	
architecture with a management node)	100

はじめに

表記規則	11
ドキュメント変更履歴	11

表記規則

OpenStack のドキュメントは、いくつかの植字の表記方法を採用してい ます。

諭示

諭示は以下の 3 種類あります。



注記

これは注記です。注記の情報は一般的にちょっとしたヒント や備忘録の形式をとります。



重要

これは重要です。重要にある情報は続行する前に気をつける 必要があります。



これは警告です。警告にある情報は致命的なものです。デー タ損失やセキュリティ問題のリスクに関する追加情報が提供 されます。

コマンドプロンプト

Commands prefixed with the # prompt are to be executed by the root user. These examples can also be executed using the sudo command, if available.

\$ プロンプトから始まるコマンドは、root を含む、すべてのユーザーに より実行できます。

ドキュメント変更履歴

このバージョンのガイドはすべての旧バージョンを置き換え、廃止しま す。以下の表はもっとも最近の変更点を記載しています。

Revision Date	Summary of Changes
December 2, 2013	• Object Storage に関する章を追加しました。
October 17, 2013	・Havana リリース。
July 2, 2013	• 初版作成

第1章 謝辞

OpenStack Security Group は、このドキュメントの作成を手助けしてい ただいた以下の組織の貢献に感謝いたします。





















第2章 このドキュメントを作成し た理由と方法

本書の目的	3
本書の執筆方法	3
このドキュメントへの貢献方法	7

OpenStack の導入の増加と製品の成熟と伴い、セキュリティへ対する要 件が高くなり、OpenStack Security Group では包括的かつ権威のあるセ キュリティガイドの必要性を認識しました。OpenStack セキュリティガ イドは、OpenStack のセキュリティ向上を目的とした、セキュリティの ベストプラクティス、ガイドライン、推奨事項の概要について記載して います。 さまざまな環境で OpenStack の導入やセキュア化の専門知識 を持つ著者が豊富なノウハウを本書にて共有します。

このガイドは OpenStack Operations Guide (OpenStack 運用ガイ ド)を補足します。既存の OpenStack 環境のセキュリティを強化した り、OpenStack を用いたクラウド事業者のセキュリティ制御を評価する ための参考書として活用してください。

本書の目的

- ・ OpenStack のセキュリティ領域の明確化
- OpenStack をセキュア化するガイドの提供
- 現在の OpenStack におけるセキュリティ懸念事項と実現可能な軽減策 の紹介
- 今後予定されているセキュリティ機能の議論
- コミュニティ主導のナレッジ蓄積と普及の場の提供

本書の執筆方法

本書はOpenStack Operations Guide (OpenStack 運用ガイド) と同様に 「Book Sprint メソッド」を用いました。このメソッドでは、迅速な大 量文章の作成を実現します。OpenStack Security Group のコーディネー ターは再びAdam Hydeをファシリテーターとして力を借りました。さら

に企業からのサポートが得られ、オレゴン州ポートランドで開催された OpenStack サミットでプロジェクトが正式に公表されました。

グループの主要なメンバーが集まるために、執筆チームはメリーランド 州アナポリスに集まりました。この集まりは、公共部門のインテリジェ ンス・コミュニティーのメンバー、シリコンバレーのスタートアップ、 いくつかの有名な大手技術企業の驚くべきコラボレーションです。Book Sprint は 2013 年 6 月の最終週に行われ、初版は 5 日間で作成されま した。



チームメンバーは以下のとおりです。

· Bryan D. Payne, Nebula

Dr. Bryan D. Payne は、Nebula の Security Research の Director です。また、OpenStack Security Group (OSSG) の共同創設者で す。Nebula に参加する前は、Sandia National Labs、National Security Agency、BAE Systems、IBM Research に勤務していまし た。Georgia Tech College of Computing でシステムセキュリティを 専攻し、コンピューターサイエンスの Ph.D. を取得しました。

· Robert Clark, HP

Robert Clark は、Nebula の HP Cloud Services の Lead Security Architect です。また、OpenStack Security Group (OSSG) の共同創 設者です。HP に入社する前は、UK Intelligence Community に勤務し ていました。脅威モデリング、セキュリティアーキテクチャー、仮想 化技術に関する強固なバックグラウンドを持ちます。University of Wales のソフトウェアエンジニアリングの修士号を持っています。

· Keith Basil, Red Hat

Keith Basil は Red Hat OpenStack の Principal Product Manager です。Red Hat の OpenStack 製品マネジメント、開発、戦略に注力し ています。アメリカの公共部門の中で、アメリカの民間機関と委託業 者向けの認定済み、セキュアかつハイパフォーマンスなクラウドアー キテクチャーの設計から、これまでの経験をもたらします。

· Cody Bunch, Rackspace

Cody Bunch は Rackspace の Private Cloud architect です。『The OpenStack Cookbook』と VMware 自動化の書籍の共同執筆者です。

• Malini Bhandaru, Intel

Malini Bhandaru は Intel のセキュリティアーキテクトです。Intel でプラットフォームの電力とパフォーマンス、Nuance でスピーチ製 品、ComBrio でリモートモニタリングと管理、Verizon でウェブコ マースに関するさまざまなバックグラウンドを持ちます。University of Massachusetts, Amherst で人工知能に関する Ph.D. を持っていま す。

 Gregg Tally, Johns Hopkins University Applied Physics Laboratory

Gregg Tally は Asymmetric Operations Department の JHU/ APL's Cyber Systems Group の Chief Engineer です。主に システムセキュリティエンジニアリングに関する仕事をしてい ます。以前は、サイバーセキュリティ研究プロジェクトに関わ り、SPARTA、McAfee、Trusted Information Systems に勤務していま した。

Eric Lopez, VMware

Eric Lopez は VMware の Networking and Security Business Unit の Senior Solution Architect です。顧客が OpenStack や VMware NSX (以前は Nicira の Network Virtualization Platform として知られていました)を導入する手助けをしてい ます。VMware(Nicira の企業買収により)に参加する前は、Q1 Labs、Symantec、Vontu、Brightmail に勤務していました。U.C. Berkeley O Electrical Engineering/Computer Science, Nuclear Engineering の B.S. を保持してます。また、University of San Francisco の MBA を保持しています。

Shawn Wells, Red Hat

Shawn Wells は Red Hat の Innovation Programs の Director で す。アメリカ政府の中でオープンソース技術を適用、貢献、管理する プロセスを改善することに注力しています。さらに、SCAP Security Guide プロジェクトのアップストリームのメンテナーです。このプロ ジェクトは、 U.S. Military、NSA、DISA で仮想化とオペレーティン グシステムの強化ポリシーを作成しています。NSA の契約者になる前 は、大規模分散コンピューティング環境を利便化する SIGINT 収集シ ステムを開発していました。

• Ben de Bont, HP

Ben de Bont は HP Cloud Services の CSO です。その前は、MySpace の情報セキュリティグループ、MSN Security のインシデントレスポン スチームを率いていました。Queensland University of Technology のコンピューターサイエンスの修士号を保持しています。

Nathanael Burton, National Security Agency

Nathanael Burton は National Security Agency のコンピューターサ イエンティストです。Agency に 10 年以上勤務し、分散システム、大 規模ホスティング、オープンソースイニシアティブ、オペレーティン グシステム、セキュリティ、ストレージ、仮想化技術に携わっていま す。Virginia Tech でコンピューターサイエンスの B.S. を取得しま した。

· Vibha Fauver

Vibha Fauver (GWEB, CISSP, PMP) は情報技術に関する 15 年以上 の経験があります。専門分野はソフトウェアエンジニアリング、プ ロジェクト管理と情報セキュリティです。Computer & Information Science の B.S. と Engineering Management の M.S. を保持してい ます。Systems Engineering の資格を保持しています。

• Eric Windisch, Cloudscaling

Eric Windisch は Cloudscaling の Principal Engineer で す。OpenStack に 2 年以上貢献しています。ウェブホスティング業界 における 10 年以上の経験から、ホスティング環境の分離性、テナン ト独立性の構築、インフラセキュリティに携わっています。2007 年以 降、クラウドコンピューティング環境の構築と自動化に携わっていま す。

Andrew Hay, CloudPassage

Andrew Hay は CloudPassage, Inc. の Applied Security Research の Director です。社内セキュリティおよび、ダイナミックパブリッ ク、プライベート、ハイブリッドクラウドのホスティング環境向けに 設計されたサーバーセキュリティ製品のセキュリティ研究チームを率 いています。

· Adam Hyde

Adam はこの Book Sprint をリードしました。彼は Book Sprint メ ソッドの創設者でもあり、一番経験豊富な Book Sprint のファシリ テーターです。3000 人もの参加者がいる、フリーソフトウェアのフ リーなマニュアルを作成するコミュニティである FLOSS Manuals の 創設者です。また、Booktype の創設者でプロジェクトマネージャーで す。 Booktype はオンラインで本の執筆、編集、出版を行うオープン ソースプロジェクトです。

また、Book Sprint 期間中、Anne Gentle、Warren Wang、Paul McMillan、Brian Schott、Lorin Hochstein からの手助けがありまし た。

本書は5日間の Book Sprint で作成されました。Book Sprintで は、3-5 日でドキュメントを作成するために、高度なコラボレーションと統制 されたプロセスによってグループメンバーをひとつにします。Book SprintメソッドはAdam Hyde によって設立された高度なファシリテー ションプロセスです。詳細は Book Sprint のウェブページ http:// www.booksprints.net を参照してください。

初版の発行後、以下の内容を追加しました。

Rodney D. Beede, Seagate Technology

Rodney D. Beede は Seagate Technology の Cloud Security Engineer です。彼は OpenStack Object Storage (Swift) のセキュア 化に関する不足していた章に貢献しました。University of Colorado の Computer Science に関する M.S. を保持しています。

このドキュメントへの貢献方法

執筆作業の初めは空調が効きすぎの部屋で行われました。最終的に、そ の部屋がグループのオフィスとして執筆スプリント期間中使用されまし た。

OpenStack ドキュメントに貢献する方法について: http:// wiki.openstack.org/Documentation/HowTo

第3章 OpenStack の概要

クラウドのタイプ	9
OpenStack サービスの概観	. 11

本ガイドは、OpenStack のデプロイメントにおける、セキュリティに関 する洞察を提供します。クラウドアーキテクト、デプロイ担当者、管理 者などを対象読者としています。また、クラウドユーザーが知識を高め たり、プロバイダー選択に役立つ情報を記載している一方、監査担当者 が、コンプライアンス認証関連の業務を支援する参考資料としてご利用 いただくことができます。本ガイドは、クラウドのセキュリティに関心 を持つ読者全般にもお奨めします。

OpenStack の各デプロイメントには、Linux ディストリビューション、 データベースシステム、メッセージキュー、OpenStack のコンポーネン ト自体、アクセス制御ポリシー、ログサービス、セキュリティ監視ツー ルなどに及ぶ、多種多様なテクノロジーが採用されます。このため、デ プロイに伴うセキュリティ問題が、同じように多様となることは当然で す。それらの内容を奥深く分析するには、マニュアルが数冊必要となり ます。 本ガイドでは、OpenStack のセキュリティ問題とその対処方法を 理解するために十分な情報を提供しつつ、さらなる情報の外部参照先を 掲載することにより、バランスを図っています。本書は、全体を通読す る方法または参考資料として必要箇所のみを参照する方法のいずれでも ご利用いただくことができます。

本章では、プライベート、パブリック、ハイブリッドというクラウドの 各種類について簡単に説明した後、後半に OpenStack のコンポーネント およびそれらに関連するセキュリティ課題について概説します。

クラウドのタイプ

OpenStack は、クラウドテクノロジーの導入における重要なイネーブ ラーであり、一般的なデプロイメントユースケースがいくつかありま す。これらは、パブリック、プライベート、およびハイブリッドモデ ルとして一般に知られています。以下のセクションでは、National Institute of Standards and Technology (NIST) のクラウドの定義 を 取り上げ、OpenStack に適用するクラウドの異なるタイプについて説明 します。

パブリッククラウド

NIST によると、パブリッククラウドは、一般市民が利用できるように インフラストラクチャーが公開されているクラウドと定義されていま

す。OpenStack のパブリッククラウドは、通常サービスプロバイダーに よって運用され、個人、法人、または料金を支払っている顧客が利用す ることができます。パブリッククラウドプロバイダーは、複数のインス タンスタイプに加えて、ソフトウェア定義ネットワーク、ブロックスト レージなどの各種機能を公開することができます。パブリッククラウド はその性質上、より高いレベルのリスクにさらされます。パブリックク ラウドの利用者は、選択したプロバイダーが必要な認定および認証を取 得しているか、その他の法規制に関する考慮事項に対応しているかなど の点を確認しておく必要があります。パブリッククラウドプロバイダー は、ターゲット顧客に応じて、1 つまたは複数の法規制の影響を受ける 場合があります。また、プロバイダーは、法規制の要件を満たす必要が ない場合でも、管理インフラストラクチャーを外部の攻撃から保護する ために、テナントの分離を確実に行う必要があります。

プライベートクラウド

パブリッククラウドの対極にあるのがプライベートクラウドです。NIST は、プライベートクラウドを、事業組織などの複数の利用者から成る単 一の組織の専用使用のために提供されるクラウドと定義しています。プ ライベートクラウドの所有、管理、および運用は、その組織、第三者、 もしくはそれらの組み合わせにより行われ、存在場所としては、その組 織の施設内または外部の場合があります。プライベートクラウドのユー スケースは多様であるため、セキュリティ課題もそれぞれで異なりま す。

コミュニティクラウド

NIST では、コミュニティクラウドを、共通の関心事(例えば、任務、セ キュリティの必要、ポリシー、法令順守に関わる考慮事項) を持つ複数 の組織から成る特定の利用者の共同体の専用使用のために提供されるク ラウドと定義しています。コミュニティクラウドの所有、管理、および 運用は、共同体内の 1 つまたは複数の組織、第三者、もしくはそれらの 組み合わせにより行われ、存在場所はその組織の施設内または外部の場 合があります。

ハイブリッドクラウド

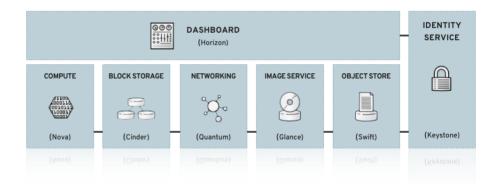
NIST では、ハイブリッドクラウドを、2 つ以上の異なるクラウドインフ ラストラクチャー(プライベート、コミュニティ、パブリック)を組み 合わせたクラウドと定義しています。各クラウドは、依然として独自の エンティティですが、データおよびアプリケーションの移植性を可能に する標準化された技術あるいは専有技術(例:クラウド間のロードバラ ンスのためのクラウドバーストなど)により結合されます。例えば、オ

ンライン小売業者は、柔軟なプロビジョニングが可能なパブリッククラ ウドに広告やカタログを掲示している場合があります。これにより、柔 軟かつ費用対効果の高い方法で季節的な負荷に対応することが可能とな ります。顧客が発注処理を開始すると、よりセキュアなプライベートク ラウドのバックエンドに転送されます。

本ガイドにおいては、コミュニティクラウドとハイブリッドクラウドを 同様に扱い、パブリッククラウドとプライベートクラウドの両極のみを セキュリティ面から明確に説明します。セキュリティ対策は、デプロイ メントがプライベート/パブリッククラウドの連続体のどこに位置するか によって異なります。

OpenStack サービスの概観

OpenStack は、モジュール型アーキテクチャーを採用し、中核的な設計 理念としてスケーラビリティと柔軟件を促進する一式のコアサービスを 提供します。本章では、OpenStack のコンポーネントとそれらのユース ケースおよびセキュリティに関する考慮事項を簡単に説明します。



コンピュート

OpenStack Compute Service (Nova) は、多層アプリケーション、開発/ テスト環境、「ビッグデータ」を処理する Hadoop のクラスター、ハイ パフォーマンスコンピューティングなどをホストする、大規模な仮想マ シンインスタンスの管理をサポートするサービスを提供します。

Compute Service は、サポート対象のハイパーバイザーと連動する抽象 化レイヤーを介してこのような管理を行います。ハイパーバイザーにつ いては、後半で詳しく説明します。

本ガイドの後半では、ハイパーバイザーと関連する仮想化スタックに焦 点をあてて、包括的に解説します。

イド

機能サポートの現在の状況に関する情報は、 OpenStack Hypervisor Support Matrix を参照してください。

OpenStack のデプロイメントでは、Compute のセキュリティが極めて重 要となります。セキュリティ強化のテクニックには、頑強なインスタン スの隔離、Compute のサブコンポーネント間におけるセキュアな通信、 一般向けの API エンドポイントの回復性などがあげられます。

オブジェクトストレージ

OpenStack Object Storage Service (Swift) は、クラウド内の任意デー タの保管/取得機能のサポートを提供します。Object Storage Service はネイティブ API および Amazon Web Services S3 互換の API の両方 を提供します。このサービスは、データレプリケーションにより高度な 回復性を提供し、ペタバイト規模のデータの処理が可能です。

オブジェクトストレージは、従来のファイルシステムストレージと異な る点を理解しておくことが重要です。メディアファイル(MP3、画像、ビ デオ)や仮想マシンイメージ、バックアップファイルなどの静的データ に使用するのに最適です。

オブジェクトのセキュリティは、アクセス制御と、伝送中および静止中 のデータの暗号化に重点を置くべきです。その他の懸念事項には、シス テムの悪用、不法または悪意のあるコンテンツの保管、クロス認証の攻 撃ベクトルなどに関する問題があげられます。

ブロックストレージ

OpenStack Block Storage Service (Cinder) は、Compute インスタンス 用に永続的なブロックストレージを提供します。Block Storage Service はブロックデバイスの作成からインスタンスへのボリュームの接続、そ れらの解放にいたるまでのライフサイクルを管理する役割を果たしま す。

ブロックストレージのセキュリティ課題は、オブジェクトストレージの 場合と同様です。

OpenStack Networking

OpenStack Networking Service (Neutron、旧称 Quantum) はIP アドレ ス管理、DNS、DHCP、負荷分散、セキュリティグループ(ファイアウォー ルのポリシーなど、ネットワークのアクセスルール)など、さまざまな ネットワークサービスをクラウドユーザー(テナント)に提供します。

また、各種ネットワークソリューションとのプラグ可能な統合を可能に するソフトウェア定義ネットワーク(SDN)のフレームワークを提供しま

OpenStack Networking により、クラウドテナントはゲストのネットワー ク設定を管理することができます。ネットワークサービスに伴うセキュ リティ上の問題には、 ネットワークトラフィックの隔離、可用性、完全 性、機密性などがあげられます。

Dashboard

OpenStack Dashboard Service (Horizon) は、クラウド管理者とクラ ウドテナントの両方に向けた Web ベースのインターフェースを提供 します。このインターフェースにより、管理者およびテナントは、ク ラウドリソースのプロビジョニング、管理、監視を行うことができま す。Horizon は通常、一般i向けにデプロイされ、パブリック Web ポー タルの一般的なセキュリティ問題が伴います。

Identity サービス

OpenStack Identity Service (Keystone) は、クラウドインフラスト ラクチャー全体にわたる認証および承認サービスを提供する共有サービ スです。Identity Service には、複数形式の認証に対するプラグ可能な サポートを採用しています。

ここでのセキュリティ課題には、認証の信頼、承認トークンの管理、セ キュリティ保護された通信などがあげられます。

Image Service

OpenStack Image Service (Glance) は、ディスクイメージ管理サービス を提供します。Image Service は、必要に応じて、イメージの検索、登 録、デリバリサービスを Compute サービスに提供します。

前述したデータセキュリティに関する問題と同様に、ディスクイメージ のライフサイクル管理には信頼されたプロセスが必要です。

その他の支援技術

OpenStack は、メッセージングに依存して、複数のサービス間の内部通 信を行います。デフォルトでは、OpenStack は Advanced Message Queue Protocol (AMQP) をベースとするメッセージキューを使用します。これ は、大半の OpenStack サービスと同様に、プラグ可能なコンポーネント

をサポートしています。現在は、RabbitMQ、 Qpid、または ZeroMQ を実 装バックエンドにすることができます。

メッセージキューシステムは、大半の管理コマンドが通過するの で、OpenStack のデプロイメントにおける重要なセキュリティ課題で す。メッセージキューのセキュリティについては、本ガイドの後半で詳 述します。

一部のコンポーネントは、データベースを明示的に呼び出さずに使用し ます。データベースおよびそのコンテンツへのアクセスのセキュリティ 保護は、もう一つのセキュリティ課題であるため、本ガイドの後半でさ らに詳しく説明します。

第4章 セキュリティ境界と脅威

セキュリティドメイン	15
セキュリティドメインのブリッジ	17
脅威の分類、アクター、攻撃ベクトル	19

クラウドとは、セキュリティドメインと呼ばれる、機能やユーザー、共 有セキュリティの関心事に基づいた論理コンポーネントの集まりである と要約できます。脅威に関するアクターやベクトルは、リソースへのア クセスや動機をベースに分類されます。OpenStack の目標は、リスクや 脆弱性保護の目的にあわせてドメインごとにセキュリティの関心事につ いての判断材料を提供することです。

セキュリティドメイン

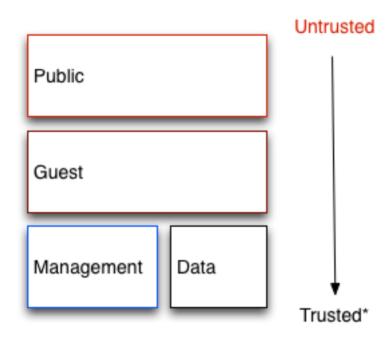
セキュリティドメインは、システム内の信頼性に関する共通の要件や期 待を共有するユーザー、アプリケーション、サーバー、ネットワークの いずれかで構成されています。通常、これらのドメインには、同じ認証 と承認(AuthN/Z)要件およびユーザーが指定されています。

これらのドメインをさらに分類する場合もありますが(該当箇所で説 明)、一般的に OpenStack クラウドをセキュアにデプロイしていく上で 最低限必要な部分を構成する、4 つの異なるセキュリティドメインの ことを指します。以下に、これらのセキュリティドメインを示していま す。

- 1. パブリック
- 2. ゲスト
- 3. 管理
- 4. データ

上記のセキュリティドメインを選択したのは、個別にマッピング可能で あること、または組み合わせると指定の OpenStack デプロイメントで存 在する可能性のある信頼エリアの大部分を表すことができるためです。 例えば、デプロイメントトポロジによっては、物理ネットワーク 1 つ vs 他のネットワークとなるように、ゲストとデータドメインの両方を組 みわせて、ネットワークを物理的に分割するものもあります。いずれの 場合も、クラウドオペレーターは、適切なセキュリティの関心事を認識

する必要があります。これらのドメインや信頼性に関する要件は、クラ ウドインスタンスがパブリック、プライベート、ハイブリッドのいずれ であるかによって変わってきます。



* But verified - some data requires extra security

パブリック

パブリックのセキュリティドメインとは、クラウドインフラストラク チャーの中で完全に Untrusted なエリアのことです。インターネット全 体を指す場合や、単に権限を持たないネットワークを指す場合がありま す。機密性や完全性の要件を持つデータがこのドメインを通過する場合 には、補完の制御を使用してこのデータを保護する必要があります。

このドメインは常に、 untrusted であると考えなければなりません。

ゲスト

ゲストのセキュリティドメインは、compute instance-to-instance ト ラフィックに通常使用されますが、API の呼び出しなどクラウドのオペ レーションをサポートするサービスではなく、クラウド上のインスタン スが生成する compute データを処理します。

インスタンスの使用に関する厳密な制御がない、または制限なしに仮 想マシンへインターネットアクセスが可能なパブリッククラウドのプ ロバイダーやプライベートクラウドのプロバイダーは、このドメイン を untrusted であると見なすべきです。プライベートクライドプロバ イダーは、インスタンスおよびすべてのテナントを確実に信頼できるよ うに制御が設定されている場合のみ、このネットワークを内部、つまり trusted であると考えるようにしてください。

管理

管理セキュリティドメインは、サービスがやりとりをする場所です。こ のドメインは時に「制御プレーン」と呼ばれることもあり、このドメイ ン内のネットワークは設定パラメーター、ユーザー名、パスワードなど の機密データをトランスポートします。コマンドや制御トラフィックは 通常このドメインに常駐し、完全性に関する強力な要件が必要となりま す。このドメインへのアクセスについては非常に制限されたものでなく てはならず、さらに監視も必要です。また、このセキュリティドメイン では、本ガイドで記載されているセキュリティのベストプラクティスす べてを採用するようにしてください。

多くのデプロイメントでは、この管理セキュリティドメインは trusted と考えられています。しかし、OpenStack のデプロイメントの場合、 このドメインと他のものをブリッジするシステムが多数あるため、この ドメインの信頼レベルは下がります。詳細は、「セキュリティドメイン のブリッジ」「17]を参照してください。

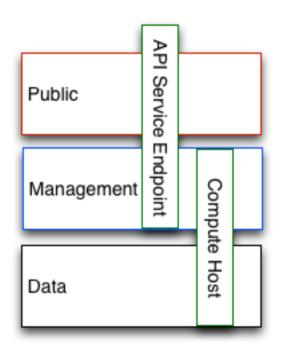
データ

データセキュリティドメインは主に、OpenStack ではストレージサービ スの情報に関係します。このネットワークを通過するデータの多くは、 完全性や機密性に関する強力な要件を持ち、デプロイメントの種類に よっては可用性に関する強力な要件が出てくる場合があります。

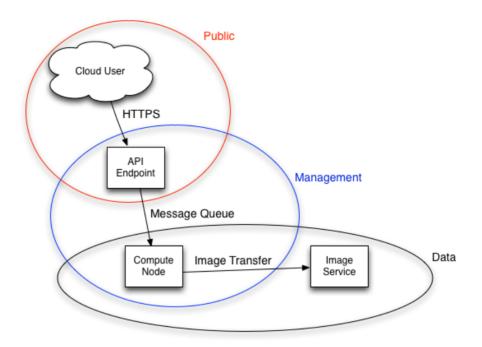
このネットワークの信頼レベルは、デプロイメントの意思決定により左 右されるため、デフォルトの信頼レベルは割り当てていません。

セキュリティドメインのブリッジ

ブリッジとは、複数のセキュリティドメイン内に存在するコンポーネン トです。異なる信頼レベルまたは認証要件が指定されたセキュリテイド メイン間をブリッジするコンポーネントは、慎重に設定する必要があり ます。ネットワークアーキテクチャーの中で、これらのブリッジは弱点 となることが多くなっています。常に、ブリッジするドメインの中で最 も高い信頼レベルのセキュリティ要件を満たすように、ブリッジを設定 するようにしてください。多くの場合、攻撃の可能性の高さから、主に ブリッジのセキュリティ制御について考慮する必要があります。



上記の図は、データドメインと管理ドメインをブリッジする compute ノードです。このように、compute ノードは管理ドメインのセキュリ ティ要件に見合うように設定する必要があります。同様に、この図の API エンドポイントは untrusted であるパブリックドメインと管理ドメ インをブリッジしており、パブリックドメインから管理ドメインに伝搬 しないように攻撃から保護されるように設定する必要があります。



デプロイ担当者は、ブリッジするどのドメインよりも高い基準でブリッ ジのセキュリティを確保するように考えるようにしてください。API エ ンドポイントの上記の例では、攻撃者はパブリックドメインから API エ ンドポイントをターゲットにして、情報漏洩や管理ドメインへアクセス 権の獲得を期待しつつこのエンドポイントを利用するのです。

OpenStack のデザインではセキュリティドメインの分離が困難です。コ アサービスは通常少なくとも 2 つのドメインをブリッジしているため、 ドメインのセキュリティ制御を適用する場合、細心の注意を払う必要が あります。

脅威の分類、アクター、攻撃ベクトル

クラウドデプロイメントの種類の多く(パブリックまたはプライベート) は、なんらかの攻撃にさらされています。本章では、攻撃者を分類し て、各セキュリティドメインで考えられる攻撃の種類をまとめていきま す。

脅威のアクター

脅威のアクターとは、防御の対象となりえる攻撃者のクラスを抽象的に 表したものです。アクターの技術が高くなるにつれ、攻撃の軽減や防

止を成功させるために必要なセキュリティ制御にかかるコストが嵩みま す。セキュリティはコスト、使いやすさ、防御の間でのトレードオフと いうことになります。ここで記載した脅威のアクターすべてから、クラ ウドのデプロイメントを保護することはできません。OpenStack クラウ ドをデプロイする方は、デプロイメントと用途の間でバランスが確保で きるポイントを決定する必要が出てきます。

- ・インテリジェンスサービス 一 このガイドでは最も有能な攻撃者とさ れています。インテリジェンスサービスやその他の国家主体は、ター ゲットに圧力をかけるために莫大なリソースを費やすことができま す。他のどのアクターよりも能力があります。人、技術両方の面で非 常に厳しい制御がないと、これらのアクターから防御することは極め て困難です。
- 重大組織犯罪 ― 極めて有能で金銭で動く攻撃者グループ。エクスポ ロイト開発やターゲットのリサーチに対する資金を組織内で調達でき ます。最近、ロシアンビジネスネットワーク(RBN)などの組織が登場 し、大規模なサイバー犯罪企業がサイバー攻撃がどのようにして商品 として成り立ったかを証明しました。産業スパイ活動は、SOC グルー プに分類されます。
- ・ 非常に有能な組織 一 これは通常ビジネスから資金を調達しているの ではありませんが、サービスプロバイダーやクラウドオペレーターに 対して重大な脅威をもたらす可能性のある「ハクティビスト」タイプ の組織のことを指します。
- 動機のある個人 ― 一人で行動するこれらの攻撃者は、詐欺師または 悪意のある従業員、不満を持った顧客、小規模の産業スパイなど多く のものに扮して攻撃します。
- ・スクリプトキディ 一 自動化された脆弱性のスキャンやエクスプロイ ト。非標的型の攻撃。単なるいたずらの場合が多く、上記のアクター のいずれかによる情報漏洩により組織の評判に大きなリスクを与えま す。



パブリック/プライベートの考慮点

通常プライベートクラウドは企業や組織により、内部のネットワークや ファイアウォールの内側にデプロイされます。企業は、社内のネット ワークから出すことのできるデータが何であるか、厳密な方針が設定さ れており、特定の目的ごとに別のクラウドを設定する場合さえもありま す。プライベートクラウドのユーザーは通常、クラウドを所有して各自 の行動に責任を課される組織内の従業員です。このような従業員は、ク ラウドにアクセスする前にトレーニングセッションに出席することもし ばしばあり、定期的に予定されるセキュリティ認識トレーニングに参加 する場合も多くあります。反対に、パブリッククラウドはユーザー、ク ラウドのユースケース、ユーザーの動機を断定することができません。 このように、すぐにゲストのセキュリティドメインは、パブリッククラ ウドプロバイダーにとっては完全に untrusted な状態となります。

パブリッククラウドの攻撃対象領域での顕著な相違点は、サービスに対 してインターネットアクセスを提供しなければならない点です。API エ ンドポイントやダッシュボードなど、インスタンスの接続性、インター

ネット経由でのファイルアクセス、クラウド制御のファブリックとの対 話機能は、パブリッククラウドで必須アイテムなのです。

プライバシーの課題は、パブリッククラウドのユーザーとプライベート クラウドのユーザーとでは全く正反対になっています。プライベートク ラウドで生成・格納されているデータは通常、データ損失防止(DLP)、 ファイルの検査、ディープパケットインスペクション(DPI)、規範ファ イアウォール(Prescriptive Firewall)などの技術をデプロイ可能なク ラウドのオペレーターが所有します。反対に、パブリッククラウドには 上記の様な制御の多くが存在しないため、プライバシーは、パブリック クラウドを採用する際の主な障害の 1 つとなっています。

アウトバウンド攻撃とレピュテーションリスク

クラウドデプロイメントからアウトバウンド方向で起こりえる不正使用 に対して、十分な配慮が必要です。パブリックでも、プライベートで も、クラウドは多くのリソースが使用出来る状態になっている傾向に あります。ハッキングや与えられているアクセス権限(悪意のある従 業員) のいずれかによりクラウド内に攻撃ポイントを設定した攻撃者 は、これらのリソースにインターネット全体の負荷をかけることができ ます。Compute サービスがあるクラウドは、理想的な DDoS や総当り攻 撃エンジンを作り出します。パブリッククラウドのユーザーは多くの場 合、責任を負う必要がなく、自由に使用できるインスタンスをすぐにア ウトバウンドの攻撃として作り出すことができるため、パブリッククラ ウドにとっては、この点はより差し迫った課題でしょう。悪意のあるソ フトウェアをホストしたり、他のネットワークへ攻撃していたりしたこ とが判明すると、企業の評判に大きな打撃を与えることでしょう。防止 の方法には、egress セキュリティグループ、アウトバウンドトラフィッ クの検査、顧客の教育・認識、詐欺や悪用軽減戦略などがあります。

攻撃の種類

以下の図は、前項で説明したアクターから出される可能性のある攻撃の 種類を記載しています。このような図では常に例外が存在しますが、ア クター毎に典型的であると考えられる攻撃の種類を一般論として記述し ています。



攻撃の形式ごとの規範的な防御については、本書の対象範囲外となっています。上記の図は、対策を行うべき脅威の種類、脅威のアクターについて詳細な情報を得た状態で意思決定ができるように支援します。商業的なパブリッククラウドのデプロイに関しては重大な犯罪の防止などが含まれる場合があります。 政府で使用するプライベートクラウドをデプロイする方は、細心の注意を払って設置された対策施設やサプライチェーンなど、より厳密な保護メカニズムを設置する必要があります。 反対に、基本的なデプロイメントやテスト環境を設定する方は、制御に関する制約が少なくて済むでしょう。

第5章 事例の概要

事例:	プライベートクラウドビルダーのアリス	25
事例:	パブリッククラウドプロバイダーのボブ	25

本ガイドでは、全体を通して、2 つの運用事例を参照しています。本セ クションでは、これらを概要を説明し、各章末で参照します。

事例:プライベートクラウドビルダーの アリス

アリスは、米国のある政府機関で使用するクラウドをデプロイしていま す。このクラウドは、FedRAMP などの関連基準に準拠する必要があり、 またセキュリティ関連の文書業務を行う必要性が非常に高くなってい ます。クラウドは、インターネットには直接アクセスしてはなりませ ん。API エンドポイント、Compute インスタンス、およびその他のリ ソースは、その政府機関のネットワーク内のシステムに対してのみ公 開される必要があります。このネットワークは、他の全ネットワークか ら完全に隔離されています。クラウドは、この機関のイントラネット上 で、認証/ロギングサービスなどの他のネットワークサービスにアクセス することが可能です。

事例:パブリッククラウドプロバイダー のボブ

ボブは、新規展開の大規模なパブリッククラウドのデプロイを行う会社 のリードアーキテクトです。このクラウドは、有効なクレジットカード を持つ消費者が、ユーティリティコンピューティングやストレージに使 用できる一般大衆向けの IaaS を提供しますが、第一のターゲットは 企 業顧客です。企業の間では、データプライバシー問題は、大規模なクラ ウド導入の大きな障害とみなされているため、ボブにとって優先課題と なっています。

第6章 システムの文書化要件

システムのロールとタイプ	27
システムインベントリ	27
ネットワークトポロジー	28
サービス、プロトコル、ポート	28

OpenStack クラウドデプロイメントのシステム文書化は、その組織のエ ンタープライズ IT システムを対象とするテンプレートとベストプラ クティスに従って行うべきです。組織には大抵、コンプライアンス要 件が設定されており、それによって対象システムのインベントリ作成と アーキテクチャーの文書化を行う全体的なシステムセキュリティ計画が 義務付けられている場合があります。動的なクラウドインフラストラク チャーを文書化し、情報を最新の状態に維持するのあたっては、業界全 体の共涌課題があります。

システムのロールとタイプ

通常 OpenStack のインストールを構成している、広く定義された 2 つ のノードタイプは次のとおりです。

- インフラストラクチャーノード。OpenStack Identity Service、メッ セージキューサービス、ストレージ、ネットワーク、およびクラウド の運用をサポートするために必要なその他のサービスなどのクラウド 関連サービスを実行するノードです。
- コンピュート、ストレージ、その他のリソースのノード。クラウド用 のストレージ容量や仮想マシンを提供するノードです。

システムインベントリ

文書には、OpenStack 環境の概要を記載し、使用する全システム(実稼 働、開発、テストなど)を対象とするべきです。多くの場合、システ ムコンポーネント、ネットワーク、サービス、およびソフトウェアにつ いて文書化することにより、セキュリティ課題、攻撃ベクトル、考えら れるセキュリティドメインのブリッジングポイントを完全に網羅して検 討するにあたって必要な概観が提供されます。システムインベントリに は、従来の IT システムでは永続的なリソースとされている、仮想マシ ンや仮想ディスクボリュームなどの一時的なリソースを取り込む必要が ある場合があります。

ハードウェアインベントリ

文書化に対する厳密なコンプライアンス要件のないクラウドの場合は、 少なくとも Configuration Management Database (CMDB) を使用するこ とによってメリットが得られる可能性があります。CMDB は通常、ハード ウェア資産の追跡や全般的なライフサイクル管理に使用されます。CMDB を活用することにより、組織はネットワーク上に存在するクラウドイン フラストラクチャーハードウェア(例: コンピュートノード、ストレー ジノード、ネットワークデバイスなど)の中で適切に保護されていない ハードウェアや忘れられているハードウェアを迅速に特定することがで きます。OpenStack のプロビジョニングシステムは、ハードウェア属性 の自動検出機能が利用できる場合は特に、CMDB のような機能を一部提供 することが可能です。

ソフトウェアインベントリ

ハードウェアと同様に、OpenStack デプロイメント内のソフトウェアコ ンポーネントはすべて文書化しておくべきです。このコンポーネントに は、システムデータベース、OpenStack ソフトウェアコンポーネントお よびサポートサブコンポーネント、ロードバランサー/リバースプロキ シ/ネットワークアドレストランスレーターなどのサポートインフラスト ラクチャーソフトウェアなどが含まれます。このような信頼できる一覧 を用意しておくことは、ソフトウェアの特定のクラスの侵害や脆弱性に よってシステムが受ける全体的な影響を把握するために極めて重要とな ります。

ネットワークトポロジー

ネットワークトポロジーは、セキュリティドメイン間のデータフローと ブリッジングポイントをはっきりと識別して強調するようにして作成す べきです。OpenStack の論理的なシステム境界とともに、ネットワーク の受信および送信ポイントを明確にすることを推奨します。システムを 完全に視覚的に網羅するには、図を複数作成する必要がある場合があり ます。また、ネットワークトポロジーの文書には、テナントに代わって システムが作成した仮想ネットワークや、OpenStack によって作成され た仮想マシンインスタンスとゲートウェイを含めるべきです。

サービス、プロトコル、ポート

サービス、プロトコル、ポートの表には OpenStack デプロイメントの重 要な追加情報を記載します。クラウドインフラストラクチャー内で稼働 中の全サービスを表にまとめると、情報や指針を直ちに確認することが

でき、セキュリティプロシージャーをチェックするのに役立ちます。簡 潔な情報が提供されると、ファイアウォールの設定やサービスポートの 競合、セキュリティ修復領域、コンプライアンス要件をより容易に管理 できるようになります。以下の表を検討してください。

Service	Protocols	Ports	Purpose	Used By	Security Domain(s)
beam.smp	AMQP	tcp/5672	AMQP message service	RabbitMQ	MGMT
tgtd	iscsi	tcp/3260	iSCSI initiator service	iSCSI	PRIVATE (data network)
sshd	ssh	tcp/22	allows secure login to nodes and guest VMs	Various	MGMT, GUEST and PUBLIC as configured
mysqld	mysql	tcp/3306	MySQL database service	Various	MGMT
apache2	http	tcp/443	Horizon dashboard service	Tenants	PUBLIC
dnsmasq	dns	tcp/53	DNS services	Guest VMs	GUEST

サービス、プロトコル、ポートの表を参照すると、OpenStack のコン ポーネント間の関係を理解するのに役立ちます。OpenStack のデプロイ メントには、これと同様の情報を記録することを強く推奨します。

第7章 ケーススタディ: システム のドキュメント

アリスのプライベートクラウド	3
ボブのパブリッククラウド	3

今回のケーススタディでは、アリスとボブがシステムの文書要件にどの ように対処していくか見ていきます。上記で述べた文書には、ハード ウェアおよびソフトウェア記録、ネットワーク図、システム設定の詳細 などが含まれます。

アリスのプライベートクラウド

アリスは、FedRam 要件を満たす詳細文書が必要です。構成管理データ ベース(CMDB)を設定して、クラウド全体で使用されるハードウェア、 ファームウェア、ソフトウェアバージョンの情報を格納していきます。 また、セキュリティドメインや、複数のセキュリティドメインにまたが るサービスに細心の注意を払い、クラウドアーキテクチャーの詳細を示 したネットワーク図も作成します。

アリスは、クラウドで実行中の各ネットワークサービス、バインド先 のインターフェースやポート、各サービスに対するセキュリティドメ イン、そのサービスが必要な理由を記録する必要があります。 Python Fabric ライブラリを使用して、セキュアシェル (SSH) でクラウド内の 各システムにログインする自動化ツールを構築することにしました。こ のツールは、CMDB の情報を収集・格納して監査プロセスを簡素化しま す。

ボブのパブリッククラウド

今回のケーススタディでは、ボブはアリスと同様の手段を取ります。

第8章 管理の概要

クラウドデプロイメントは生きたシステムです。機械は老朽化して障害 が発生し、ソフトウェアは古くなり、脆弱性が発見されます。設定にエ ラーや抜けがあった場合、ソフトウェアの修正を適用する必要が出た場 合、セキュアかつ利便的に、これらの変更を加える必要があります。通 常、これらの変更は構成管理などで解決されます。

同様に、悪意のある組織により設定または操作されないように、クラ ウドデプロイメントを保護することが重要です。コンピュートやネット ワークの仮想化を採用するクラウド内の多くのシステムでは、OpenStack に適用される問題が明らかに存在し、整合性のライフサイクル管理で対 応していく必要があります。

最後に、管理者は様々なオペレーション機能に対してクラウド上で指揮 統制を行う必要があります。これらの指揮統制機能を理解、確保するこ とが重要です。

第9章 継続的なシステム管理

脆弱性の管理	35
構成管理	37
セキュアなバックアップとリカバリ	38
ヤキュリティ監査ツール	39

クラウドには必ずバグがあります。その中にはセキュリティの問題も含 まれています。このような理由から、セキュリティ更新や一般的なソフ トウェア更新の適用準備を行うことが極めて重要です。例えば、構成管 理ツールを賢く利用していくことになります。これについては以下で説 明しています。また、アップグレードが必要な時期を把握することも重 要です。

脆弱性の管理

セキュリティ関連の変更に関するお知らせは、OpenStack Announce mailing list をサブスクライブしてください。セキュリティの通知 は、パッケージ更新の一部としてサブスクライブしている可能性のある Linux ディストリビューションといったダウンストリームのパッケージ でも掲載されます。

OpenStack のコンポーネントは、クラウドにあるソフトウェアのごくー 部です。これらだけではなく他のコンポーネントすべてを最新の状態 に保つことが重要です。データソースはそれぞれデプロイメント固有と なりますが、クラウド管理者は必要なメーリングリストにサブスクライ ブして関連のセキュリティ更新の通知を受信できるようにすることが重 要です。通常、Linux のアップストリームディストリビューションをト ラッキングするのと同じくらいシンプルです。



注記

OpenStack は 2 つのチャネルからセキュリティ情報を発信し ています。

• OpenStack セキュリティアドバイザリ (OSSA: OpenStack Security Advisories) は、OpenStack 脆弱性管理チーム (VMT: Vulnerability Management Team) が作成していま す。コアとなる OpenStack サービスのセキュリティホール に関連するものです。VMT に関する詳細情報は、https:// wiki.openstack.org/wiki/Vulnerability Management を参 照してください。

• OpenStack セキュリティノート (OSSN: OpenStack Security Notes) は、VMT の作業をサポートする OpenStack セキュリティグループ (OSSG: OpenStack Security Group) が 作成しています。OSSN はソフト ウェアや一般的なデプロイメント設定のサポートにおけ る問題に対応しています。本書でも OSNN については全 体的に参照しています。セキュリティノートは https:// launchpad.net/ossn/ でアーカイブされています。

トリアージ

セキュリティ更新を通知された後、次のステップとして、指定のクラウ ドデプロイメントにとって、この更新がどの程度重要かを判断します。 このような場合、ポリシーを事前定義しておくと便利です。共通脆弱性 評価システム(CVSS)v2 などの既存の脆弱性評価システムは、クラウド デプロイメントに正しく対応していません。

以下の例では、権限昇格、DoS(サービス妨害)、情報開示の 3 つのカテ ゴリーに脆弱性を分類した評価マトリクスを紹介しています。脆弱性の 種類やインフラストラクチャー内での発生箇所を理解することで、裏付 けに基いた対応意思決定を下すことができます。

権限昇格とは、適切な認証チェックをすり抜けてシステム内の他のユー ザーの権限を行使するユーザーの能力のことを指します。例えば、標準 の Linux ユーザーがシステム上の root ユーザーの権限で自分の権限以 上の操作を可能にするオペレーションを実行したり、コードを実行した りするなどです。

サービス妨害(DoS)とは、サービスやシステムの中断を引き起こす脆弱 性を悪用することを指します。これには、ネットワークリソースを大量 に使用する分散型攻撃や、リソース割り当てのバグや誘導型でのシステ ム障害の問題などで一般的に引き起こされるシングルユーザー攻撃の両 方が含まれます。

情報開示の脆弱性は、システムや操作の情報を公開します。これらの脆 弱性は、情報開示のデバッグから認証情報やパスワードなどの重要なセ キュリティデータの公開などが当てはまります。

	攻撃者の位置付け/権限レベル			
	外部	クラウドユー ザー	クラウドの管 理者	制御プレーン
権限昇格 (3 つのレベル)	重要	なし	なし	なし

権限昇格 (2 つのレベル)	重要	重要	なし	なし
権限昇格(1 つのレベル)	重要	重要	重要	なし
サービス妨害 (DoS)	高	中	低	低
情報開示	重要/高	重要/高	中/低	低

この表は、デプロイメントの発生箇所や影響をもとに脆弱性から受 ける影響レベルを測定するための一般的な手法を示しています。例え ば、Compute API ノードで権限レベルを 1 つ昇格すると、API の標準 ユーザーはこのノード上の root ユーザーと同等の権限にまで昇格する ことが可能です。

クラウド管理者が、さまざまなセキュリティレベルに合わせて実行する アクションを定義する役に立てるために、この表をモデルとして使用す ることを推奨します。例えば、レベルが「重要」であるセキュリティ更 新では、指定のスケジュールでクラウドのアップグレードが必要となる 可能性がありますが、レベルが「低」の更新ではそこまで厳しくないで しょう。

更新のテスト

何かしらの更新を本番環境にデプロイする前に、それらをテストするよ うにしてください。一般的に、更新を最初に受信するテスト用のクラ ウド設定が別途必要になります。このクラウドのソフトウェアやハード ウェアはできるだけ実稼働クラウドと同じ環境にする必要があります。 パフォーマンスの影響、安定性、アプリケーションへの影響など、更新 全体をテストする必要があります。特に重要なのは、更新で理論上対応 されている問題(例:特定の脆弱性)が実際に修正されているかどうか を確認することです。

更新のデプロイ

更新の完全なテストが終了すると、実稼働環境にデプロイすることがで きます。このデプロイメントは、以下に記載の構成管理ツールで完全に 自動的に行われます。

構成管理

実稼働環境の品質を持つクラウドは設定とデプロイメントの自動化ツー ルを必ず使用しています。こうすることで、人的ミスをなくし、クラウ ドの迅速なスケールアウトが可能になります。自動化により、継続的し た統合やテストが行いやすくなります。

OpenStack クラウドの構築時は、構成管理ツールまたはフレームワーク を念頭に設計、実装に着手するように強く推奨します。構成管理によ り、OpenStack のように複雑なインフラストラクチャーの構築、管理、 維持において陥りやすい多くの問題を回避することができます。構成管 理ユーティリティに必要なマニフェスト、クックブック、テンプレート を作成することで、多くの文書や監督機関へのレポート要件を満たすこ とができます。さらに、構成管理は、BCP および DR プランの一部とし ても機能する可能性もあります。その場合、DR やセキュリティ侵害が 合った場合にノードやサービスを既知の状態へ再構築することができま す。

さらに、Git や SVN などのバージョン管理システムと統合すると、経年 の環境の変化をトラッキングして、発生する可能性のある未認証の変更 を修正することができます。例えば、nova.conf ファイルやその他の設 定ファイルが規格に準拠しなくなった場合、既知の状態に構成管理ツー ルはファイルを復元または置き換えることができるでしょう。最後に、 構成管理ツールを使用して、更新のデプロイも可能で、セキュリティ パッチのプロセスを簡素化します。これらのツールには、この項におい て便利な機能が幅広く含まれています。クラウドのセキュリティ確保の 主な目的は、構成管理のツールを選択して使用することです。

構成管理ソリューションは多数存在しますが、本書の作成時点で市場に あるソリューションで OpenStack 環境のサポートが強力なものは Chef と Puppet の 2 種類となっています。以下に完全ではありませんが、 ツールのリストを示しています。

- Chef
- Puppet
- Salt Stack
- Ansible

ポリシーの変更

ポリシーや構成管理が変更されると、そのアクティビティをロギングし て、新しいセットのコピーをバックアップすると慣習として良いでしょ う。通常、このようなポリシーや設定は Git などのバージョン管理リポ ジトリに保存されています。

セキュアなバックアップとリカバリ

バックアップのプロシージャーとポリシーを全体的なシステムセキュリ ティプランに含めることは重要です。OpenStack のバックアップとリカ バリー機能やプロシージャーについての適切な概要は、OpenStack 運用 ガイドを参照してください。

セキュリティの課題

- 認証済みのユーザーおよびバックアップクライアントのみがバック アップサーバーにアクセスできるようにすること
- ・ バックアップの移動やストレージにはデータ暗号化オプションを使用 すること
- セキュリティが強化された専用のバックアップサーバーを使用するこ と。バックアップサーバーのログは日次で監査し、ほんの一握りの人 だけがこのログにアクセスできるようにしなければいけません。
- データのリカバリーオプションを定期的にテストすること。セキュア なバックアップからリストアが可能なものの 1 つにイメージがありま す。情報漏洩などが発生した場合のベストプラクティスは、すぐに実 行中のインスタンスを終了して、セキュアなバックアップリポジトリ にあるイメージからインスタンスを再起動することです。

参考資料

- OpenStack 運用ガイド の バックアップとリカバリー
- http://www.sans.org/reading room/whitepapers/backup/securityconsiderations-enterprise-level-backups 515
- OpenStack セキュリティ入門

ヤキュリティ監査ツール

セキュリティ監査ツールは、構成管理ツールを補完することができま す。セキュリティ監査ツールは、セキュリティ制御の多くが指定のシス テム設定を満たしていることを確認するプロセスを自動化します。これ らのツールは、セキュリティ設定方針文書(例: STIG および NSA ガイ ド)から個別のシステムインストール環境のギャップを埋めるサポート をします。例えば、SCAP は実行中のシステムと事前定義済みのプロファ イルを比較することができます。SCAP はプロファイル内のどの制御に対 応しているか、問題があるものはどれか、確認されていないものはどれ かを詳細にまとめたレポートを出力します。

構成管理とセキュリティ監査ツールを組み合わせることで強力になりま す。監査ツールはデプロイメントの課題をハイライトし、構成管理ツー ルは各システムの変更プロセスを簡素化して監査の課題に対応していき ます。このような方法で組み合わせて使用することで、これらのツール は、基本的なセキュリティの強化からコンプライアンスのバリデーショ ンに至るまで、このようなセキュリティ要件を満たすクラウドを維持で きるようにします。

構成管理およびセキュリティ監査ツールは、もう1つのレベルで複雑性 をクラウドにもたらします。この複雑性により、新たなセキュリティの 課題が出てきます。これについては、セキュリティの利点もあるため、 許容範囲のリスクのトレードオフという見解を持っています。これら のツールの運用におけるセキュリティ確保については、本書の対象外と なっています。

第10章 完全性ライフサイクル

セキュアブートストラップ	41
ランタイムの検証	46

OpenStack では、完全性ライフサイクルを「クラウド全体にわたって想 定されているソフトウェアが想定されている設定で常に実行されること を保証する計画的なプロセス」と定義しています。このプロセスは、セ キュアなブートストラッピングで開始し、設定管理およびセキュリティ 監視の機能により維持されます。本章では、完全性ライフサイクルプロ セスのアプローチ方法について説明します。

セキュアブートストラップ

クラウド内のノード(コンピュート、ストレージ、ネットワーク、サー ビス、およびハイブリッドのノードを含む)には、自動プロビジョニン グプロセスを使用すべきです。このプロセスにより、ノードが一貫して 正しくプロビジョニングされます。また、セキュリティパッチの適用、 アップグレード、バグ修正、その他の重要な変更が円滑に行われます。 このプロセスにより、クラウド内において最高権限で実行される新規 ソフトウェアがインストールされるので、正しいソフトウェアがインス トールされることを検証することが重要となります。これには、ブート プロセスの最初期段階が含まれます。

このような初期ブート段階の検証を可能にするさまざまな技術があ ります。通常は、Trusted Platform Module (TPM)、Intel Trusted Execution Technology (TXT), Dynamic Root of Trust Measurement (DRTM)、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) などによる セキュアブートのハードウェアサポートが必要です。本ガイドでは、こ れらを総称してセキュアブートテクノロジーと呼びます。OpenStack で はセキュアブートの使用を推奨していますが、このデプロイに必要な 諸作業には、各環境用にツールをカスタマイズするための高度の技術的 スキルが必要である点を認識しています。セキュアブートの活用には、 本ガイドに記載しているその他多くの推奨事項よりも深い統合とカス タマイズが必要になります。TPM テクノロジーはこの数年、大半のビジ ネスクラスのラップトップおよびデスクトップに通常搭載されています が、BIOS のサポートとともにサーバーでも提供されるようになってきて います。セキュアブートのデプロイには、適切な計画が不可欠です。

セキュアブートのデプロイに関する完全なチュートリアルは、本書の範 囲外なので、その代わりとして、標準的なノードプロビジョニングプロ セスにセキュアブートテクノロジーを統合する方法の枠組みを提供しま す。クラウドアーキテクトが更に詳しい情報を確認するには、関連する

仕様およびソフトウェア設定のマニュアルを参照することをお勧めしま す。

ノードのプロビジョニング

ノードは、プロビジョニングに Preboot eXecution Environment (PXE) を使用すべきです。これにより、ノードの再デプロイに必要な作業が大 幅に軽減されます。標準的なプロセスでは、ノードがサーバーからさま ざまなブート段階(実行するソフトウェアが徐々に複雑化)を受信する 必要があります。



プロビジョニングには、管理セキュリティドメイン内の別個の分離した ネットワークを使用することを推奨します。このネットワークは、上記 に示した後続のブート段階のダウンロードに加えて、すべての PXE ト ラフィックを処理します。 ノードのブートプロセスは、安全性の低い DHCP および TFTP の 2 つの操作で開始する点に注意してください。次 にブートプロセスは、ノードのデプロイに必要な残りの情報を SSL を介 してダウンロードします。この情報には、initramfs とカーネルが含ま れる場合があります。このプロセスは、ノードのデプロイに必要な残り の情報のダウンロードで終了します。これは、オペレーティングシステ ムのインストーラー、Chef または Puppet によって管理される基本イン ストール、またはディスクに直接書き込まれた完全なファイルシステム イメージの場合もあります。

PXE ブートプロセス中に SSL を活用するのは若干困難ですが、iPXE な どの一般的な PXE ファームウェアプロジェクトは、この機能をサポー トしています。通常、この作業には、サーバーの証明書を適切に検証す

るための許可済み SSL 証明書チェーンについての知識を活用した PXE ファームウェア構築が伴います。これにより、安全性の低いプレーンテ キストのネットワーク操作数が制限されるので、攻撃者に対するセキュ リティレベルが高くなります。.

検証済みブート

ブートプロセスの検証には、通常 2 つの異なる戦略があります。従来 のセキュアブートは、プロセスの各ステップに実行されるコードを検 証し、コードが正しくない場合にはブートを中止します。ブートアテ ステーションは、どのステップでどのコードが実行されるかを記録し、 ブートプロセスが想定通りに完了した証拠として、この情報を別のマシ ンに提供します。いずれのケースにおいても、第 1 のステップでは、 実行前にコードの各要素を計測します。この場合、計測値は実質的に はコードの SHA-1 ハッシュで、実行前に取得されます。 このハッシュ は、TPM 内の Platform Configuration Register (PCR) に保管されま す。

注記: ここで SHA-1 を使用するのは、TPM チップが対応しているためで す。

各 TPM には少なくとも 24 の PCR が含まれます。TCG Generic Server Specification (v1.0、2005 年 3 月版) には、ブート時の完全性計測 のための PCR の割り当てが定義されています。以下の表には、標準的な PCR 設定を記載しています。コンテキストには、その値がノードのハー ドウェア(ファームウェア)をベースに決定されるか、ノードにプロビ ジョニングされているソフトウェアをベースに決定されるかを示してい ます。一部の値は、ファームウェアのバージョンやディスクサイズ、そ の他の低レベルの情報によって影響を受けます。このため、設定管理の 適切なプラクティスを整備し、デプロイするシステムが要望通りに設定 されるようにしておくことが重要となります。

レジスター	計測の対象	コンテキスト
PCR-00	Core Root of Trust Measurement (CRTM)、 BIOS コード、ホストプ ラットフォームの拡張 機能	ハードウェア
PCR-01	ハードウェアプラット フォームの設定	ハードウェア
PCR-02	オプションの ROM コード	ハードウェア
PCR-03	オプションの ROM 設定 およびデータ	ハードウェア
PCR-04	Initial Program Loader (IPL) コード	ソフトウェア

	(例: マスターブートレ コード)	
PCR-05	IPL コードの設定およ びデータ	ソフトウェア
PCR-06	状態遷移とウェイクイ ベント	ソフトウェア
PCR-07	ホストプラットフォー ムのメーカーによる制 御	ソフトウェア
PCR-08	プラットフォーム固 有、多くの場合はカー ネル、カーネル拡張機 能、ドライバー	ソフトウェア
PCR-09	プラットフォーム固 有、多くの場合は Initramfs	ソフトウェア
PCR-10 から PCR-23	プラットフォーム固有	ソフトウェア

本ガイドの執筆時点では、実稼働環境でセキュアブートテクノロジーを 使用するクラウドはほとんどありませんでした。このため、これらのテ クノロジーはまだ若干未成熟な状態です。ハードウェアは、慎重に計画 した上で選択することを推奨します(例: TPM および Intel TXT の対 応を確認するなど)。次に、ノードのハードウェアベンダーが PCR 値を どのように事前設定しているかを検証します(例:どの値を検証できる か)。上記の表のコンテキストにソフトウェアと記載されている PCR 値 は通常、クラウドアーキテクトが直接コントロールできます。ただし、 これらの値は、クラウド内のソフトウェアをアップグレードすると変更 される場合があります。設定管理は、PCR ポリシーエンジン内にリンク して、検証を常に最新の状態 に確保すべきです。

各メーカーは、サーバーの BIOS とファームウェアのコードを提供する 必要があります。サーバー、ハイパーバイザー、オペレーティングシス テムによって、事前設定される PCR 値の選択が異なります。実際のデプ ロイメントではほとんどの場合、既知の適切な量(「黄金の計測値」) と対照して各 PCR を検証することは不可能です。単一のベンダー の製 品ラインの場合でも、一定の PCR の計測プロセスに一貫性がない場合 があることが、経験により実証されています。各サーバーに基準値を定 め、 PCR 値の予期せぬ変化を監視することを推奨します。選択したハイ パーバイザーソリューションによっては、TPM プロビジョニングおよび 監視プロセスを支援する サードパーティー製のソフトウェアが提供され ている可能性があります。

上記のノードデプロイメントの戦略を前提とすると、Initial Program Loader (IPL) コードは、PXE ファームウェアである可能性が最も高 く、このため、セキュアブートまたはブートアテステーションプロセ スで、すべての初期段階のブートコード(例: BIOS、ファームウェアな

ど)、PXE ファームウェア、およびノードのカーネルを計測することがで きます。各ノードにこれらの正しいバージョンがインストールされてい ることを確認することにより、残りのノードソフトウェアスタックを構 築する土台となる強固な基盤が提供されます。

選択した戦略に応じて、障害発生時にノードがブートに失敗するか、ク ラウド内の別のエンティティに障害を報告することができます。セキュ アブートの場合には、ノードがブートに失敗し、管理セキュリティド メイン内のプロビジョニングサービスがこの問題を認識してイベントロ グを記録する必要があります。ブートアテステーションの場合には、障 害検出時にはノードがすでに稼働している状態です。この場合、ネット ワークアクセスを無効にすることによってノードの検疫を直ちに行った 後に、イベントを解析して根本原因を特定するべきです。いずれの場 合も、ポリシーにより、障害発生後の対処方法を指示する必要がありま す。クラウドが、特定の回数、ノードの再プロビジョニングを自動的に 試みるようにしたり、問題を調査するようにクラウド管理者に直ちに通 知するようにすることができます。この場合に適正となるポリシーは、 デプロイメントと障害のモードによって異なります。

ノードのセキュリティ強化機能

この時点で、ノードが正しいカーネルと配下のコンポーネントでブート していることが分かります。オペレーティングシステムのデプロイメン トのセキュリティを強化するには、数多くの方法があります。これらの 手順についての詳しい説明は本書の範囲外です。お使いのオペレーティ ングシステム固有のセキュリティ強化ガイドのアドバイスに従うこと を推奨します。例えば、security technical implementation guides (STIG) や NSA guides を最初に参考にすると役立ちます。

ノードはその性質上、追加のセキュリティ強化が可能です。実稼働用の ノードには、次の追加手順に従うことを推奨します。

- 可能な場合には、読み取り専用のファイルシステムを使用します。書 き込みが可能なファイルシステムでは、実行が許可されないようにし ます。これは、/etc/fstab で指定するマウントオプションを使用して 対処することが可能です。
- ・強制アクセス制御ポリシーを使用して、インスタンス、ノードサービ ス、その他の重要なプロセスおよびノード上のデータが含まれるよう にします。以下に記載の sVirt / SELinux および AppArmor について の説明を参照してください。
- ・ 不要なソフトウェアパッケージは削除します。これにより、コン ピュートノードの依存関係が比較的少なくなるので、インストールを 小さく絞ることができます。

最後に、ノードのカーネルには、残りのノードが既知の良好な状態で起 動することを検証するメカニズムを取り入れるべきです。これにより、 ブート検証プロセスからシステム全体の検証に至るまでの必要なリンク が提供されます。手順はデプロイメントによって異なります。例えば、 カーネルモジュールは、dm-verity を使用して、ファイルシステムを マウントする前に、そのファイルシステムを構成するブロック上のハッ シュを検証することができます。

ランタイムの検証

ノードが稼働したら、長時間にわたって良好な状態で稼働を継続するよ うに確保する必要があります。大まかに言うと、これには設定管理とセ キュリティ監視が含まれます。これらの各領域の目標は異なります。両 方を確認することにより、システムが希望通りに稼働していることをよ り確実に保証します。設定管理については、管理のセクションおよび次 のセキュリティ監視で説明します。

侵入検知システム

ホストベースの侵入検知ツールは、クラウド内部の検証の自動化にも役 立ちます。ホストベースの侵入検知ツールにはさまざまな種類がありま す。オープンソースで自由に利用できるツールもあれば、商用のツール もあります。通常、これらのツールは、さまざまなソースからデータを 分析し、ルールセットやトレーニングに基づいてセキュリティ警告を出 します。標準的な機能には、ログ解析、ファイルの完全性チェック、ポ リシー監視、ルートキット検出などがあります。また、より高度なツー ル(カスタムの場合が多い)を使用すると、インメモリープロセスイ メージがオンディスクの実行可能ファイルと一致するかどうかを確認し て、実行中のプロセスの実行状態を検証することができます。

セキュリティ監視ツールの出力の処理方法は、クラウドアーキテクトに とっての重要なポリシー決定の一つです。オプションは実質的に 2 つあ ります。第 1 のオプションは、問題を調査して修正措置を取るように、 人間に警告を発する方法です。これは、クラウド管理者向けのログまた はイベントのフィードにセキュリティ警告を組み込むことによって可能 となります。第2のオプションは、イベントのログ記録に加えて、クラ ウドが何らかの形の修復措置を自動的に実行するように設定する方法で す。修復措置にはノードの再インストールから、マイナーなサービス設 定の実行まで含めることができます。ただし、自動修復措置は、誤検知 の可能性があるため、困難となる場合があります。

誤検知は、セキュリティ監視ツールが害のないイベントのセキュリティ 警告を出した場合に発生します。セキュリティ警告ツールの性質上、

時々誤検知が発生することは間違いありません。通常、クラウド管理者 は、セキュリティ監視ツールを微調整して、誤検知を少なくすることが できますが、これにより、全体的な検知率も同時に下がる場合がありま す。このような典型的トレードオフを理解し、クラウドにセキュリティ 管理システムをセットアップする際には考慮に入れる必要があります。

ホストベースの侵入検知ツールの選択と設定はデプロイメントによって 大幅に異なります。多様なホストベースの侵入検知/ファイル監視機能を 実装する以下のオープンソースプロジェクトの検討から開始することを お勧めします。

- OSSEC
- Samhain
- Tripwire
- AIDE

ネットワーク侵入検知ツールは、ホストベースのツールを補完しま す。OpenStack には、特定のネットワーク IDS は組み込まれていま せんが、OpenStack のネットワークコンポーネントである Neutron は、Neutron API を使用して異なるテクノロジーを有効にするプラグイ ンメカニズムを提供しています。このプラグインのアーキテクチャーに より、テナントは API 拡張機能を開発して、ファイアウォール、侵入検 知システム、仮想マシン間の VPN などの独自の高度なネットワークサー ビスを挿入/設定することができます。

ホストベースのツールと同様に、ネットワークベースの侵入検知ツール はデプロイメントによって異なります。 Snort は、先進的なオープン ソースのネットワーク侵入検知ツールです。このツールを起点として、 更に知識を深めてゆくとよいでしょう。

ネットワークおよびホストベースの侵入検知システムには、いくつかの 重要なセキュリティ課題があります。

- クラウドにネットワーク IDS の配置を検討することは重要です (例: ネットワーク境界や機密性の高いのネットワークに追加するなど)。 配置はネットワーク環境によって異なりますが、追加する場所によっ て IDS がサービスにもたらす可能性のある影響を確実に監視するよう にしてください。通常 ネットワーク IDS は、SSL などの暗号化トラ フィックを調査することはできませんが、ネットワーク上の異常な非 暗号化トラフィックを特定するメリットを提供することができます。
- 一部のデプロイメントでは、ホストベースの IDS をセキュリティドメ インブリッジ上の機密性の高いコンポーネントに追加する必要がある

場合があります。ホストベースの IDS は、そのコンポーネント上の侵 害された、あるいは許可されていないプロセスによる異常なアクティ ビティを検知することができます。IDS は管理ネットワーク上で警告 およびログ情報を伝送すべきです。

第11章 管理インターフェース

Dashboard	49
OpenStack API	50
セキュアシェル (SSH)	51
管理ユーティリティ	
帯域外管理インターフェース	52

管理者は、様々な運用機能に対してクラウドの管理統制を行う必要があ ります。また、これらの管理統制機能を理解して、セキュリティの確保 を行うことが重要です。

OpenStack は、オペレーターやプロジェクト向けに複数の管理インター フェースを提供しています。

- OpenStack dashboard (Horizon)
- OpenStack API
- セキュアシェル(SSH)
- OpenStack 管理ユーティリティ (例: nova-manage, glance-manage)
- ・帯域外管理インターフェース(IPMI など)

Dashboard

OpenStack dashboard (Horizon) は、管理者やプロジェクトに対して、 クラウドベースのリソースのプロビジョンやアクセスができるように Web ベースのグラフィカルインターフェースを提供します。 ダッシュ ボードは、上述の OpenStack API に呼び出しを行うことでバックエンド サービスと対話します。

機能

- ・ クラウド管理者として、ダッシュボードはクラウドのサイズや状態の 俯瞰図を確認できます。また、ユーザーやプロジェクト(テナント) の作成、プロジェクト(テナント)へのユーザーの割り当て、ユー ザーやプロジェクトで利用可能なリソースの制限設定が可能です。
- ・ ダッシュボードでは、プロジェクト/ユーザーに対して、管理者が設定 した制限値内で自身のリソースをプロビジョニングするためのセルフ サービスポータルを提供します。

- また、Dashboard ではルーターやロードバランサーにも GUI 対応して います。例えば、Dashboard は主な Networking 機能をすべて実装す るようになりました。
- Hirozon は拡張可能な Django Web アプリケーションで、請求、監 視、追加管理ツールなど、サードパーティーの製品やサービスを簡単 にプラグインできるようにします。
- また、ダッシュボードはサービスプロバイダーや他の商業ベンダー向 けにブランディングすることも可能です。

セキュリティの課題

- Dashboard は Web ブラウザーのクッキーと JavaScript を有効にする 必要があります。
- Dashboard をホストする Web サーバーは、データの暗号化が確実に行 われるように SSL の設定をしてください。
- バックエンドとの対話に使用する Horizon Web サービスおよび OpenStack API はいずれも、サービス妨害 (DoS) などの Web 攻撃べ クトルからの影響を受けるため、必ず監視が必要です。
- ・ (デプロイメント/セキュリティ関連の問題は多数ありますが) ダッ シュボードでユーザーのハードディスクから OpenStack Image Service に直接イメージファイルをアップロードすることができるよ うになりました。サイズが GB レベルのイメージについては、Glace CLI を使用してイメージをアップロードするよう強く推奨していま す。
- ダッシュボードからセキュリティグループを作成・管理します。セ キュリティグループにより、セキュリティポリシーの L3-L4 パケット をフィルダリングして仮想マシンの保護が可能になります。

参考資料

Grizzly リリースノート

OpenStack API

The OpenStack API is a RESTful web service endpoint to access, provision and automate cloud-based resources. Operators and users typically access the API through command-line utilities (for

example, nova or glance), language-specific libraries, or thirdparty tools.

機能

- API はクラウド管理者がクラウドデプロイメントのサイズや状態の概 要を把握できるようにするだけでなく、ユーザー、プロジェクト(テ ナント)の作成、プロジェクト(テナント)へのユーザーの割り当 て、プロジェクト(テナント)ベースのリソースクォータの指定など ができるようにします。
- ・ API はリソースのプロビジョニング、管理、アクセスに使用するプロ ジェクトインターフェースを提供します。

セキュリティの課題

- API サービスはデータが確実に暗号化されるように SSL の設定が必要 です。
- Web サービスとして OpenStack API は、サービス妨害 (DoS) 攻撃な ど、よく知られている Web サイト攻撃ベクトルからの影響を受けま す。

セキュアシェル(SSH)

Linux や Unix システムの管理にはセキュアシェル (SSH) を使用する のが業界の慣習となっています。SSH は通信にセキュアな暗号化プリミ ティブを使用します。一般的な OpenStack デプロイメントでの SSH の 範囲や重要性において、SSH デプロイのベストプラクティスを把握する ことが重要です。

ホストキーのフィンガープリント

頻繁に見逃されるのが SSH ホストのキー管理の必要性です。OpenStack デプロイメントホストのすべてまたは多くが SSH サービスを提供しま す。このようなホストへの接続の信頼性を確保することが重要です。SSH ホストキーのフィンガープリントの検証に関して比較的セキュアでアク セス可能なメソッドを提供できないと、悪用やエクスプロイトの温床と なるといっても過言ではありません。

SSH デーモンにはすべてプライベートのホストキーがあり、接続すると ホストキーのフィンガープリントが提供されます。このホストキーの フィンガープリントは未署名のパブリックキーのハッシュです。これら のホストに SSH 接続する前に、ホストキーのフィンガープリントを把握

しておくことが重要です。ホストキーのフィンガープリントの検証は中 間者攻撃の検出に役立ちます。

通常、SSH デーモンがインストールされると、ホストキーが生成されま す。ホストキーの生成時に、ホストには十分なエントロピーが必要にな ります。ホストキーの生成時にエントロピーが十分にないと、SSH セッ ションの傍受が発生してしまう可能性があります。

SSH ホストキーが生成されると、ホストキーのフィンガープリントはセ キュアでクエリ可能な場所に保存されるはずです。特に有用なソリュー ションは、RFC-4255 で定義されていりょうに SSHFP リソースレコード を使用した DNS です。これをセキュアにするには、DNSSEC のデプロイ が必要になります。

管理ユーティリティ

OpenStack 管理ユーテリティは、API 呼び出しを行う、オープンソース の Python のコマンドラインクライアントです。 OpenStack サービス (nova、glance など) 毎にクライアントがあります。標準の CLI クライ アントに加え、サービスの多くには管理コマンドラインがあり、データ ベースへ直接呼び出しを行います。これらの専用の管理ユーテリティは 徐々に廃止予定となっています。

セキュリティの課題

- 場合によっては専用の管理ユーテリティ(*-manage)は直接データ ベースへの接続を使用することがあります。
- 認証情報が含まれている .rc ファイルのセキュリティが確保されてい るようにします。

参考資料

OpenStack エンドユーザーガイド の項: コマンドラインクライアントの

OpenStack エンドユーザーガイド の項 OpenStack RC ファイルのダウン ロードとソース

帯域外管理インターフェース

OpenStack コンポーネントを実行するノードにアクセスする場 合、OpenStack の管理は IPMI プロトコルなどの帯域外管理インター

フェースに依存します。 IPMI は非常に有名な仕様で、オペレーティン グシステムの実行中である場合やシステムがクラッシュした場合でもリ モートでのサーバー管理、診断、リブートを行います。

セキュリティの課題

イド

- ・ 強力なパスワードを使用してセーフガードするか、クライアント側の SSL 認証を使用してください。
- ・ネットワークインターフェースはプライベート(管理または個別) ネットワークに設定されていることw確認します。管理ドメインは ファイアウォールか他のネットワークギアで分離してください。
- ・Web インターフェースを使用して BMC/IPMI と対話する場合、常に SSL インターフェースを使用するようにしてください(例: https ま たはポート 443)。この SSL インターフェースは自己署名証明書を使 用しないようにしてください。通常、これがデフォルトとなっていま すが、正しく定義された完全修飾ドメイン名(FQDN)を使用して信頼 済みの証明書を使用するようにしてください。
- 管理ネットワークのトラフィックを監視します。トラフィックの多い Compute ノードよりも例外のトラッキングが簡単になる場合がありま す。

また、帯域外管理インターフェースはグラフィカルのコンソールアクセ スが可能な場合が多くあります。デフォルトではない可能性もあります が、これらのインターフェースは暗号化されていることがあります。こ れらのインターフェースの暗号化については、お使いのシステムのソフ トウェア文書を確認してください。

参考資料

オフ状態のサーバーのハッキング

第12章 ケーススタディ: 管理イン ターフェース

アリスのプライベートクラウド	55
ボブのパブリッククラウド	56

一般的な OpenStack 管理インターフェースと関連のバックプレーンの問 題について、ここまでに議論しました。再度、アリスとボブのケースス タディに戻って、これらの問題を見ていきます。特に、アリスとボブが 以下の点をどのように対応したかを確認していきます。

- クラウド管理
- ・セルフサービス
- データの複製およびリカバリー
- SLA およびセキュリティの監視

アリスのプライベートクラウド

プライベートクラウドを構築する際、エアギャップはされていますが、 アリスはサービス管理インターフェースを検討する必要があります。プ ライベートクラウドをデプロイする前に、システム文書を書き上げまし あ。特に、どの OpenStack サービスが各セキュリティドメインに存在 するかを特定しました。そこから、アリスは、IDS、SSL、暗号化、物理 的なネットワークの分離を組み合わせてデプロイすることで、管理イン ターフェースへのアクセスをさらに制限しました。また、高可用性や冗 長サービスも必要とするため、様々な OpenStack API サービスに対して インフラストラクチャーの冗長設定を行いました。

また、物理サーバーと Hypervisor は既知のセキュアな状態から十分に 定義された設定へと確実に構築されるようにする必要があります。こ れを可能にするには、構成管理プラットフォームを合わせて使用して、 準拠する必要のある規格や規定に従い各マシンを設定していきます。 また、構成管理プラットフォームは、クラウドの状態を定期的に報告 して、通常以外のことが発生した場合に既知の状態に修正することがで きます。さらに、PXE システムを使用することで、既知のベースイメー ジからノードを構築してハードウェア保証を提供することができます。 ブートプロセス時に、そのハードウェアから提供される Intel TXT や関 連の信頼できるブート技術を有効にすることでさらなる保証を確保でき ます。

ボブのパブリッククラウド

パブリッククラウドのプロバイダーとして、ボブは管理インターフェー スの継続的な可用性と、管理インターフェースへのトランザクションの セキュリティの両方を考慮しています。このように、ボブは、クラウド が実行するサービスに対して、複数の冗長 OpenStack API エンドポイン トを実装します。さらに、パブリックネットワークでは、SSL を使用し て、顧客とクラウドインターフェースの間のトランザクションをすべて 暗号化します。クラウドの運用を分離するために、ボブは管理、インス タンス移行、ストレージネットワークを物理的に分離しました。

管理オーバーヘッドのスケーリングや削減を簡単にするため、構成管理 システムを実装します。顧客のデータ保証に対しては、顧客ごとに要件 が変わるためサービス商品としてバックアップを提供します。最後に、 「ベアメタル」やノード全体のスケジュール機能を提供せず、管理オー バーヘッドの削減、運用効率の向上を図るため、ノードのブート時間に おけるセキュリティ実装はありません。

第13章 SSL/TLSの導入

認証局(CA)	58
SSL/TLSライブラリ	59
暗号化アルゴリズム、暗号モード、プロトコル	59
概要	59

OpenStack のサービスは、管理ネットワーク経由の他の内部サービスか らのリクエストと同様、パ ブリックネットワーク上のユーザによるリク エストを受信します。サービス間通信は、デプロイとアーキテクチャ選 択によってはパブリックネットワーク経由で行われる事もあります。

パブリックネット上のデータはSecure Sockets Laver や Transport Laver Security (SSL/TLS)プロトコルのような暗号化方式を使用して セキュリティを確保すべきであるという事は一般に認識されている一方 で、内部トラフィックの保護の為セキュリティドメイン分割に依存する 事は不十分です。security-in-depth アプローチを用いて、管理ドメイ ンサービスを含め、SSL/TLSを用いて全ドメインをセキュリティ確保す る事を推奨します。テナントがVM分割を回避して、ハイパーバイザーや ホストリソースへのアクセスを得て、APIエンドポイントやあらゆる他 のサービスを妥協させる事は重大です。テナントが容易にインジェクト したり、メッセージ・コマンド・その他クラウド上の管理機能に影響を 与える又は制御する事が出来るようにスべきではありません。SSL/TLS は、OpenStackサービスへのユーザ通信やOpenStackサービス自体の相互 間通信の認証、回避不能、秘密性、完全性を確保する仕組みを提供しま す。

Public Kev Infrastructure (PKI)は認証、偽証不可、秘匿性、完全性を 提供するセキュアなシステムを運用するハードウェア、ソフトウェア、 ポリシーのセットです。PKIのコアコンポーネントは以下の通り。

- End Entity 証明対象のユーザ、プロセス、システム
- 認証局 (Certification Authority、CA) 証明ポリシーの定義、管 理、証明書の発行
- Registration Authority (RA) -CAが一定の管理機能を委任する追加シ ステム
- リポジトリ End Entity が証明され、証明書の廃止リストが保存・ 参照される場所 - 時々「証明バンドル(Certificate bundle)」と呼ば れます。

• Relying Party - CAが有効であると証明するエンドポイント

PKIはデータと認証をセキュアにする暗号アルゴリズム、暗号モー ド(cipher mode)、プロトコルの フレームワークをバンドルしてい ます。APIエンドポイントの為のSSL/TLS 使用を含み、Public Key Infrastructure (PKI)を用いて、全サービスをセキュアにする事をお勧 めします。暗号化や通信路・メッセージの署名の為に、これら全ての問 題を解決する事は重要です。プライベート証明と鍵の保護の為、ホスト 自身がセキュアで、ポリシー、ネームスペース、その他の制御を実装し なければなりません。しかし、キー管理や保護のチャレンジはこれらの 制御の必要性を削減したり、その重要性を失ったりはしません。

認証局(CA)

多くの組織には、内部のOpenStackユーザやサービス用に証明書を発行す る為に使用されるべき場所用の自身の認証局(CA)、証明ポリシー、管理 を備えたPublic Key Infrastructure (PKI)が設置されています。加え て、パブリックセキュリティドメインがインターネットに面している所 の組織は、幅広く認識された公共のCAにより署名された証明書が必要に なるでしょう。管理ネットワーク上の暗号化通信用には、パブリックCA を使用しない事をお勧めします。代わりに、多くのデプロイでは自身の 内部CAを設置していると思いますし、推奨します。

OpenStackクラウドアーキテクトには、内部のシステムと顧客が接する サービス用に、分断されたPKIデプロイの使用を検討する事をお勧めしま す。これは、クラウドをデプロイする人が他の物が内部のシステム用に 証明書を要求・署名・デプロイする事を容易にするPKIインフラを制御で きるようにします。異なる設定 は異なるセキュリティドメイン用にPKI デプロイを分割使用しても構いません。これは、デプロイする人が環境 の暗号の分断を管理できるようにし、一方で発行された証明書が他方で 認証されない事を保証します。

インターネットに面したクラウドのエンドポイント(あるいは証明書を バンドルした標準的なOS以外の何かがインストールされていると顧客 が想定していない顧客インターフェース)上のSSL/TLSに対応に使用さ れる証明書はOSの証明書バンドル中にインストールされるCAを用いてプ ロビジョニングされるべきです。通常、有名ベンダーにはベリサインや Thawteを含みますが、他の多くのベンダーもあります。

証明書の作成・署名については多数の管理・ポリシー・技術的ハードル があるため、証明書は、 ここで推奨されたガイドに加え、クラウドアー キテクトや運用者が工業リーダーやベンダのアドバイスを望みうる所で す。

SSL/TLSライブラリ

OpenStackエコシステムやOpenStackが依存する様々なコンポーネント、 サービス、アプリケーションはSSL/TLSライブラリを使用するよう実装 され、設定ができるようになっています。OpenStack中のSSL/TLSとHTTP サービスは通常、非常にセキュアである事が証明され、FIPS 140-2用に 検証されてきたOpenSSLを使用して実装されています。しかし、各アプリ ケーション又はサービスは、OpenSSLライブラリをどのように使用するか という点で、未だ脆弱性を招きうるという事を忘れないで下さい。

暗号化アルゴリズム、暗号モード、プロ トコル

我々は TLS v1.1 又は v1.2 の使用のみ推奨します。SSL v3 と TLS v1.0 は互換性目的で使用出来ますが、我々は、注意深く、これらのプロ トコルの有効化が強い要望としてある場合にのみ有効にする事をお勧め します。他のSSL/TLSバージョン(はっきり言えば古いバージョン)は使用 すべきではありません。これらの古いバージョンには SSL v1 と v2 が 含まれます。本書では暗号方式の初めから終わりまでの参考書を志向し ていない為、我々はあなたのOpenStackサービス中でどの特定アルゴリズ ムや暗号モードを有効・無効にすべきかについて指図する事を望みませ ん。しかしながら、今後の情報としてお勧めしたい権威ある参考文献が あります。

- National Security Agency, Suite B Cryptography
- OWASP Guide to Cryptography
- OWASP Transport Layer Protection Cheat Sheet
- SoK: SSL and HTTPS: Revisiting past challenges and evaluating certificate trust model enhancements
- The Most Dangerous Code in the World: Validating SSL Certificates in Non-Browser Software
- OpenSSL and FIPS 140-2

概要

OpenStack コンポーネントの複雑さとデプロイの発展性を考慮すると、 確実に各コンポーネントがSSL証明書・鍵・CAを適切に設定されている事 に注意を払う必要があります。以下のサービスは(標準機能又はSSLプロ キシ経由可のどちらかで)SSLとPKIが利用可能な本書の後の章で議論しま す。

- Compute APIエンドポイント
- Identity APIエンドポイント
- Networking APIエンドポイント
- · ストレージAPIエンドポイント
- ・メッセージングサーバー
- データベースサーバー
- Dashboard

本書の至る所で、我々はSSLをSSL/TLSプロトコルに関する推奨を示す略 称として使用します。

第14章 ケーススタディ: PKI と証 明書管理

アリスのプライベートクラウド	6
ボブのパブリッククラウド	6

このケーススタディでは、アリスとボグがPKI認証局(CA)の構築と証明書 管理をどのように行うのかについて解説します。

アリスのプライベートクラウド

アリスは政府機関のクラウドアーキテクトで、彼女の機関が独自のCAを 運用している事を知っています。アリスは、彼女のPKIを管理して証明書 を発行する職場の PKI オフィスにコンタクトします。アリスはこのCAに よって発行された証明書を入手し、これらの証明書を使用するようパブ リックと管理セキュリティドメインの両方のサービスを設定します。ア リスの OpenStack デプロイが完全にインターネットから独立して存在 するので、OpenStack サービスが彼女の組織の CA から発行されたクラ イアント証明書のみ許可するよう、外部のパブリックな CA プロバイダ を含むデフォルトの全 CA バンドルが削除されている事を確認していま す。

ボブのパブリッククラウド

ボブはパブリッククラウドのアーキテクトで、インターネットに接続さ れた OpenStack サービスが主要な公的 CA から発行された証明書を確実 に使用する必要があります。ボブは彼のパブリックな OpenStack サービ ス用の証明書を受領し、PKI と SSL を使用するようサービスを設定し、 彼のサービス用の信用バンドル中に公的CAが含まれるようにします。更 に、ボブはセキュリティ管理ドメイン内でサービス間の内部通信の更な る分断をしたいとも思っています。ボブは、彼の組織中で、内部CAを使 用して彼の組織の PKI 管理と証明書の発行を担当しているチームにコン タクトします。ボブはこの内部CAが発行した証明書を入手し、これらの 訂明書を使用するよう管理セキュリティドメイン中での诵信を行うサー ビスを設定し、内部CAが発行したクライアント証明書のみ許可するよう サービスを設定します。

第15章 SSLプロキシとHTTPサービ

例	63
nginx	67
HTTP Strict Transport Security	68

OpenStack エンドポイントはパブリックネットワーク上のエンドユーザ と管理ネットワークを介して操作する同じデプロイ中の他 OpenStack サービスとの両方に対して API を提供する HTTP サービスです。これら のリクエスト(内部と外部の両方)を SSL 上で操作する事を強く推奨し ます。

API リクエストを SSL で暗号化する為に、APIサービスはSSLセッショ ンを確立・切断するプロキシの後ろに位置する必要があります。下記の 表はAPIリクエスト用にSSLトラフィックをプロキシ可能なソフトウェア サービスの(あまり厳密でない)一覧を示しています。

- Pound
- Stud
- nginx
- Apache httpd
- ・ハードウェアアプライアンス SSLアクセラレーションプロキシ

選択したSSLプロキシによって処理されるリクエストのサイズを気にする 事は重要です。

例

以下に、幾つかの主な有名 Web サーバ/SSL 終端でSSLを有効にする為 の幾つかの推奨設定例を示します。クライアント互換性の為に多くのデ プロイで必要になる筈なので、幾つかの例ではSSL v3 が有効になってい る点に注意して下さい。

設定を掘り下げる前に、暗号の設定要素とその形式について簡単に議論 します。利用可能な暗号におけるより包括的な使い方、および OpenSSL 暗号一覧形式が ciphers にあります。

ciphers = "HIGH: !RC4: !MD5: !aNULL: !eNULL: !EXP: !LOW: !MEDIUM"

٥r

ciphers = "kEECDH:kEDH:kRSA:HIGH:\RC4:\MD5:\aNULL:\eNULL:\EXP:\LOW:\MEDIUM"

暗号オプションの文字列は「:|で区切られます。「!」は直後の要素の 否定を意味します。要素の順番は、HIGH のような修飾語句により上書き されない限り、優先度を意味します。上のサンプル文字列の要素をもう 少し具体的に見ていきましょう。

kEECDH: kEDH 楕円曲線ディフィー・ヘルマン (EECDH や ECDHE と 略す)

> 一時ディフィー・ヘルマン (EDH や DHE と略す) は 素体グループを使用します。

> どちらの方法も Perfect Forward Secrecy (PFS) を 提供します。

一時楕円曲線はサーバーが名前付き曲線を用いて設 定されている必要があります。素体グループよりセ キュリティが高く、計算コストが低いです。しかし ながら、素体グループはより幅広く実装されている ので、一般的にどちらも一覧に含まれます。

kRSA RSA の鍵交換、認証、またはその両方を使用する暗

号スイート。

HIGH ネゴシエーション段階で利用可能な最高のセキュリ

ティ暗号を選択します。これらは一般的に 128 ビッ

ト以上の鍵を持ちます。

RC4 使用不可。RC4 は TLS/SSL V3 の文脈で欠陥が !RC4

あります。 On the Security of RC4 in TLS and

WPA を参照してください。

IMD5 MD5 使用不可。MD5 は衝突耐性がないため、メッ

セージ認証コード(MAC)や署名に利用できません。

laNULL:leNULL 平文を禁止します。

!EXP export 暗号アルゴリズムを無効化します。これは、

設計として弱く、一般的に 40 ビットか 56 ビット

の鍵を使用しています。

暗号システムにおけるアメリカ輸出規制を解かれて いて、もはやサポートする必要がありません。

!LOW:!MEDIUM

ブルートフォース攻撃への脆弱性のため、低度 (56/64 ビット長の鍵) と中程度 (128 ビット長の 鍵) の暗号を無効化します (例: 2-DES)。この制 限は、Triple Data Encryption Algorithm (TDEA) としても知られている Triple Data Encryption Standard (3-DES), Advanced Encryption Standard (AES) を利用可能なままにします。このどちらも 128 ビット以上の鍵を持つため、よりセキュアで

プロトコル

プロトコルは SSL CTX set options により有効化、 無効化できます。SSLv2 を無効化し、TLS や SSLv3 (いくつか変更をして TLS として標準化されました) を有効化することを推奨します。

Pound (AES-NI アクセラレーション付き)

```
## see pound(8) for details
## global options:
         "swift"
User
         "swift"
Group
#RootJail "/chroot/pound"
## Logging: (goes to syslog by default)
## 0 no logging
## 1
     normal
## 2 extended
## 3 Apache-style (common log format)
LogLevel
## turn on dynamic scaling (off by default)
# Dyn Scale 1
## check backend every X secs:
Alive
         30
## client timeout
#Client
## allow 10 second proxy connect time
## use hardware-acceleration card supported by openssl(1):
SSLEngine "aesni"
# poundctl control socket
Control "/var/run/pound/poundctl.socket"
```

```
## listen, redirect and ... to:
## redirect all swift requests on port 443 to local swift proxy
ListenHTTPS
   Address 0.0.0.0
   Port
            443
   Cert
            "/etc/pound/cert.pem"
    ## Certs to accept from clients
    ## CAlist
                    "CA file"
    ## Certs to use for client verification
    ## VerifyList "Verify file"
    ## Request client cert - don't verify
                   "AES256-SHA"
    ## Ciphers
    ## allow PUT and DELETE also (by default only GET, POST and HEAD)?:
   NoHTTPS11 0
    ## allow PUT and DELETE also (by default only GET, POST and HEAD)?:
    xHTTP
    Service
        BackEnd
            Address 127.0.0.1
            Port
                   80
        End
   End
End
```

Stud

この Stud の例は、クライアント互換性の為に SSL v3 を有効にしてい ます。ciphers 行は必要に応じていじる事が出来ますが、しかしながら この例の値は合理的な初期値です。

```
# SSL x509 certificate file.
pem-file = "
# SSL protocol.
ssl = on
# List of allowed SSL ciphers.
# OpenSSL's high-strength ciphers which require authentication
# NOTE: forbids clear text, use of RC4 or MD5 or LOW and MEDIUM strength
ciphers
ciphers = "HIGH:!RC4:!MD5:!aNULL:!eNULL:!EXP:!LOW:!MEDIUM"
# Enforce server cipher list order
prefer-server-ciphers = on
# Number of worker processes
workers = 4
# Listen backlog size
backlog = 1000
# TCP socket keepalive interval in seconds
keepalive = 3600
# Chroot directory
chroot = ""
```

```
# Set uid after binding a socket
user = "www-data"
# Set gid after binding a socket
group = "www-data"
# Quiet execution, report only error messages
quiet = off
# Use syslog for logging
syslog = on
# Syslog facility to use
syslog-facility = "daemon"
# Run as daemon
daemon = off
# Report client address using SENDPROXY protocol for haproxy
# Disabling this until we upgrade to HAProxy 1.5
write-proxy = off
```

nginx

この nginx の例は、セキュリティを最大化する為に TLS v1.1 又は v1.2 を必要とします。ssl ciphers 行は必要に応じていじる事ができま すが、しかしながらこの例の値は合理的な初期値です。

```
server {
    listen : ssl;
    ssl certificate;
    ssl certificate key;
    ssl protocols TLSv1.1 TLSv1.2;
    ssl ciphers HIGH: !RC4: !MD5: !aNULL: !eNULL: !EXP: !LOW: !MEDIUM
    server name ;
    keepalive_timeout 5;
    location / {
```

Apache

```
<VirtualHost <ip address>:80>
 ServerName <site FQDN>
 RedirectPermanent / https://<site FQDN>/
</VirtualHost>
<VirtualHost <ip address>:443>
 ServerName <site FQDN>
 SSLEngine On
 SSLProtocol +SSLv3 +TLSv1 +TLSv1.1 +TLSv1.2,
```

```
SSLCipherSuite HIGH: !RC4: !MD5: !aNULL: !eNULL: !EXP: !LOW: !MEDIUM
  SSLCertificateFile
                       /path/<site FQDN>.crt
  SSLCACertificateFile /path/<site FQDN>.crt
 SSLCertificateKeyFile /path/<site FQDN>.key
  WSGIScriptAlias / <WSGI script location>
  WSGIDaemonProcess horizon user=<user> group=<group> processes=3 threads=10
  Alias /static <static files location>
  <Directory <WSGI dir>>
    # For http server 2.2 and earlier:
   Order allow, deny
   Allow from all
    # Or, in Apache http server 2.4 and later:
    # Require all granted
  </Directory>
</VirtualHost>
```

Apache2 中の Compute API SSL エンドポイント(短い WSGI スクリプト と組み合わせる必要あり)

```
<VirtualHost <ip address>:8447>
 ServerName <site FQDN>
  SSLEngine On
  SSLProtocol +SSLv3 +TLSv1 +TLSv1.1 +TLSv1.2,
  SSLCipherSuite HIGH: !RC4: !MD5: !aNULL: !eNULL: !EXP: !LOW: !MEDIUM
                       /path/<site FQDN>.crt
  SSLCertificateFile
  SSLCACertificateFile /path/<site FQDN>.crt
  SSLCertificateKeyFile /path/<site FQDN>.key
  WSGIScriptAlias / <WSGI script location>
  WSGIDaemonProcess osapi user=\user> group=\understand group> processes=3 threads=10
  <Directory <WSGI dir>>
    # For http server 2.2 and earlier:
    Order allow, deny
   Allow from all
    # Or, in Apache http server 2.4 and later:
    # Require all granted
  </Directory>
</VirtualHost>
```

HTTP Strict Transport Security

全ての製品で HSTS を使用する事を推奨します。このヘッダは、ブラウ ザが単一のセキュアな接続を確立した後に、セキュアでない接続を確立 する事を防止します。パブリック上あるいは信用出来ないドメイン上の HTTP サービスをデプロイした場合、HSTS は特に重要です。HSTS を有効 にするためには、全リクエストでこのようなヘッダを送信するよう Web サーバを設定します。

Strict-Transport-Security: max-age=31536000; includeSubDomains

テストでは1日の短いタイムアウトで始め、テストでユーザに問題が発生 しなかった事を確認した後で設定を1年まで増やします。一旦このヘッ ダに大きなタイムアウトを設定してしまうと、無効化する事は(設計上) 非常に困難です。

第16章 APIエンドポイント構成に 関する推奨事項

内部API通信	71
Paste と ミドルウェア	72
APTエンドポイントのプロセス分離とポリシー	73

この章では外部と内部のエンドポイントのセキュリティ向上するための 推奨事項を提供します。

内部API诵信

OpenStackはパブリックとプライベート両方のAPIエンドポイントを提供 します。デフォルトでは0penStackコンポーネントはパブリックとして定 義されたエンドポイントを使用します。推奨はこれらのコンポーネント を適切なセキュリティドメイン内で使用するよう構成することです。

サービスはOpenStackサービスカタログに基づいて、それぞれのAPIエン ドポイントを選択します。ここでの問題は、これらのサービスがリスト された外部もしくは内部APIエンドポイントの値に従わないことがありま す。これは内部管理トラフィックが外部APIエンドポイントへルーティン グされる可能性があります。

認証サービスのカタログ内の内部URL構成

Identity Service のカタログは内部 URL を認識できるようにすべきで す。この機能はデフォルトで利用されませんが、設定により有効化でき ます。さらに、この動作が標準になると、予期される変更と前方互換性 があるべきです。

エンドポイント用の内部URL登録

- \$ keystone endpoint-create ¥
- --region RegionOne ¥
- --service-id=1ff4ece13c3e48d8a6461faebd9cd38f ¥
- --publicurl='https://public-ip:8776/v1/%(tenant id)s' ¥
- --internalurl='https://management-ip:8776/v1/%(tenant id)s' ¥
- --adminurl='https://management-ip:8776/v1/%(tenant id)s'

内部URL用のアプリケーション構成

いくつかのサービスは特定のAPIエンドポイントの仕様を強制することが できます。従って、それぞれのOpenStackサービスと他サービスとの通信 は明示的に適切な内部APIエンドポイントへアクセスするよう構成する必 要があります。

各プロジェクトで一貫性の無いAPIエンドポイントを提供しています。将 来のリリースにおいてこれらの不一致を認証サービスカタログを使った 一貫性で解決しようとしています。

構成例#1: Nova

[DEFAULT]

cinder catalog info='volume:cinder:internalURL' glance protocol='https' neutron url='https://neutron-host:9696' neutron admin auth url='https://neutron-host:9696' s3 host='s3-host' s3 use ssl=True

構成例#2: Cinder

glance host='https://glance-server'

Paste と ミドルウェア

OpenStack内のほぼ全てのAPIエンドポイントと他のHTTPサービスは PythonのPaste Deployライブラリを利用しています。これはアプリケー ションの設定によってリクエストフィルターのパイプラインが操作が可 能だと理解することがセキュリティの観点から重要になります。このパ イプライン連鎖の中のそれぞれの要素はmiddlewareとして呼ばれていま す。パイプラインの中でフィルター順序を変更したり、ミドルウェアを 追加すると予期しないセキュリティ上の影響が発生する可能性がありま す。

実装者がOpenStackの基本機能を拡張するためにミドルウェアを追加する ことは珍しくはありません。私たちは非標準のソフトウェアコンポーネ ントをHTTPリクエストパイプラインへ追加することによって生じる潜在 的なセキュリティについて慎重に検討する事を推奨しています。

Paste Deployに関する追加情報 http://pythonpaste.org/deploy/

APIエンドポイントのプロセス分離とポリ シー

特にパブリックなセキュリティドメインに属するAPIエンドポイントプロ セスは可能な限り分離すべきです。ディプロイメント可能であれば、API エンドポイントは分離のために増設されたホスト上に構成すべきです。

名前空間

多くのOSは現在コンパートメント化をサポートしています。Linuxでは プロセスに独立したドメインを割り当てる名前空間をサポートしていま す。システムのコンパートメント化についてはこのマニュアルの別の部 分で詳しく説明されています。

ネットワークポリシー

APIエンドポイントは一般的に複数のセキュリティドメインをまたがるた め、APIプロセスのコンパートメント化には特別の注意を払うべきです。 追加の情報に関してはこの章のSecurity Domain Bridging を参照してく ださい。

慎重なデザインを行えば、ネットワークACLとIDS技術をネットワーク サービス間の特定の通信に摘要する事が出来ます。重要なドメインをま たがるサービスとして、OpenStackのメッセージキューにこの手の明示的 な強制は適しています。

ポリシーの強制はホストベースのファイアウォール(例えばiptables)や ローカルポリシー(SELinuxやAppArmor)、グローバルなネットワークポリ シーによって設定することができます。

強制アクセス制御

APIエンドポイントのプロセスはマシン上の他のプロセスと分離されるべ きです。これらのプロセスの構成は任意のアクセス制御方法ではなく、 強制アクセス制御によって制限されるべきです。これらのアクセス制御 の目的はAPIエンドポイントのセキュリティ侵害の抑制と、特権侵害の防 止です。強制アクセス制御を利用する事で、禁止されたリソースへのア クセスが厳しく制限され、早期の警告が得られるようになります。

第17章 ケーススタディ: API エン ドポイント

アリスのプライベートクラウド	75
ボブのパブリッククラウド	75

このケーススタディでは、アリスとボブがどうやってプライベートクラ ウドとパブリッククラウドのエンドポイント設定を堅牢化するかについ て議論します。 アリスのプライベートクラウドは公開されたものではあ りませんが、不適切な使い方によるエンドポイント侵害を憂慮していま す。ボブのパブリッククラウドは、外部からの攻撃に対してリスクを低 減する措置を講じなければいけません。

アリスのプライベートクラウド

アリスが所属する組織では、パブリックとプライベートのエンドポイン トへのアクセスに対してセキュリティ対策を講じることが義務付けら れています。そこで彼女は、パブリックとプライベートのサービスに対 して Apache SSL Proxy を構築しました。 また、アリスの組織では自 前の認証局を用意しています。アリスは、公開鍵暗号基盤の管理と証明 書を発行する部署からもらった証明書を、パブリック側と管理側のセ キュリティドメイン両方に設定しました。 アリスの OpenStack 環境は インターネットからは完全に隔絶されているため、証明書から外部の公 開認証局を含む CA バンドルを削除しました。これにより、アリスの OpenStack 環境が受け付ける証明書は、組織の認証局が発行したクライ アント証明書のみになります。 アリスは内部アクセス用の Internal URL 越しに、全サービスを Keystone サービスカタログに登録し、ま た、ホストベースの侵入検知システムを全 API エンドポイントに設定し ました。

ボブのパブリッククラウド

ボブもまた、パブリックとプライベートエンドポイントを守る必要があ るため、 Apache SSL proxy をパブリックサービスと内部サービスの両 方に使います。 パブリックサービス側には、よく知られている認証局 が署名した証明書キーファイルを、内部サービス側には、自組織が発行 した自己署名証明書を管理ネットワーク上のサービスに設定しました。 サービスの登録は、内部アクセス用の Internal URL 越しに、Keystone サービスカタログに登録してあります。 また、ボブのパブリッククラ ウドサービスは、強制アクセス制御のポリシーで設定した SELinux 上

で動かしています。これにより万が一、公開サービスが攻撃されても、 セキュリティ侵害による影響を減らすことができます。 さらに、ホスト ベースの侵入検知システムをエンドポイントに設定しました。

第18章 Identity

認証	
認証方式	78
認可	80
ポリシー	81
トークン	83
将来	84

OpenStack Identity Service (Keystone) は、ユーザー名・パスワー ド、LDAP、外部認証方式など、複数の認証方式をサポートします。認証 に成功すると、Identity Service は後続のサービスリクエストに使用す る認可トークンをユーザーに返します。

Transport Layer Security TLS/SSL は、サービスと人の間で X.509 を 使用した認証を提供します。SSL の規定のモードはサーバーのみを認証 しますが、証明書はクライアントを認証するためにも使用されるかもし れません。

認証

無効なログイン試行

Identity Service は、ログイン試行が連続して失敗した後に、アカウン トへのアクセスを制限する方法を提供していません。何度も失敗するロ グイン試行はブルートフォース攻撃(図「攻撃の種類」参照)のような ものです。これは、パブリッククラウドでは、より重要な問題です。

ログイン試行を指定した回数だけ失敗すると、アカウントをブロックす るような外部認証システムを使用することにより、防止することができ ます。アカウントは、別の連絡手段を介してのみ、ロック解除するよう にできます。

もし防止することが選択肢になければ、被害を減らすために、検知する ことができます。検知は、アカウントへの権限のないアクセスを特定す るために、アクセス制御ログを頻繁にレビューすることを意味します。 その他の改善法としては、ユーザーパスワードの強度のレビュー、ファ イアウォールルールで攻撃のネットワーク送信元のブロックなどがあり ます。接続数を制限するという、Keystone サーバのファイアウォール ルールは、攻撃の効率を悪くし、攻撃者をあきらめさせるために使用で きます。

さらに、普通でないログイン回数や疑わしいアクションに対して、アカ ウントの活動状況を確認することは有用です。可能ならば、アカウント を無効化します。しばしば、このアプローチはクレジットカード提供者 により、詐欺の検出や警告のために使用されます。

多要素認証

権限のあるユーザーアカウントにネットワークアクセス用の多要素認証 を使用します。Identity Service はこの機能を提供できる Apache Web サーバーを通して外部認証サービスをサポートします。サーバーは証明 書を使用したクライアント認証を強制することもできます。

この推奨事項は、管理者パスワードを流出させる可能性のある、ブルー トフォース、ソーシャルエンジニアリング、標的型と無差別のフィッシ ング攻撃に対する防御になります。

認証方式

内部実装認証方式

Identity Service はユーザーのクレデンシャルを SQL データベースに 保存できます。または、LDAP 対応のディレクトリサーバーを使用できま す。Identity Service のデータベースは、保存されているクレデンシャ ルが漏洩するリスクを減らすために、他の OpenStack サービスが使用す るデータベースと分離することもできます。

認証がユーザー名とパスワードで行われている場合、Identity Service は NIST Special Publication 800-118 (draft) により推奨されてい る、パスワード強度、有効期限、ログイン試行回数制限に関するポリ シーを強制できません。より強固なパスワードポリシーを強制したい組 織は、Kevstone Identity Service 拡張や外部認証サービスの使用を検 討すべきです。

LDAP により、組織の既存のディレクトリサービスやユーザーアカウント 管理プロセスに Identity 認証を統合することをシンプルにできます。

OpenStack の認証と認可のポリシーは、外部 LDAP サーバーに権限委譲 することができます。一般的なユースケースは、プライベートクラウ ドの導入を検討していて、すでに従業員とユーザーのデーターベースを 持っている組織です。これは LDAP システムにあるかもしれません。権 限のある認証のソースとして LDAP を使用することが、LDAP サービスに 権限委譲している Identity Service に要求されます。このサービスが

ローカルに設定されたポリシーに基づいて認可または拒否します。トー クンは認証が成功した場合に生成されます。

LDAP システムがユーザーに対して定義された、幹部社員、経理、人事な どのような属性を持っている場合、これらはさまざまな OpenStack サー ビスにより使用するために Identity の中でロールとグループにマッピ ングされる必要があります。

Identity Service は OpenStack の外部にある認証用 LDAP サービスに 書き込みを許可してはいけません。十分な権限を持つ keystone ユー ザーが LDAP ディレクトリに変更を加えられるようになるからです。こ れにより、より広い範囲の組織に権限が増えたり、他の情報やリソース に権限のアクセスが容易になったりするかもしれません。このような環 境では、ユーザーの払い出しが OpenStack 環境のレルムの範囲外になる かもしれません。



注記

keystone.conf のパーミッションに関する OpenStack Security Note (OSSN) があります。

潜在的な DoS 攻撃に関する OpenStack Security Note (OSSN) があります。

外部認証方式

組織は、既存の認証サービスとの互換性のために外部認証を実装したい かもしれません。または、より強固な認証ポリシー要件を強制するた めかもしれません。パスワードが認証のもっとも一般的な形式ですが、 キー入力ロギングやパスワード推測など、さまざまな方法で破られる可 能性があります。外部認証サービスにより、弱いパスワードのリスクを 最小化する他の認証形式を提供できます。

これらは以下のものが含まれます。

- ・パスワードポリシー強制: ユーザーパスワードが、長さ、文字種の 量、有効期限、失敗試行回数の最低基準を満たしていることを要求し ます。
- ・ 多要素認証: 認証サービスが、ユーザーが持っているもの(例: ワン タイムパスワードトークン、X.509 証明書)と知っていること(例: パスワード)に基づいた情報を提示するよう要求します。
- Kerberos

認可

Identity Service はグループとロールの概念をサポートします。 ユーザーはグループに所属します。グループはロールの一覧を持ちま す。OpenStack サービスはユーザーがサービスにアクセスしようとし ているロールを参照します。OpenStack ポリシー判定ミドルウェアによ り、各リソースに関連付けられたポリシールール、ユーザーのグループ とロール、テナント割り当てを考慮して、要求されたリソースへのアク セスが判断されます。

ポリシー強制ミドルウェアにより OpenStack リソースに細かなアクセス 制御を実現できます。管理ユーザーのみが新しいユーザーを作成でき、 さまざまな管理機能にアクセスできます。クラウドのテナントはインス タンスの稼動、ボリュームの接続などのみが実行できます。

公式なアクセス制御ポリシーの確立

ロール、グループ、ユーザーを設定する前に、OpenStack に必要なアク セス制御ポリシーをドキュメント化します。ポリシーは組織に対する あらゆる規制や法令の要求事項に沿っているべきです。アクセス制御設 定のさらなる変更は公式なポリシーに従って実行されるべきです。ポリ シーは、アカウントの作成、削除、無効化、有効化、および権限の割り 当てに関する条件とプロセスを含めるべきです。定期的にポリシーをレ ビューし、設定が承認されたポリシーに従っていることを確認します。

サービス認可

OpenStack Cloud Administrator Guide に記載されているとおり、クラ ウド管理者は各サービスに対して Admin ロールを持つユーザーを定義 する必要があります。このサービスユーザーアカウントは、サービスが ユーザーを認証するための権限を提供します。

Nova と Swift のサービスは認証情報を保存するために "tempAuth" ファイルと Identity Service を使用するよう設定できま す。"tempAuth"ソリューションは、パスワードを平文で保存するため、 本番環境で使用してはいけません。

Identity Service は SSL のクライアント認証を有効化していると、そ れをサポートします。SSL クライアント認証はユーザー名、パスワー ドに加えて、ユーザー識別により信頼性を与えるために追加の認証要素 を提供します。ユーザー名とパスワードが漏えいした場合に、権限のな いアクセスのリスクを減らすことができます。しかしながら、証明書を

ユーザーに発行する追加の管理作業とコストが発生します。これはすべ ての環境で実現できるとは限りません。



注記

Identity Service にサービスの認証をするとき、SSL を使用 したクライアント認証を使用することを推奨します。

クラウド管理者は権限のない変更から重要な設定ファイルを保護すべき です。これは SELinux のような強制アクセス制御のフレームワークで実 現できます。これらには /etc/keystone.conf や X.509 証明書などがあ ります。

SSL を用いたクライアント認証のために、証明書を発行する必要があり ます。これらの証明書は外部の認証局やクラウド管理者により署名で きます。OpenStack のサービスはデフォルトで証明書の署名を確認し ます。証明が確認できなければ、接続に失敗します。管理者が自己署名 証明書を使用している場合、確認を無効化する必要があるかもしれませ ん。これらの証明書を無効化するために、/etc/nova/api.paste.ini の [filter:authtoken] セクションに insecure=False を設定します。これ らの設定は他のコンポーネントの証明書も無効化します。

管理ユーザー

管理ユーザーは Identity Service や証明書のような 2 要素認証をサ ポートする外部認証サービスを使用して認証することを推奨します。こ れにより、パスワード推測によるリスクを減らすことができます。この 推奨事項は特権アカウントへのネットワークアクセスに多要素認証を使 用するという NIST 800-53 IA-2(1) ガイドに適合しています。

エンドユーザー

Identity Service は直接エンドユーザー認証を提供できます。または、 組織のセキュリティポリシーや要求事項を確認するために外部認証方式 を使用するよう設定できます。

ポリシー

各 OpenStack サービスは policy ison という JSON 形式のポリシー ファイルを持ちます。ポリシーファイルはルールを指定します。ルー ルは各リソースを決定します。リソースは API アクセスできます。ボ リュームの接続やインスタンスの起動などです。

さまざまなリソースへのアクセス権をさらに制御するために、クラウド 管理者がポリシーを更新できます。ミドルウェアによりさらにカスタマ イズすることもできます。そのポリシーを参照しているグループやロー ルにユーザーを割り当てる必要があることに注意してください。

以下は Block Storage Service の policy ison ファイルの抜粋です。

```
"context_is_admin":[
      "role:admin"
"admin_or_owner":[
      "is admin:True"
   Γ
      "project id:%(project id)s"
],
"default":[
      "rule:admin or owner"
],
"admin_api":[
      "is admin:True"
"volume:create":[
],
"volume:get_all":[
],
"volume:get_volume_metadata":[
"volume:get_snapshot":[
"volume:get all snapshots":[
],
"volume_extension:types_manage":[
      "rule:admin api"
```

```
"volume extension:types extra specs":[
      "rule:admin api"
   ..:..."
]
```

デフォルトのルールは、ユーザーが管理者であるか、ボリュームの所有 者である必要があることを指定しています。つまり、ボリュームの所有 者と管理者のみがボリュームを作成、削除、更新できます。ボリューム 形式の管理など、他の特定の操作は管理ユーザーのみがアクセス可能で す。

トークン

ユーザーが認証されると、トークンが生成され、認可とアクセスのため に OpenStack で内部的に使用されます。デフォルトのトークンの有効期 間は 24 時間です。この値はより短く設定することが推奨されますが、 いくつかの内部サービスが処理を完了するために十分な時間が必要で あるので注意する必要があります。トークンがすぐに失効すると、クラ ウドがサービスを提供できないかもしれません。これの例は、Compute Service がディスクイメージをハイパーバイザーのローカルキャッシュ に転送するために必要な時間です。

以下は PKI トークンの例です。実際は token id の値が約3500バイトで あることに注意してください。この例では短くしています。

```
"token":{
   "expires": "2013-06-26T16:52:50Z",
   "id":"MIIKXAY...",
   "issued at": "2013-06-25T16:52:50.622502",
   "tenant": {
      "description":null,
      "enabled":true.
      "id": "912426c8f4c04fb0a07d2547b0704185",
      "name": "demo"
}
```

トークンは Identity Service 応答のより大きなコンテキスト構造の 中で渡されることに注意してください。これらの応答はさまざまな

OpenStack サービスのカタログも提供しています。各サービスはその名 前と、内部、管理、パブリックなアクセス用のエンドポイントを一覧に します。

Identity Service はトークン失効をサポートします。これは、トークン を失効するため、失効済みトークンを一覧表示するために API として宣 言されます。また、トークンをキャッシュしている各 OpenStack サービ スが失効済みトークンを問い合わせるため、それらのキャッシュから失 効済みトークンを削除するため、キャッシュした失効済みトークンの一 覧に追加するためにもあります。

将来

ドメインはプロジェクト、ユーザー、グループの高いレベルでのコンテ ナーです。そのように、すべての Ketstone ベースの識別コンポーネン トを一元的に管理するために使用されます。アカウントドメインを導入 すると、サーバー、ストレージ、他のリソースは複数のプロジェクト (以前はテナントと呼ばれていました) の中で論理的にグループ化できま す。これは、アカウントのようなマスターコンテナーの下でグループ化 できます。さらに、複数のユーザーがアカウントドメインの中で管理で き、各プロジェクトで変化するロールを割り当てられます。

Keystone の V3 API はマルチドメインをサポートします。異なるドメ インのユーザーは、異なる認証バックエンドで表現され、単一セットの ロールと権限にマッピングされる異なる属性を持ちます。これらはさま ざまなサービスリソースにアクセスするために、ポリシー定義で使用さ れます。

ルールにより管理ユーザーとテナントに所属するユーザーのみにアクセ ス権を設定されるかもしれないため、マッピングはささいなことである かもしれません。他のシナリオの場合、クラウド管理者がテナントごと のマッピング作業を承認する必要があるかもしれません。

第19章 Dashboard

基本的なウェブサーバーの設定	85
HTTPS	86
HTTP Strict Transport Security (HSTS)	86
フロントエンドキャッシュ	86
ドメイン名	87
静的メディア	87
シークレットキー	88
セッションバックエンド	88
許可されたホスト	89
クッキー	89
パスワード自動補完	89
クロスサイトリクエストフォージェリ (CSRF)	89
クロスサイトスクリプティング (XSS)	90
,	90
Horizon のイメージのアップロード	90
アップグレード	91
デバッグ	91

Horizon は OpenStack のダッシュボードです。管理者により設定され た制限の範囲内でユーザー自身のリソースを展開できるセルフサービ スポータルをユーザーに提供します。これらには、ユーザーの管理、イ ンスタンスのフレーバーの定義、仮想マシンイメージのアップロード、 ネットワークの管理、セキュリティグループのセットアップ、インスタ ンスの起動、インスタンスへのコンソール経由のアクセスなどがありま す。

ダッシュボードは Django ウェブフレームワークに基づいています。そ のため、Django のセキュアな導入プラクティスをそのまま Horizon に 適用できます。このガイドは Django のセキュリティ推奨事項の一般的 なものを提供します。さらなる情報は Diango deployment and security documentation を読むことにより得られます。

ダッシュボードは適度なデフォルトのセキュリティ設定をしてありま す。また、素晴らしい deployment and configuration documentation (導入と設定のドキュメント)があります。

基本的なウェブサーバーの設定

ダッシュボードは、Apache や nginx のような HTTPS プロキシの後ろ に Web Services Gateway Interface (WSGI) アプリケーションとして導 入すべきです。まだ Apache を使用していなければ、nginx を推奨しま す。こちらのほうが軽量かつ正しく設定しやすいです。

nginx を使用している場合、適切な数の同期ワーカーを持つ WSGI ホス トとして gunicorn を推奨します。fastcgi、scgi または uWSGI を使用 して導入することを強く推奨します。WSGI サーバーを選択するとき、統 合パフォーマンスベンチマークを使用することを強く推奨します。

Apache を使用しているとき、ダッシュボードをホストするために mod wsgi を推奨します。

HTTPS

ダッシュボードは、認知されている認証局(CA)から発行された有効か つ信頼できる証明書を使用しているセキュアな HTTPS サーバーの後ろに 導入すべきです。プライベートな組織で発行された証明書は、ルート証 明機関がお使いのすべてのブラウザーに事前インストールされていると きのみ、適切に動作します。

ダッシュボードのドメインに対する HTTP リクエストは、完全修飾され た HTTPS URL にリダイレクトされるよう設定すべきです。

HTTP Strict Transport Security (HSTS)

HTTP Strict Transport Security (HSTS) を使用することが強く推奨さ れます。

注: ウェブブラウザーの前で HTTPS プロキシを使用している場 合、HTTPS 機能を持つ HTTP サーバーを使用するより、Django documentation on modifying the SECURE PROXY SSL HEADER variable に従うほうが良いです。

HSTS の設定を含め、HTTPS の設定に関するより具体的な推奨事項とサー バー設定は、PKI/SSL の章全体を参照してください。

フロントエンドキャッシュ

ダッシュボードは OpenStack API リクエストから渡された動的コンテ ンツをそのまま描画するため、varnish のようなフロントエンドキャッ シュ層を推奨しません。Django では、静的なメディアは直接 Apache や nginx から処理され、すでにウェブホストのキャッシュの恩恵を受けて います。

ドメイン名

多くの組織は一般的に、組織全体のドメインのサブドメインにウェブアプリケーションを配備します。ユーザーが openstack.example.org 形式のドメインを期待することは自然です。これに関連して、しばしば同じ第 2 レベルの名前空間に配備された、ユーザーが管理できるコンテンツを取り扱う他の多くのアプリケーションがあります。この名前の構造は便利であり、ネームサーバーのメンテナンスを簡単にします。

Horizon を第 2 レベルドメインに導入することを強く推奨します。 たとえば、https://example.com です。また、Horizon を共有サ ブドメインに導入しないことをお奨めします。たとえば、https:// openstack.example.org や https://horizon.openstack.example.org で す。https://horizon/ のようなそのままの内部ドメインに導入しないこ ともお奨めします。

この推奨事項はブラウザーの同一オリジンポリシーの制限に基づいています。このガイドにある推奨事項は、次のような場合によく知られている攻撃からユーザーを効率的に保護できません。ユーザーが生成したコンテンツ(例: スクリプト、イメージ、あらゆる種類のアップロード)もホストしているドメインにダッシュボードを導入した場合です。ユーザーが生成したコンテンツが別のサブドメインにある場合もです。この方法は、ユーザーが生成したコンテンツをクッキーやセキュリティトークンから確実に分離するために、多くの有名なウェブサイト(例:googleusercontent.com、fbcdn.com、github.io、twimg.com)により使用されています。

さらに、第 2 レベルドメインに関する上の推奨事項に従わない場合、 クッキーによるバックエンドセッションを避け、HTTP Strict Transport Security (HSTS) を採用することがきわめて重要です。サブドメインに 導入するとき、ダッシュボードのセキュリティは同じレベルのドメイン に導入されているアプリケーションの中で最も弱いレベルと同じ強度に なります。

静的メディア

ダッシュボードの静的メディアは、ダッシュボードのドメインのサブドメインに導入し、ウェブサーバーにより処理されるべきです。外部のCDN (content delivery network) の使用も問題ありません。このサブドメインは、クッキーを設定すべきではなく、ユーザーが提供したコンテンツを処理すべきではありません。メディアは HTTPS を用いても処理されるでしょう。

イド

Diango のメディア設定は https://docs.djangoproject.com/en/1.5/ ref/settings/#static-root にドキュメント化されています。

ダッシュボードのデフォルトの設定は、CSS と JavaScript のコンテン ツを処理する前に圧縮して最小化するために django compressor を使用 します。このプロセスは、デフォルトのリクエストごとに動的な圧縮を 使用する代わりに、ダッシュボードを導入して、導入されたコードと一 緒に結果のファイルを CDN サーバーにコピーする前に静的に実行される べきです。圧縮は本番環境以外で実行すべきです。これが実践的でなけ れば、すべてのリソースの圧縮を無効化することを推奨します。オンラ イン圧縮の依存物(less や nodeis)は本番環境にインストールするべ きではありません。

シークレットキー

ダッシュボードはいくつかのセキュリティ機能に関する共有 SECRET KEY 設定に依存します。これはランダムに生成された最小 64 文字の文字列 です。すべての Horizon インスタンスで共有する必要があります。この キーが漏洩すると、リモートの攻撃者が任意のコードを実行できる可能 性があります。このキーのローテーションにより、既存のユーザーセッ ションとキャッシュを無効化します。このキーを公開リポジトリにコ ミットしないでください。

セッションバックエンド

Horizon の標準のセッションバックエンド

(diango, contrib, sessions, backends, signed cookies) は、ブラウザ に保存される、署名付きですが暗号化されていないクッキーにユーザー データを保存します。この方法により、各 Horizon インスタンスがス テートレスになるため、最も簡単なセッションバックエンドがスケール できるようになります。しかし、機微なアクセストークンをクライアン トのブラウザーに保存し、それらをリクエストごとに送信するという犠 牲を払うことになります。このバックエンドは、セッションデータが改 ざんされていないことを保証しますが、データ自身は HTTPS で提供され るような暗号化以外には暗号化されていません。

お使いのアーキテクチャーが許容できる場合、セッションバックエンド として django.contrib.sessions.backends.cache を、キャッシュとし て memcache を一緒に使用することを推奨します。memcache はパブリッ クにアクセスされてはいけません。セキュアなプライベートチャネル経 由で通信すべきです。署名付きクッキーバックエンドを使用することに した場合、セキュリティのトレードオフを理解するために Diango のド キュメントを参照してください。

さらなる詳細は Diango session backend documentation を参照してく ださい。

許可されたホスト

Horizon が利用可能なドメインを ALLOWED HOSTS に設定します。この設 定を失敗すると(とくに第 2 レベルドメインに関する上の推奨に従わな かった場合)、Horizon がさまざまな深刻な攻撃にさらされます。ワイル ドカードを使用したドメインは避けるべきです。

さらなる詳細は Diango documentation on settings を参照してくださ い。

クッキー

セッションクッキーは HTTPONLY に設定すべきです。

SESSION COOKIE HTTPONLY = True

ドットから始まるワイルドカードドメインを持つよう、CSRF やセッショ ンクッキーを設定してはいけません。Horizon のセッションクッキー と CSRF クッキーは HTTPS を使用した環境のときにセキュア化すべきで す。

Code CSRF COOKIE SECURE = True SESSION COOKIE SECURE = True

パスワード自動補完

実装者は標準のパスワードオートコンプリート機能を変更しないことを 推奨します。ユーザーはセキュアなブラウザのパスワードマネージャー を使用できる環境で、より強力なパスワードを選択します。ブラウザの パスワードマネージャーを禁止している組織は、デスクトップレベルで このポリシーを強制すべきです。

クロスサイトリクエストフォージェリ (CSRF)

Diango はcross-site request forgery (CSRF) 用の専用ミドルウェアを 持ちます。

ダッシュボードは、カスタマイズしたダッシュボードでクロスサイトス クリプティングの脆弱性が含まれることから、開発者を守るよう設計 されています。しかしながら、カスタマイズしたダッシュボード、とく に、@csrf exempt デコレーターを不適切に使用して javascript を多用 しているものを監査することは重要です。これらのセキュリティ設定の 推奨事項に従わないダッシュボードは、制限を緩和する前に注意深く評 価されるべきです。

クロスサイトスクリプティング(XSS)

多くの似たようなシステムと異なり、OpenStack のダッシュボードは多 くの項目にすべての Unicode 文字を許可します。このことは、開発者が XSS 攻撃の余地を残すエスケープミスをする範囲が少なくなることを意 味します。

ダッシュボードは開発者が XSS 脆弱性を作ることを防ぐためのツール を提供します。しかし、それらは開発者が適切に使用するときのみ機 能します。mark safe 関数の使用、カスタムテンプレートタグを持つ is safe の使用、safe テンプレートタグ、自動エスケープが無効化され ているすべての場所、不適切にエスケープされたデータを評価するすべ ての javaScript にとくに注意して、すべてのカスタムダッシュボード を監視します。

クロスオリジンリソースシェアリング (CORS)

ウェブブラウザが各レスポンスに限定的な CORS ヘッダーを付けて送信 するよう設定します。Horizon のドメインとプロトコルのみを許可しま す。

Access-Control-Allow-Origin: https://example.com/

ワイルドカードオリジンを許可してはいけません。

Horizon のイメージのアップロード

導入者はリソース枯渇とサービス妨害を防ぐ計画を実装していなけれ ば、HORIZON IMAGES ALLOW UPLOAD を無効化 することを強く推奨しま す。

アップグレード

Django セキュリティリリースは、一般的に十分にテストされ、積極的に 後方互換性を確保しています。ほぼすべての場合、Django の新しいメ ジャーリリースも前のリリースと後方互換性があります。ダッシュボー ドの実装者は、最新のセキュリティリリースを持つ最新の安定リリース の Django を実行することを強く推奨されます。

デバッグ

本番環境で DEBUG が False に設定されていることを確認しま す。Django では DEBUG により、あらゆる例外の発生時にスタックト レースと機微なウェブサーバーの状態情報が表示されます。

第20章 コンピュート

93

Compute Service (Nova) は最も複雑な OpenStack サービスの一つで す。クラウドの隅々まで多くの場所で動作し、さまざまな内部サービ スと通信します。この理由により、Compute Service 設定のベストプ ラクティスに関する推奨事項の多くは、本書を通して配布されます。管 理、API エンドポイント、メッセージング、データベースのセクション で具体的な詳細を提供します。

仮想コンソールの選択

クラウドアーキテクトが判断する必要があることの一つは、Compute Service の設定が VNC と SPICE のどちらを使用するかです。以下は、 これらの選択肢の違いに関する詳細を提供します。

Virtual Network Computer (VNC)

OpenStack は Virtual Network Computer (VNC) プロトコルを使用し て、プロジェクトと管理者がインスタンスのリモートデスクトップコン ソールにアクセスできるように設定できます。

機能

- OpenStack Dashboard (Horizon) は HTML5 の非 VNC クライアントを 使用して、ウェブページから直接インスタンスの VNC コンソールを提 供できます。これには、nova-novncproxy サービスがパブリックネッ トワークから管理ネットワークにブリッジする必要があります。
- The nova command-line utility can return a URL for the VNC console for access by the nova Java VNC client. This requires the nova-xvpvncproxy service to bridge from the public network to the management network.

セキュリティの課題

- ・ デフォルトのオープンなパブリックポートによる nova-novncproxy サービスと nova-xvpvncproxy サービスがトークン認証されます。
- デフォルトで、リモートデスクトップの通信は暗号化されませ ん。Havana は Kerberos によりセキュア化された VNC 接続を実装す ることが期待されています。

参考資料

VNC ポートへのセキュアな接続

Simple Protocol for Independent Computing Environments (SPICE)

VNC の代替として、OpenStack は Simple Protocol for Independent Computing Environments (SPICE) プロトコルを使用した、仮想マシンへ のリモートデスクトップアクセスを提供します。

機能

- SPICE は OpenStack Dashboard (Horizon) により直接インスタンスの ウェブページでサポートされます。これには nova-spicehtml5proxy サービスが必要です。
- nova コマンドラインユーティリティは SPICE-html クライアントによ りアクセスするための SPICE コンソールの URL を返すことができま す。

制限事項

• SPICE は VNC よりも多くの点で優れていますが、現在 spice-html5 ブラウザー統合は管理者がすべての利点を利用することができませ ん。マルチモニター、USB パススルーなどの SPICE 機能の利点を利用 するためには、管理ネットワークの中でスタンドアロン SPICE クライ アントを使用することが推奨されます。

セキュリティの課題

- ・ デフォルトのオープンなパブリックポートによる novaspicehtml5proxy サービスがトークン認証されます。
- 機能と統合は進化中です。次のリリースの機能を確認し、推奨事項を 作成します。
- VNC の場合のように、今のところ数人の利用者に制限して管理ネット ワークから SPICE を使用することを推奨します。

参考資料

SPICE コンソール

Red Hat bug 913607

RDO Grizzly における SPICE のサポート

第21章 オブジェクトストレージ

最初にセキュア化するもの – ネットワーク	98
サービスのセキュア化 – 一般	100
ストレージサービスのセキュア化	101
プロキシサービスのセキュア化	102
オブジェクトストレージ認証	104
他の重要事項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	104

OpenStack Object Storage (Swift) は HTTP 経由でデータの保存と取得 を提供するサービスです。オブジェクト(データの小さな塊)は、認証 機構に基づいて匿名の読み込み専用アクセス権や ACL 定義のアクセス権 を提供する組織化した階層に保存されます。

利用者は、オブジェクトの保存、それらの変更、HTTP プロトコルと REST API を使用したアクセスを実行できます。Object Storage のバッ クエンドコンポーネントは、サービスの冗長化クラスターで同期された 情報を維持するために別のプロトコルを使用します。API とバックエン ドコンポーネントの詳細は OpenStack Storage のドキュメントを参照し てください。

このドキュメントの場合、コンポーネントは以下の主要なグループに分 けています。

- 1. プロキシサービス
- 2. 認証サービス
- 3. ストレージサービス
 - ・ アカウントサービス
 - ・コンテナーサービス
 - ・ オブジェクトサービス

図21.1 OpenStack Object Storage Administration Guide (2013) からのサンプル図

OpenStack Object Storage

Stores container databases, account databases, and stored objects





注記

Object Storage 環境はインターネット環境にある必要があり ません。組織の内部ネットワークインフラストラクチャーの 一部である「パブリックスイッチ」を使用してプライベート クラウドにできます。

最初にセキュア化するもの - ネットワー ク

Object Storage に対するセキュアなアーキテクチャー設計の最初の観 点はネットワークコンポーネントです。ストレージサービスノードは、 データの複製と高可用性を提供するためにお互いにデータをコピーする ために rsync を使用します。プロキシサービスはさらに、データをバッ クエンドと中継するとき、そして 4 つ目にエンドポイントのクライアン トとクラウド環境の間で中継するときに、ストレージサービスと通信し ます。



注意

これらはこの階層で何も暗号化や認証を使用しません。

これがアーキテクチャー図に「プライベートスイッチ」やプライベート ネットワーク(「V]LAN)が書かれている理由です。このデータドメイン は他の OpenStack データネットワークと分離すべきです。セキュリティ ドメインにおけるさらなる議論は 4章セキュリティ境界と脅威 [15] を 参照してください。



ヒント

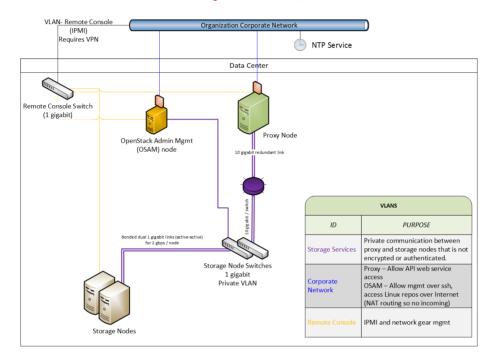
ルール: データドメインでストレージサービスのためにプラ イベート (V)LAN ネットワークを使用します。

これにより、プロキシサービスノードが 2 つのインターフェース(物理 または仮想)を持つ必要があります。

- 1. 利用者が到達できる「パブリック」インターフェースとして一つ
- 2. ストレージノードにアクセスする「プライベート」インターフェース としてもう一つ

以下の図はある実現可能なネットワークアーキテクチャーを説明しま す。

図21.2 マネジメントノードを持つオブジェクトストレージネッ トワークアーキテクチャー (OSAM: Object storage network architecture with a management node)



サービスのセキュア化 - 一般

ユーザーとして実行するサービス

各サービスを root (UID 0) 以外のサービスアカウントで実行するよう 設定することを推奨します。ある推奨事項はユーザー名「swift」と主グ ループ「swift」とすることです。

ファイルパーミッション

/etc/swift はリングのトポロジーと環境設定に関する情報を含みます。 以下のパーミッションが推奨されます。

```
#chown -R root:swift /etc/swift/*
#find /etc/swift/ -type f -exec chmod 640 {} \(\xi\);
#find /etc/swift/ -type d -exec chmod 750 {} \u2204;
```

イド

これは、サービスが「swift」グループメンバーに読み込むことを許可し ながら、root のみが設定ファイルを変更できるように制限します。

ストレージサービスのセキュア化

以下はさまざまなストレージサービスのデフォルトのリッスンポートで す。

サービス名	ポート	種別
アカウントサービス	6002	TCP
コンテナーサービス	6001	TCP
オブジェクトサービス	6000	TCP
Rsync	873	TCP

認証はこのレベルで Object Storage にありません。誰かがアクセスで きるこれらのポートのどれかでストレージサービスノードに接続できる 場合、認証なしでデータを変更できます。この問題に対してセキュアに するために、プライベートストレージネットワークを使用することに関 して前に説明した推奨事項に従うべきです。

オブジェクトストレージの「アカウント」という 用語

オブジェクトストレージの「アカウント」はユーザーアカウントやクレ デンシャルではありません。以下に関連を説明します。

OpenStack Object Storage アカウント	コンテナーの集合体。ユーザーアカウントや認証ではありません。どのユーザーがアカウントに関連づけられるか、どのようにアクセスできるかは、使用する認証システムに依存します。後から認証システムを参照してください。このドキュメントで OSSAccount として参照されます。
OpenStack Object Storage コンテナー	オブジェクトの集合体。コンテナーにあるメ タデータは ACL が利用可能です。ACL の意味 は使用する認証システムに依存します。
OpenStack Object Storage オブジェクト	実際のデータオブジェクト。オブジェクトレベルの ACL はメタデータ付きでも可能です。これは使用する認証システムに依存します。



ヒント

上のことについて考える別の方法です。一つの書庫(アカウ ント) 0 またはそれ以上の入れ物(コンテナー)を持ちま す。入れ物 (コンテナー) はそれぞれ 0 またはそれ以上の

オブジェクトを持ちます。車庫(Object Storage クラウド環 境) は、それぞれ 0 またはそれ以上のユーザーが所属する書 庫(アカウント)を複数持つ可能性があります。

各レベルに、誰がどの種類のアクセス権を持つのかを記録する ACL を 持つかもしれません。ACL はどの認証システムが使用されているのかに 依存して解釈されます。最も一般的に使用される 2 種類の認証プロバ イダーは Keystone と SWAuth です。カスタム認証プロバイダーも利用 できます。詳細は Object Storage 認証のセクションを参照してくださ L1.

プロキシサービスのセキュア化

プロキシサービスノードは少なくとも 2 つのインターフェース(物理ま たは仮想)を持つべきです。一つはパブリック、もう一つはプライベー トです。パブリックインターフェースはファイアウォールやサービス バインディング経由で保護できるかもしれません。パブリックなサービ スは、エンドポイントクライアントのリクエストを処理し、それらを認 証し、適切なアクションを実行する HTTP ウェブサーバーです。プライ ベートインターフェースはサービスをリッスンしませんが、代わりにプ ライベートストレージネットワークにあるストレージサービスノードに 接続を確立するために使用されます。

SSL/TLS の使用

Swift に組み込みまたは同梱されているウェブサーバーは SSL をサポー トします。しかし、SSL 証明書チェイン全体の送信をサポートしませ ん。これにより、お使いのクラウド用に Verisign のような第三者機関 により信頼されて署名された証明書を使用するときに問題を引き起こし ます。現在の回避策は組み込みのウェブサーバーを使用せず、公開サー バー証明書と CA 中間認証局の証明書の両方を送信することをサポート する別のウェブサーバーを代わりに使用することです。これにより、エ ンドポイントのクライアントがお使いのクラウド環境の SSL 証明書と チェインを正常に検証できるようになるために、それらの信頼ストアに ある CA ルート証明書を持てるようになります。mod wsgi と Apache を用いてこのようにする方法の例が以下にあります。また、Apache Deployment Guide を参照してください。

apt-get install libapache2-mod-wsgi

次のように /etc/apache2/envvars ファイルを変更します。

export APACHE RUN USER=swift export APACHE RUN GROUP=swift 別の方法は Apache の設定ファイルを次のように変更することです。

User swift Group swift

Apache のドキュメントルートに swift ディレクトリを作成します。

mkdir /var/www/swift/

\$YOUR_APACHE_DOC_ROOT/swift/proxy-server.wsgi ファイルを作成します。

HTTP リッスンポート

これまでに説明したように「swift」のように非 root ユーザー(UID 0 以外)としてプロキシサービスのウェブサーバーを実行すべきです。こ れを簡単にし、何らかのウェブコンテナーの部分を root として実行す ることを避けるために、1024 より大きいポートを使用することが必要で す。エンドポイントのクライアントは一般的にオブジェクトストレージ をブラウジングするためにウェブブラウザーに手動で URL を入力するこ とがないため、そのようにすることは大変でありません。さらに、HTTP REST API を使用して、認証を実行するクライアントに対して、認証の レスポンスにより提供されるとおり、使用する完全な REST API URL を 通常は自動的に取ってきます。OpenStack の REST API により、クラ イアントがある URL に認証できるようになり、実際のサービスのため に別の URL を使用するようにできます。例: クライアントが https:// identity.cloud.example.org:55443/v1/auth に認証して、それらの認証 キーを持つ応答とストレージの URL(プロキシノードまたは負荷分散装 置の URL) https://swift.cloud.example.org:44443/v1/AUTH 8980 を取 得します。

ウェブサーバーを root 以外のユーザーで起動して実行する設定方法は ウェブサーバーと OS により異なります。

負荷分散装置

Apache を使用するという選択肢が実現できない場合、またはパフォーマンスのために SSL 処理をオフロードしたい場合、専用のネットワークデバイスの負荷分散装置を使用できます。これは、複数のプロキシノードを使用するときに、冗長性と負荷分散を提供するために一般的な方法です。

SSL をオフロードすることにした場合、ネットワーク上の他のノード (侵入されているかもしれない) が暗号化されていない通信を盗聴できな いように、負荷分散装置とプロキシノード間のネットワークリンクは必 ずプライベート (V)LAN セグメントに置くべきです。そのようなセキュ リティ侵害が発生した場合、攻撃者はエンドポイントクライアントやク ラウド管理者のクレデンシャルのアクセス権を取得し、クラウドのデー タにアクセスできます。

Kevstone や SWAuth のような使用する認証サービスが、エンドのクライ アントへの応答にあるそれぞれの URL をどのように設定するのかを判断 します。そのため、それぞれのプロキシサービスノードの代わりに、お 使いの負荷分散装置を使用します。

オブジェクトストレージ認証

Object Storage はエンドポイントクライアントを認証するためのミド ルウェアを提供するために wsgi を使用します。認証プロバイダーはど のロールとユーザー種別が存在するかを定義します。いくつかは伝統的 なユーザー名とパスワードのクレデンシャルを使用します。一方、他の ものは API キートークンやクライアントサイド x.509 SSL 証明書を活 用します。カスタムプロバイダーは wsqi モデルを使用して統合できま す。

Keystone

Keystone が OpenStack で一般的に使用される認証プロバイダーです。 これは Object Storage でも認証のために使用できます。Keystone のセ キュア化についてはすでに 18章 Identity [77] で提供されています。

SWAuth

SWAuth は Keystone の代替となるものです。Keystone と比較して、 オブジェクトストレージ自体にユーザーアカウント、クレデンシャ ル、メタデータを保存します。詳細は SWAuth のウェブサイト http:// gholt.github.io/swauth/ にあります。

他の重要事項

すべてのサービスノードの /etc/swift/swift.conf に 「swift hash path suffix」設定があります。保存されているオブジェ クトに対するハッシュ衝突の可能性を減らし、あるユーザーが別のユー ザーのデータを上書きすることを防ぐために、これが提供されます。

この値は、暗号学的に安全な乱数生成器を用いて初期設定され、すべて のサービスノードにわたり一貫性を持つべきです。適切な ACL を用いて 確実に保護され、データ損失を避けるためにバックアップコピーを必ず 持つべきです。

第22章 ケーススタディ: ID 管理

アリスのプライベートクラウド	107
ボブのパブリッククラウド	107

このケーススタディでは、アリスとボブが OpenStack コアサービス の設定をどのように取り扱うかを議論します。これらには、Kevstone Identity Service、Dashboard、Compute Services が含まれます。ア リスは既存の政府ディレクトリサービスに統合することに関心がありま す。ボブはパブリックにアクセス権を提供する必要があります。

アリスのプライベートクラウド

アリスの企業はすべてのユーザーに対して 2 要素認証を持つディレク トリサービスが十分に確立されています。彼女は政府発行のアクセス カードを用いた認証をサポートする外部認証サービスをサポートする よう Keystone を設定します。アクセス制御ポリシーと統合されたユー ザー用ロール情報を提供するために、外部 LDAP サービスも使用しま す。FedRAMP コンプライアンス要件のため、アリスはすべての管理アク セスに対して管理ネットワークで 2 要素認証を導入します。

アリスはクラウドのさまざまな観点を管理するために Dashboard も導入 します。必ず HTTPS のみを使用するために HSTS と共に Dashboard を 導入します。Dashboard はプライベートネットワークの DNS の内部サブ ドメインの中にあります。

アリスは仮想コンソールに VNC の代わりに SPICE を使用することを決 めました。SPICE の先進的な機能の利点を得ようと思います。

ボブのパブリッククラウド

ボブは一般的なパブリックによる認証をサポートする必要があります。 そのため、ユーザー名とパスワードによる認証を提供することを選択し ます。彼はユーザーのパスワードを解析しようとするブルートフォース 攻撃について心配します。そのため、ログイン試行回数の失敗数を制限 する外部認証拡張も使用します。ボブの管理ネットワークは彼のクラウ ドの中で他のネットワークと分離しています。しかし、彼の企業ネット ワークから SSH 経由でアクセスできます。これまでに推奨しているとお り、ボブは管理者のパスワードが漏洩するリスクを減らすために、管理 者が管理ネットワークで 2 要素認証を使用することを要求します。

ボブはクラウドのさまざまな観点を管理するために Dashboard も導入し ます。必ず HTTPS のみを使用するために HSTS と共に Dashboard を導

入します。Dashboard が同一オリジンポリシーの制限のため必ず第 2 レ ベルドメインに導入されるようにしました。また、リソース枯渇を防ぐ ために HORIZON IMAGES ALLOW UPLOAD を無効化します。

ボブはその成熟度とセキュリティ機能から仮想コンソールに VNC を使用 することを決めました。

第23章 ネットワークの状態

Grizzly リリースの OpenStack Networking により、エンドユーザーま たはテナントは、以前の OpenStack Networking リリースではできな かった新しい方法でネットワークリソースを定義、利用、消費すること が可能です。OpenStack Networking は、ネットワーク設定のオーケス トレーションに加えて、クラウド内のインスタンスを対象としたネット ワーク接続の定義と IP アドレス指定用の対テナント API を提供しま す。API 中心のネットワークサービスへの移行にあたっては、クラウド のアーキテクトや管理者が、物理/仮想ネットワークのインフラストラク チャーとサービスをセキュリティ保護するためのベストプラクティスを 考慮すべきです。

OpenStack Networking は、オープンソースコミュニティやサードパー ティーのサービスによる API の拡張性を提供するプラグインアーキテ クチャーで設計されました。アーキテクチャーの設計要件を評価するに あたっては、OpenStack Networking のコアサービスではどのような機能 が提供されているか、サードパーティの製品によって提供される追加の サービスがあるかどうか、物理インフラストラクチャーにはどのような 補足サービスを実装する必要があるかを判断することが重要です。

本項には、OpenStack Networking を実装する際に検討すべきプロセスと ベストプラクティスについての大まかな概要をまとめています。提供さ れているサービスの現在の状況 、将来実装されるサービス、本プロジェ クトにおける現在の制限事項などについて説明します。

第24章 Networking アーキテク チャ

OS ネットワーキングサービスの配置と物理サービス112

OpenStack Networking は多数ノード間において幾つかのプロセスのデ プロイにしばしば含まれる独立サービスです。OpenStack Networking サービスのメインプロセスは neutron-server で、これは OpenStack Networking API を提供し、追加処理用の適切なプラグインにテナントの リクエストを渡します。

OpenStack Networking コンポーネントは以下の要素を含みます。

- neutron サーバー (neutron-server と neutron-*-plugin): このサー ビスはネットワークノード上で実行され、Networking API とその拡張 を提供します。これはまた、各ポートのネットワークモデルと IP ア ドレスを管理します。neutron-server とプラグインエージェントは、 永続ストレージ用のデータベースへのアクセスと、内部通信用のメッ セージキューへのアクセスを要求します。
- プラグインエージェント (neutron-*-agent): ローカルの仮想スイッ チ (vswitch) 設定を管理する為に各 compute ノード上で実行されま す。実行するエージェントは、あなたが使用するプラグインに依存す るでしょう。このサービスはメッセージキューへのアクセスを必要と します。オプションのプラグインに依存します。
- DHCP エージェント (neutron-dhcp-agent): テナントネットワークに DHCP サービスを提供します。このエージェントは全てのプラグインと 同様で、DHCP 設定の管理を担当します。neutron-dhcp-agent はメッ セージキューアクセスが必要です。
- •L3 エージェント (neutron-l3-agent): テナントネットワーク上の VM において外部ネットワーク用 L3/NAT 転送を提供します。メッセージ キューが必要です。プラグイン次第では別の物が必要になります。
- ネットワークプロバイダサービス (SDN サーバ/サービス)。テナン トネットワークを提供する追加のネットワークサービスを提供しま す。これらの SDN サービスは REST API 又は他の通信チャネルを介し て、neutron-server、neutron-plugin、プラグインエージェントと交 信するかも知れません。

次表はOpenStack Networking コンポーネント群の構造・ネットワークフ ローダイアグラムを示しています。



OS ネットワーキングサービスの配置と物 理サービス

このガイドでは、我々はまず、クラウドコントローラホスト1台、ネッ トワークホスト1台、VMを実行するcomputeハイパーバイザーの集合を含 む標準的なアーキテクチャにフォーカスします。

物理サーバのネットワーク接続性



標準的な OpenStack Networking セットアップは最大4つの物理データ センターネットワークがあります。

- ・ 管理ネットワーク OpenStack コンポーネント間の内部诵信に使用さ れます。このネットワークの IP アドレスはデータセンター内でのみ アクセス可能であるべきです。管理セキュリティドメインで検討しま す。
- ・ゲストネットワーク クラウドデプロイ中の VM データ通信に使用され ます。このネットワークの IP アドレス要件は、使用中の OpenStack Networking プラグインとテナントにより作成される仮想ネットワーク のネットワーク設定の選定に依存します。このネットワークはゲスト セキュリティドメインで検討します。
- ・ 外部ネットワーク 幾つかのデプロイシナリオ中のインターネットアク セスを持つVMを提供する為に使用されます。このネットワーク上の IP アドレスはインターネット上の誰もがアクセス可能です。パブリック セキュリティドメインで検討します。
- API ネットワーク テナントに OpenStack Networking API を含む全 OpenStack API を晒します。このネットワーク上の IP アドレスは インターネット上の誰もがアクセス可能であるべきです。これは外部

ネットワークと同じネットワークであっても構いません。外部ネット ワーク用に、IP ブロック中の全 IP アドレス範囲より少ない部分を使 う為の IP 割当範囲を使用するサブネットを作成する事が出来るから です。このネットワークはパブロックセキュリティドメインで検討し ます。

更なる情報は、OpenStack Cloud Administrator Guide 中の Networking の章を参照して下さい。

第25章 Networking サービス

VLAN とトンネリングを使用した L2 分断	115
ネットワークサービス	116
ネットワークサービス拡張	118
Networking サービスの制限事項	119

あなたの OpenStack ネットワークインフラデザインの概要設計段階で は、適切なセキュリティ管理・監査機構を確認する為、物理ネットワー クインフラ設計で支援する適切な専門技術が間違いなく利用できる事は 重要です。

OpenStack Networking は(テナントに自身の仮想ネットワークを設計す る為の機能を提供する)仮想ネットワークサービスのレイヤを追加しま す。これらの仮想化サービスは、現時点で従来のネットワークコンポー ネントのように成熟していません。これらの仮想化技術の現状と、仮想 ネットワークと従来のネットワーク境界でどのコントロールを実装する 必要があるだろうというを知っておく事は重要です。

VLAN とトンネリングを使用した L2 分断

OpenStack Networking はテナント/ネットワークの組合せ単位で通 信を分断する為の、 VLANs (IEEE 802.1Q タギング) 又は GRE カプセ ル化を使用した L2 トンネルという 2 つの異なる機構を使用する事が 出来ます。通信の分断と独立用にあなたが選択する方式は、あなたの OpenStack デプロイの範囲と規模に依存します。

VI AN

VLAN は特別な VLAN ID (VID) フィールド値を持つ IEEE 802.1Q ヘッ ダを含む特別な物理ネットワーク上のパケットを実現します。同じ物理 ネットワークを共有する VLAN ネットワーク群は、L2 において相互から 独立しており、重複する IP アドレス空間を持つ事すら可能です。VLAN ネットワークに対応した各個別の物理ネットワークは、独自の VID 値 を持つ独立した VLAN トランクとして扱われます。有効な VID 値は1~ 4094です。

VLAN 設定の複雑さはあなたの OpenStack 設計要件に依存しま す。OpenStack Networking がVLAN を効率良く使用できるようにする為 に、VLAN 範囲を(各テナントに1つ)割り当てて、各 compute ノード の物理スイッチポートを VLAN トランクポートに変更する必要がありま す。



注記

注意:あなたのネットワークを4095 以上のテナントに対応す るようにしたい場合、VLAN はあなたにとって多分正しい選択 肢ではありません。なぜなら、4095 以上に VLAN タグを拡張 する為の複数の「改造」が必要だからです。

L2 トンネリング

Network tunneling encapsulates each tenant/network combination with a unique "tunnel-id" ネットワークトンネリングは、固有の「ト ンネルID」を用いてテナント/ネットワークの各組合せをカプセル化し ます。これは、上記の組合せに属するネットワーク通信を独立させる為 に使用されます。テナントの L2 ネットワーク接続は、物理的配置や下 層のネットワーク設計から独立しています。IP パケット内で通信を力 プセル化する事により、通信はレイヤ3境界を越える事ができ、VLAN や VLAN とランキングの事前設定の必要が無くなります。トンネリング はネットワークのデータ通信に不明瞭なレイヤを追加し、監視の観点で 個々のテナント通信の可視性を低下させます。

OpenStack Networking は現在 GRE カプセル化のみサポートしてお り、Havana リリースで VXLAN をサポートする計画があります。

L2 分断を提供する技術の選択は、あなたのデプロイで作成される予定 のテナントネットワークの範囲とサイズに依存します。あなたの環境が VLAN ID の利用で制限がある場合や、大多数の L2 ネットワークが見込 まれる場合、トンネリングの使用を推奨します。

ネットワークサービス

テナントネットワーク分断の選択はネットワークセキュリティと制御境 界をどのように実装するかに影響します。 以下の追加ネットワークサー ビスは利用可能か、OpenStack ネットワークアーキテクチャのセキュリ ティポーズを拡張する為の開発中かのいずれかです。

アクセスコントロールリスト

OpenStack Compute は、旧式の nova-network サービスでデプロイす る場合、テナントネットワーク通信のアクセス制御を直接サポートしま す。又は、OpenStack Networking サービスにアクセス制御を任せる事も 出来ます。

注:旧式の nova-network セキュリティグループは、Iptables を使用 してインスタンス上の全ての仮想インターフェースポートに適用されま す。

セキュリティグループでは、管理者とテナントが仮想インターフェース ポート通過を許可する通信のタイプと方向(内向き/外向き)を指定で きるようになっています。

OpenStack Networking 経由でセキュリティグループを有効にする事をお 勧めします。

L3 ルーティングおよび NAT

OpenStack Networking のルータは複数の L2 ネットワークを接続でき、 1つ以上のプライベート L2 ネットワークを共有外部ネットワーク(イ ンターネットアクセス用のパブリックネットワーク等)に接続するゲー トウェイを提供する事も出来ます。

L3 ルータは、外部ネットワークへのルータに接続するゲートウェイポー ト上の基本的なネットワークアドレス変換(NAT)機能を提供します。こ のルータはデフォルトで全てのネットワークの SNAT (静的 NAT) を行 います。これは、外部ネットワーク上のパブリック IP アドレスから、 ルータにアタッチされた他の1サブネットのプライベート IP アドレス へ変換する静的な1対1マッピングを作成します。

テナント VM のより粒度の細かいテナント L3 ルーティングとフロー ティング IP 単位で設定する事をお勧めします。

サービス品質(QoS)

現在の OpenStack Networking にはテナントインスタンスの仮想イン ターフェースポート上の QoS 設定機能が欠如しています。物理ネッ トワークエッジデバイスにおけるトラフィックシェーピングやレート リミットの為の QoS 活用は、OpenStack デプロイ中のワークロード の動的な性質の為に実装されておらず、従来の方法では設定できませ ん。QoS-as-a-Service (QoSaaS) は実験的な機能として現在 OpenStack Networking Havana リリース用に開発中です。QoSaaS は以下のサービス を提供する計画です。

- DSCP マーキングによるトラフィックシェーピング
- ポート・ネットワーク・テナント単位のレートリミット
- ポートミラーリング(オープンソースのサードパーティ製プラグイン 使用)

フロー分析(オープンソースのサードパーティプラグイン使用)

テナントトラフィックポートミラーリング又はNetwork Flow モニタリン グは現在、OpenStack Networking の機能として公開されていません。 ポート/ネットワーク/テナント単位でポートミラーリングを行うサー ドパーティ製のプラグイン拡張があります。ハイパーバイザー上で Open vSwitch を使用する場合、sFlow とポートミラーリングを有効にできま すが、実装には幾つかの運用操作が必要になるでしょう。

ロードバランシング

OpenStack Networking の Grizzly リリースにおける実験的機能の1つ が Load-Balancer-as-a-service (LBaaS) です。LBaaS API は、アー リーアダプターやベンダーに LBaaS 技術の実装を行う機会を提供し ます。しかしながら、リファレンス実装は未だ実験段階で、商用環境 で使用されているという話は聞きません。現在のリファレンス実装は HAProxy をベースにしています。仮想インターフェースポート用の拡張 可能な L4-L7 機能を提供する OpenStack Networking 中の拡張用に開発 中のサードパーティプラグインがあります。

ファイアウォール

FW-as-a-Service (FWaaS) は実験的機能として OpenStack Networking Havana リリースに向けて現在開発中です。FWaaS は現在セキュリティ グループにより提供されるものより一般にはかなり広い典型的なファイ アウォール製品により提供される豊富なセキュリティ機能を管理・設定 する為に呼ばれます。現在、FWaaS をサポートするために、OpenStack ネットワーキングの拡張用サードパーティプラグインが開発されている ところです。

利用可能なネットワークサービスの現在の機能と制限を理解する事は OpenStack Networking の設計上極めて重要です。仮想/物理ネットワー クの境界がどこかを理解する事は、あなたの環境で要求されたセキュリ ティコントロールを追加する際の助けになるでしょう。

ネットワークサービス拡張

以下はオープンソースコミュニティ又はSDN企業によって提供された、 OpenStack Networking で動作する既知のプラグインの一覧です。

Big Switch Controller プラグイン、Brocade Neutron プラグイ ン、Cisco UCS/Nexus プラグイン、Cloudbase Hyper-V プラグイ ン、Extreme Networks プラグイン、Juniper Networks Neutron プ

ラグイン、Linux Bridge プラグイン、Mellanox Neutron プラグイ ン、MidoNet プラグイン、NEC OpenFlow プラグイン、Open vSwitch プ ラグイン、PLUMgrid プラグイン、Ruijie Networks プラグイン、Ryu OpenFlow Controller プラグイン、VMware NSX プラグイン

Folsom リリース時点でプラグイン群が提供する全ての機能の詳細な比較 表は、Sebastien Han's comparison を参照して下さい。

Networking サービスの制限事項

OpenStack Networking は以下の制限があります。

• IP アドレス重複 — neutron-l3-agent か neutron-dhcp-agent のい ずれかを実行するノードが重複した IP アドレスを使用する場合、こ れらのノード群は Linux のネットワークネームスペースを使用する必 要があります。デフォルトでは、DHCP と L3 エージェントは Linux ネットワークネームスペースを使用しています。しかしながら、ホス トがこのネームスペースをサポートしていない場合、DHCP と L3 エー ジェントは異なるホストで実行して下さい。

ネットワークネームスペースサポートがない場合. L3エージェントで は追加の制限事項として単一の論理ルータのみサポートされます。

- 複数ホスト DHCP エージェント OpenStack Networking は複数の L3 エージェントと DHCP エージェントによる負荷分散をサポートして います。しかしながら、(訳注:nova-network がサポートしていた) 仮想マシンとの配置上の強い紐付けはサポートされていません。
- L3 エージェントの IPv6 未対応 neutron-l3-agent (L3 転送の実 装用に多くのプラグインが使用)は IPv4 転送のみサポートしていま す。

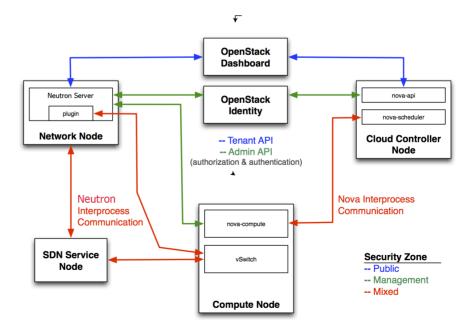
第26章 OpenStack Networking サービスのセキュリティ強化

OpenStack Networking サービス設定

OpenStack Networking のセキュリティを強化する為に、テナントインス タンス作成用のワークフロープロセスの理解をセキュリティドメインに マッピングさせる必要があります。

OpenStack Networking と交信する主要なサービスが4つあります。典型 的な OpenStack デプロイでは、これらのサービスは以下のセキュリティ ドメインにマッピングされます。

- OpenStack Dashboard: パブリック、管理
- OpenStack Identity: 管理
- OpenStack Compute ノード: 管理、ゲスト
- OpenStack ネットワークノード: 管理、ゲスト (使用する neutron プ ラグインによってはパブリックも可能性あり)
- SDB サービスノード:管理、ゲスト (使用する製品によってはパブ リックも可能性あり)



イド

OpenStack Networking サービスと他の OpenStack コアサービス間の扱 いの難しいデータ通信を分離する為、通信を独立した管理ネットワーク 上でのみ行うように通信路を設定する事を強く推奨します。

OpenStack Networking サービス設定

API サーバがバインドするアドレスの制限: neutron-server

OpenStack Networking API サービスが外からのクライアント通信用に ネットワークソケットをバインドするネットワークインターフェース又 は IP アドレスを制限する為、neutron.conf ファイル中の bind host と bind port を以下のように指定します。

Address to bind the API server bind host = <ip address of server>

Port the bind the API server to bind port = 9696

OpenStack Networking サービス群の DB と RPC 通信の制限:

OpenStack Networking サービスの様々なコンポーネントは、OpenStack Networking 中の他のコンポーネントとの通信にメッセージキュー又は データベース接続のいずれかを使用します。

DB への直接接続を必要とする全てのコンポーネントに対し、データベー スの章のデータベース認証とアクセスコントロールの節で示されたガイ ドラインに従う事を推奨します。

RPC 通信を必要とする全てのコンポーネントに対し、メッセージングの 章のキュー認証とアクセスコントロールの節中で示されたガイドライン に従う事を推奨します。

第27章 Networkingサービス セ キュリティベストプラクティス

テナントネットワークサービスのワークフロー	123
Networking リソースポリシーエンジン	123
セキュリティグループ	124
クォータ	125

この章では、あなたの OpenStack デプロイの中でテナントネットワーク セキュリティを適用する為に、OpenStack Networking の設定のベストプ ラクティスについて議論します。

テナントネットワークサービスのワーク フロー

OpenStack Networking は、ネットワークリソースと設定の本物のセル フサービスをユーザに提供します。クラウドアーキテクトとオペレータ が、利用可能なネットワークリソースの作成・更新・削除機能をユーザ に提供する際の彼らの設計ユースケースを評価する事は重要です。

Networking リソースポリシーエンジン

OpenStack Networking 中のポリシーエンジンとその設定ファイル (policy, ison) は、テナントネットワークメソッドとオブジェクト上 のユーザのきめ細かな許可を提供する方法を提供します。クラウドアー キテクトとオペレータが、ユーザとテナントに利用可能なネットワーク リソースを作成・交信・削除する機能を提供するにあたって、かれらの 設計とユースケースを評価する事は重要です。なぜなら、テナントネッ トワークの可用性、ネットワークセキュリティ、全般的な OpenStack セキュリティ上でこれらが実際の効果を持つからです。OpenStack Networking ポリシー定義のより詳細な説明は、OpenStack クラウド管理 者ガイド 中の 認証と認可の章を参照して下さい。

デフォルトの Networking リソースポリシーをレビューする事と、あなたのセキュリ

あなたの OpenStack のデプロイが異なるセキュリティドメインに向けて 複数の外部アクセスポイントを提供する場合、複数の外部アクセスポイ ントへ複数の仮想NICをアタッチするテナントの機能を制限する事は重要 です。これは、これらのセキュリティドメインのブリッジになり、思い がけないセキュリティの妥協を導くかも知れません。OpenStack Compute が提供するホストアグリゲート機能の活用や、異なる仮想ネットワーク 設定を持つ複数のテナントプロジェクトにテナントVMを分割する事で、 リスクを緩和する事が可能です。

セキュリティグループ

OpenStack Networking サービスは、OpenStack Compute 上に構築され たセキュリティグループ機能より柔軟で協力な機能を用いたセキュリ ティグループ機能を提供します。このように、OpenStack Networking を 用いる場合、nova.conf は常にビルトインのセキュリティグループを 無効化し、全てのセキュリティグループ要求を OpenStack Networking API にプロキシする必要があります。これを怠った場合、セキュリティ ポリシーが両サービスに同時に適用されて衝突を起こす結果となりま す。OpenStack Networking にセキュリティグループをプロキシする為 に、以下の設定値を用いて下さい。

- firewall driver: nova-compute が自身で iptables ベースのフィルタリングを実行しないよ う、'nova.virt.firewall.NoopFirewallDriver' に設定しなければな りません。
- security group api : 全てのセキュリティグループ要求が OpenStack Networking サービスを経由するよう、'neutron' に設定しなければな りません。

セキュリティグループとセキュリティグループルールは、管理者とテナ ントが仮想インターフェースポートの通過を許可する通信のタイプと 通信方向(内向き/外向き)を指定できるようにしています。セキュリ ティグループはセキュリティグループルールの入れ物です。OpenStack Networking 中で仮想インターフェースポートが作成された場合、ポート はセキュリティグループに紐付けられます。セキュリティグループが指 定されない場合、ポートは「default」セキュリティグループに紐付けら れます。デフォルトでは、このグループは内向きの通信を全てドロップ し、外向きの通信を全て許可します。挙動を変える為に、このグループ にルールを追加する事が出来ます。

OpenStack Compute のセキュリティグループ API を使用する場合、セ キュリティグループは1インスタンス上の全仮想インターフェースポー トに適用されます。この理由は、OpenStack Compute のセキュリティグ ループ API がインスタンスベースであり、OpenStack Networking のよ うな仮想インターフェースポートベースではないからです。

イド

クォータは、テナントに対して利用可能なネットワークリソース数を制 限する機能を提供します。全てのテナントに対してデフォルトのクォー 夕を強制する事が出来ます。

```
/etc/neutron/neutron.conf
[QUOTAS]
# resource name(s) that are supported in quota features
quota items = network, subnet, port
# default number of resource allowed per tenant, minus for unlimited
\#default quota = -1
# number of networks allowed per tenant, and minus means unlimited
quota network = 10
# number of subnets allowed per tenant, and minus means unlimited
quota subnet = 10
# number of ports allowed per tenant, and minus means unlimited
quota port = 50
# number of security groups allowed per tenant, and minus means unlimited
quota security group = 10
# number of security group rules allowed per tenant, and minus means
 unlimited
quota security group rule = 100
# default driver to use for quota checks
quota driver = neutron.quota.ConfDriver
```

OpenStack Networking はまた、クォータ拡張 API 経由で、テナント単 位のクォータをサポートしています。テナント単位クォータを有効にす るためには、neutron.conf 中の quota driver を設定する必要がありま す。

quota driver = neutron.db.quota db.DbQuotaDriver

第28章 ケーススタディ: Networking

アリスのプライベートクラウド	127
ボブのパブリッククラウド	127

このケーススタディでは、アリスとボブがどのようにユーザに対して ネットワーク提供を扱うかを議論します。

アリスのプライベートクラウド

アリスのクラウドの主目的は、既存の認証サービスとセキュリティリ ソースを用いたインテグレーションです。このプライベートクラウドの キーとなる設計パラメータは、テナント・ネットワーク・ワークロード タイプの限定されたスコープです。この環境は、どの利用可能なネット ワークリソースがテナントから利用可能であり、どの様々なデフォルト クォータとセキュリティポリシーが利用可能かを制限するために設計さ れる可能性があります。ネットワークポリシーエンジンは、ネットワー クリソースの作成と変更を制限する為に修正される可能性があります。 この環境では、アリスはインスタンス単位のセキュリティグループポリ シーの適用における nova-network か、Neutron のポートベースのセ キュリティグループポリシーの適用のいずれを希望するかも知れませ ん。この環境における L2 アイソレーションは VLAN タギングを用いま す。VLAN タグの利用は、物理インフラの既存の機能やツールの利用によ るテナントトラフィックの素晴らしい可視性が得られます。

ボブのパブリッククラウド

ボブの主要なビジネス目的は彼の顧客に先進的なネットワークサービス を提供する事です。ボブの顧客はマルチタイアのアプリケーションス タックをデプロイしようとしています。マルチタイアのアプリケーショ ンは、既存の商用アプリケーションや新しくデプロイされるアプリケー ションのいずれかです。ボブのパブリッククラウドはマルチテナントの 商用サービスである為、この環境の L2 アイソレーションに使用する選 択肢は、オーバレイネットワークです。ボブのクラウドの他の側面は、 必要に応じて顧客が利用可能なネットワークサービスをプロビジョンで きるセルフサービス指向です。これらのネットワークサービスは、L2 ネットワーク、L3 ルーティング、ネットワークACL、NAT を含みます。 It is important that per-tenant quota's be implemented in this environment.

OpenStack Networking 利用の追加的な利点は、新しい先進的なネット ワークサービスが利用可能になった場合、これらの新しい機能をエンド ユーザに簡単に提供できる事です。

第29章 メッセージキューアーキテ クチャー

メッセージキューイングサービスは、OpenStack 内におけるプロセス間 通信を担います。OpenStack は次のキューイングサービスをサポートし ています。

- RabbitMQ
- Qpid
- ZeroMQ、または、0MQ

RabbitMQ と Qpid は両方とも、Advanced Message Queuing Protocol (AMQP) フレームワークであり、ピアツーピア通信にメッセージキューを 提供する仕組みです。 キューの実装は通常、キューサーバのプールを集 中型か分散型で展開します。 ZeroMQ はピア間の通信に直接 TCP ソケッ トを使うところが異なっています。

メッセージキューは、OpenStack 内における指揮系統の機能を担いま す。一度キューへのアクセスが許可されると、その後の認証チェックは 行われません。キューを使用するサービスがメッセージペイロード内の コンテキストとトークンのチェックを行います。 とはいえ、トークンの 期限切れには注意を払う必要があります。これは、トークンが潜在的に 再発行可能であり、インフラストラクチャ内の他のサービスを許可する 可能性があるためです。

OpenStack は、メッセージへの署名のようなメッセージレベルのコン フィデンスはサポートしていません。そのため、メッセージの通信路そ のものがセキュア化され、かつ、キューサーバーへのアクセスの際に認 証が行なわれる必要があります。 また、HA 設定の際には、キュー間の 認証と暗号化も同様に実施するべきです。

ZeroMQ メッセージングでは、IPC ソケットが各マシンで使用されます。 これらのソケットは管理者がセキュア化しない限り、ローカルメッセー ジインジェクションやスヌーピングの攻撃に脆弱な可能性があります。

第30章 メッセージングのセキュリ ティ

メッセージ通信路のセキュリティ	131
キューの認証およびアクセス制御	132
メッセージキュープロセスのアイソレーションとポリシー	134

この章では、OpenStack で使用される最も一般的なメッセージキュー製 品である、Rabbit MQ、Opid、ZeroMQ の堅牢化アプローチについて説明 します。

メッセージ通信路のセキュリティ

AMQP ベースの製品 (Qpid, RabbitMQ) は SSL を用いた通信路レベルの セキュリティに対応しています。ZeroMQ はSSL をネイティブでサポート していませんが、Labeled-IPSec や CIPSO ネットワークラベルを用いた 诵信路レベルのセキュア化に対応しています。

メッセージキューには、通信路レベルでの暗号化を強く推奨します。 メッセージクライアントとの接続に SSL を用いることで、メッセー ジサーバとの通信路における通信の改ざんや傍受を防ぐことが可能 です。以下、よく使われる 2 種類のメッセージサーバ Qpid、およ び、RabbitMQ における一般的な SSL の設定について説明します。 ク ライアント接続の正当性を保証する目的でメッセージサーバに証明機関 (CA) バンドルを設定する場合、該当ノードに限定した CA の使用を、ま たなるべくなら組織内部で管理している CA の使用を推奨します。 信 頼された CA バンドルは許可を与えるクライアント接続証明書を決定 し、SSL 接続を張るためのクライアントサーバ検証のステップを通過さ せます。 証明書とキーのファイルをインストールする際は、chmod 0600 などでファイルのパーミッションを限定させ、所有者をメッセージサー バのデーモンユーザに限定させるようにしてください。こうすること で、メッセージサーバ上の許可を与えていない他プロセスやユーザによ るアクセスを防ぐことできます。

RabbitMO サーバ SSL 設定

下記の設定を RabbitMQ のシステム設定ファイルに追加します。通常、/ etc/rabbitmg/rabbitmg.conf に保存されています。

```
{rabbit, [
     {tcp_listeners, [] },
     {ssl_listeners, [{"<ip address or hostname of management network
 interface", 5671}]},
     {ssl options, [{cacertfile, "/etc/ssl/cacert.pem"},
                     {certfile, "/etc/ssl/rabbit-server-cert.pem"},
                     {keyfile, "/etc/ssl/rabbit-server-key.pem"},
                     {verify, verify peer},
                     {fail if no peer cert, true}]}
  ]}
].
```

'tcp listeners' オプションを '「フ' に指定し、非 SSL ポート の接続を受け付けない設定にしていることに注意してください。 'ssl listeners' オプションはサービスの管理ネットワークのみ受け付 けるよう限定すべきです。

RabbitMQ の SSL 設定に関する詳細は、以下を参照してください。

- RabbitMQ 設定
- RabbitMO SSL

Opid サーバ SSL 設定

Apache Foundation が Opid のメッセージングセキュリティガイドを発 行しています。

Apache Qpid SSL

キューの認証およびアクセス制御

RabbitMQ と Qpid はキューへのアクセス制御を目的とした、認証および アクセス制御の仕組みを持っています。ZeroMQ にはこのような仕組みは 備わっていません。

Simple Authentication and Security Layer (SASL) はインターネッ トプロトコルにおける認証とデータセキュリティのフレームワークで す。RabbitMQ と Qpid は SASL の他、プラグイン形式の認証メカニズ ムを提供しており、単純なユーザ名とパスワードよりもセキュアな認証 が可能になっています。RabbitMQ は SASL をサポートしているものの、 現在の OpenStack は特定の SASL 認証メカニズムの使用を許可してい ません。RabbitMQ では、非暗号化接続でのユーザ名とパスワード認証 か、X.509 クライアント証明書を用いたセキュアな SSL 接続でのユーザ 名とパスワード認証がサポートされています。

全ての OpenStack サービスノードにおいて、メッセージキューへのクラ イアント接続に X.509 クライアント証明書を設定することを推奨しま す。また可能なら、X.509 クライアント証明書での認証も推奨します。 (現在、Qpid のみがサポート) ユーザ名とパスワードを用いる場合、 キューに対するアクセスの監査の粒度を細かくする目的で、アカウント はサービス毎、ノード毎に作成するべきです。

また、キューサーバが使用する SSL ライブラリについても展開の前 に考慮しておく必要があります。Qpid はMozilla の NSS ライブラリ を、RabbitMQ は OpenSSL を使う Erlang の SSL モジュールを用いてい ます。

認証設定例 - RabbitMO

RabbitMQ サーバで、デフォルトの 'guest' ユーザを削除します。

rabbitmactl delete user quest

RabbitMQ サーバにて、メッセージキューを使用する各 OpenStack サー ビス、または、ノード毎にユーザアカウントと権限を設定します。

rabbitmuctl add user compute01 password rabbitmqctl set_permissions compute01 ".*"".*" .*"

追加の設定情報は以下を参照してください。

- RabbitMQ アクセス制御
- RabbitMQ 認証
- RabbitMQ プラグイン
- RabbitMQ SASL 外部認証

OpenStack サービス設定 - RabbitMQ

[DEFAULT]

rpc backend=nova.openstack.common.rpc.impl kombu rabbit use ssl=True rabbit host= rabbit port=5671 rabbit user=compute01 rabbit password=password kombu ssl keyfile=/etc/ssl/node-key.pem kombu ssl certfile=/etc/ssl/node-cert.pem

kombu ssl ca certs=/etc/ssl/cacert.pem

注意: Grizzly バージョンでは、設定ファイルに "kombu ssl version" が定義されていると、下記の Python トレースバックエラーが発生しま す。 'TypeError: an integer is required' "kombu ssl version" を 設定ファイルから削除することで、このエラーを防ぐことが可能です。 現在の状況は、bug report 1195431 https://bugs.launchpad.net/oslo/ +bug/1195431 を参照してください。

認証設定例 - Qpid

設定情報は以下を参照してください。

- Apache Qpid 認証
- Apache Opid 認可

OpenStack サービス設定 - Qpid

[DEFAULT]

rpc backend=nova.openstack.common.rpc.impl qpid apid protocol=ssl

qpid hostname=<ip or hostname of management network interface of messaging

gpid port=5671gpid username=compute01

gpid password=password

オプションとして Qpid で SASL を使用する場合は、下記のように SASL メカニズムを指定します。

gpid sasl mechanisms=<space separated list of SASL mechanisms to use for

メッセージキュープロセスのアイソレー ションとポリシー

各プロジェクトは多数のサービスを提供し、それぞれがメッセージを送 信、消費します。メッセージを送信した各バイナリは、リプライのみの 場合、該当キューからメッセージを消費するはずです。

メッセージキューサービスのプロセスは、他のキューサービスのプロセ スや、同一マシン上の他プロセスと分離すべきです。

名前空間

ネットワーク名前空間の設定は、OpenStack コンピュートハイパーバイ ザを動作させる全てのサービスで強く推奨します。ネットワーク名前空 間を用いることで、VM ゲストと管理ネットワークのトラフィックがブ リッジングされることを防ぎます。

ZeroMQ メッセージングを使用する場合、ネットワーク経由のメッセー ジ受信と、IPC経由によるローカルプロセスへのメッセージ送信のため に、各ホストに最低 1 つの ZeroMQ メッセージレシーバーを走らせる必 要があります。IPC 名前空間内にプロジェクト毎で独立したメッセージ レシーバーを構築することが可能であり望ましいです。また同様に、同 ープロジェクト内でも異なるサービスごとに独立したメッセージレシー バーを構築することが望ましいです。

ネットワークポリシー

キューサーバーは管理ネットワークからの接続のみを受け付けるべきで あり、この方針はあらゆる実装に適用されます。サービスの設定を通 して実装し、任意でグローバルネットワークポリシーを追加で実装しま す。

ZeroMQ を使用するのであれば、各プロジェクトで独立した専用のポー ト上で動作する ZeroMQ レシーバープロセスを用意すべきです。これ は、AMQP のコントロール exchange の概念に相当します。

強制アクセス制御

各プロセスに行なった設定は、他プロセスに影響を与えないよう制限を かけるべきです。そのためには、ダイレクトアクセス制御のみではな く、強制アクセス制御を使用します。このような制限をかけるのは、同 ーマシンで動作する他プロセスとの隔離を防ぐことが目的です。

第31章 ケーススタディ:メッセー ジング

アリスのプライベートクラウド	137
ボブのパブリッククラウド	137

メッセージキューは、多数の OpenStack サービスを支える重要なイン フラストラクチャであり、特にコンピュートサービスと強く結びついて います。メッセージキューサービスの性質上、アリスとボブが抱えるセ キュリティ上の懸念はよく似ています。特に大きな残課題は、数多くの システムがキューにアクセスしているものの、キューメッセージのコン シューマーには、キューを発行したホストやサービスを確かめる手立て がないことです。攻撃者がキューの発行に成功すると、仮想マシンの作 成や削除をしたり、あらゆるテナントのブロックストレージに接続する など、他にも無数の悪意のある攻撃が可能になってしまいます。 これを 防ぐためのソリューションが出始めており、いくつかはメッセージへの 署名と暗号化を使ったものが OpenStack の開発プロセスで進んでいま す。

アリスのプライベートクラウド

このケースでは、アリスの方法はボブがパブリッククラウドに展開した 方法と同じものを使用します。

ボブのパブリッククラウド

ボブは、コンピュートサービスを支えるインフラストラクチャとネット ワークがある時点でセキュリティ侵害に会うと仮定します。そして、 メッセージキューへのアクセス制限の重要性に気づきました。 そこ で、RabbitMQ サーバーに SSL と X.509 クライアントアクセス制御を適 用することにします。これにより、キューアクセスを持たないシステム を乗っ取られても、攻撃者の能力を制限することができます。

さらにボブは、メッセージサーバーと通信できるエンドポイントを、強 力なネットワークの ACL ルールセットで制限することにしました。この 2個目の制限が、他の防御が失敗した場合の保険として機能します。

第32章 データベースバックエンド の考慮事項

データベースサーバーの選択は OpenStack 環境のセキュリティにおける 重要な考慮事項です。セキュリティの考慮事項はデータベースサーバー の選択における唯一の基準ではありませんが、このドキュメントではこ れらのみを取り扱います。実際のところ、OpenStack は 2 種類のデータ ベース PostgreSQL と MySQL のみをサポートします。

PostgreSQL は、Kerberos 認証、オブジェクトレベルのセキュリティ、 暗号化のサポートなど、数多くの望ましいセキュリティ機能を有しま す。PostgreSQL コミュニティは実用的なセキュリティ実践を推進するた めに、わかりやすいガイダンス、ドキュメント、ツールを十分に提供し てきました。

MySQL は大規模なコミュニティを持ち、幅広く適用され、高可用性のオ プションを提供しています。MvSQL も、プラグイン認証機構の方法に より高度なクライアント認証を提供する機能があります。MySQL コミュ ニティから派生したディストリビューションは、考慮事項に対する多 くのオプションを提供しています。セキュリティの考え方やディストリ ビューションに提供されるサポートレベルの評価に基づいて、特定の MvSQL ディストリビューションを選択することが重要です。

データベースバックエンドのヤキュリ ティ参考資料

MySQL や PostgreSQL を導入する人は、既存のセキュリティガイダンス を参照することが推奨されます。いくつかの参考資料を以下に一覧化し ます。

MySQL:

- OWASP MySQL Hardening
- MySQL Pluggable Authentication
- Security in MySQL

PostgreSQL:

- OWASP PostgreSQL Hardening
- Total security in a PostgreSQL database

第33章 データベースアクセス制御

OpenStack データベースアクセスモデル	141
データベースの認証とアクセス制御	143
SSL 通信利用のための必須ユーザーアカウント	144
X.509 証明書を用いた認証	144
OpenStack サービスのデータベース設定	145
Nova Conductor	145

それぞれの OpenStack コアサービス (Compute, Identity, Networking, Block Storage) は、状態や設定に関する情報をデータベースに保存しま す。本章では、データベースが現在 OpenStack でどのように使用されて いるのかを議論します。セキュリティの考慮事項、データベースバック エンドの選択によるセキュリティへの影響についても説明します。

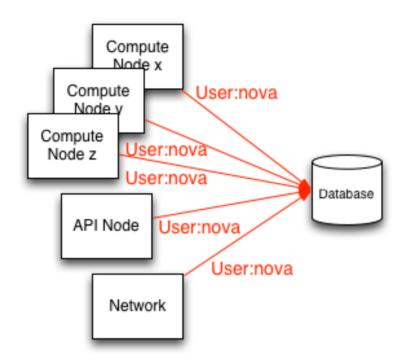
OpenStack データベースアクセスモデル

OpenStack プロジェクトの中にあるすべてのサービスは単一のデータ ベースにアクセスします。データベースへのテーブルの作成や行単位の アクセス制限に関する明確なポリシーは今のところありません。

OpenStack には、データベース操作の詳細な制御に関する一般的な決ま りがありません。アクセス権と権限は単にノードがデータベースにアク セスするかしないかに基づいて与えられます。このシナリオでは、デー タベースにアクセスするノードは、DROP、INSERT、UPDATE 関数の完全な 権限を持っているでしょう。

精細なアクセス制御

OpenStack の各サービスとそれらのプロセスはデフォルトで、共有クレ デンシャルを使用してデータベースにアクセスします。これにより、 データベース操作の監査および、サービスとそのプロセスからデータ ベースへのアクセス権の剥奪が特に難しくなります。

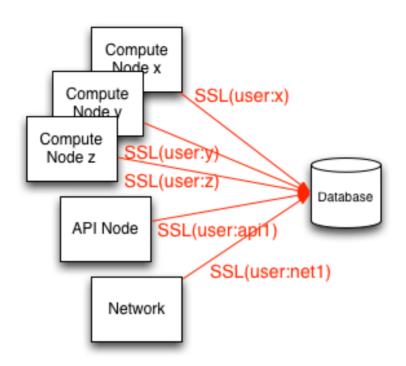


Nova Conductor

コンピュートノードは、プロジェクトのインスタンスをホストするた め、OpenStack で最も信頼できないサービスです。nova-conductor サー ビスは、コンピュートノードとデータベースの中継役として動作する、 データベースプロキシとして処理するために導入されました。その結果 について本章で後ほど議論します。

以下の事項を強く推奨します。

- ・ すべてのデータベース通信の管理ネットワークへの分離
- SSL を使用したセキュア通信
- OpenStack サービスのエンドポイントごとに一意なデータベースユー ザーアカウントの作成(下図)



データベースの認証とアクセス制御

データベースにアクセスする辺りにリスクがあるため、データベースに アクセスする必要があるノードごとに一意なデータベースユーザーアカ ウントを作成することを強く推奨します。この機能を実行することによ り、コンプライアンスを保証するため、またはノードのセキュリティ被 害にあった際に分析および監査をより良くできます。また、検知した際 に被害にあったノードからデータベースへのアクセス権を削除すること により、被害にあったホストを分離できます。サービスのエンドポイン トのデータベースユーザーアカウントごとにこれらを作成するとき、こ れらに SSL を要求するよう確実に設定することに注意してください。代 わりに、セキュリティを向上させるために、データベースアカウントが ユーザー名とパスワードに加えて X.509 証明書認証を使用するよう設定 することを推奨します。

権限

データベースの作成と削除、ユーザーアカウントの作成、ユーザーの権 限の更新に関する完全な権限を持つ、別々のデータベース管理者(DBA) アカウントが作成され、保護されるべきです。これは、不注意な設定ミ

スを防ぎ、リスクを減らし、被害の範囲を小さくする、責任の分離を実 現する簡単な方法です。

データベースユーザーアカウントは OpenStack サービスのために作成さ れ、ノードがメンバーであるサービスに関連するデータベースだけに制 限された権限を持つ各ノードのために作成されます。

SSL 通信利用のための必須ユーザーアカ ウント

設定例 #1: (MvSQL)

GRANT ALL ON dbname. * to 'compute01'@'hostname' IDENTIFIED BY 'password' REQUIRE SSL:

設定例 #2: (PostareSQL)

pg hba.conf において:

hostssl dbname compute01 hostname md5

このコマンドは SSL 経由で通信する機能を追加するのみであり、排他的 ではないことに注意してください。SSL を唯一のアクセス方法にするた めに、暗号化されていない通信を許可するかもしれない他のアクセス方 法は無効化されるべきです。

「md5」パラメーターは認証方式をハッシュ化パスワードとして定義しま す。以下のセクションでセキュアな認証例を提供します。

X.509 証明書を用いた認証

認証に X.509 クライアント証明書を要求することにより、セキュリティ を向上させられるかもしれません。この方法でデータベースに認証する ことにより、データベースに接続しているクライアントの ID 確認をよ り強力にでき、通信が確実に暗号化されます。

設定例 #1: (MvSQL)

'/C=XX/ST=YYY/L=ZZZZ/0=cloudycloud/CN=cloud-ca';

GRANT ALL on dbname.* to 'compute01'@'hostname' IDENTIFIED BY 'password' REQUIRE SUBJECT '/C=XX/ST=YYY/L=ZZZZ/0=cloudycloud/CN=compute01' AND ISSUER

設定例 #2: (PostgreSQL)

hostssl dbname compute01 hostname cert

OpenStack サービスのデータベース設定

お使いのデータベースサーバーが認証に X.509 証明書を要求するよう設 定している場合、データベースバックエンドのために適切な SQLAlchemy クエリーパラメーターを指定する必要があります。これらのパラメー ターは初期接続文字列に用いる証明書、秘密鍵、認証局の情報を指定し ます。

MySQL への X.509 証明書認証の :sql connection 文字列の例:

sql connection = mysql://compute01:password@localhost/nova? charset=utf8&ssl ca=/etc/mysql/cacert.pem&ssl cert=/etc/mysql/server-cert. pem&ssl key=/etc/mysql/server-key.pem

Nova Conductor

OpenStack Compute は nova-conductor というサブサービスを提供しま す。これは、nova-conductor と直接接する nova コンピュートノードが データ永続性の要求を満たすことを主目的として、それらがデータベー スと直接通信する代わりにデータベース接続を中継します。

Nova-conductor は RPC 経由でリクエストを受信します。そして、デー タベース、テーブル、データへの精細なアクセス権なしでサービスを呼 び出す動作を実行します。Nova-conductor は本質的にコンピュートノー ドがデータベースに直接アクセスすることを抽象化します。

この抽象化は、サービスがパラメーター、ストアドプロシージャーのよ うなものを用いたメソッドの実行を制限し、数多くのシステムがデータ ベースのデータに直接アクセスしたり変更したりすることを防ぐという 利点を提供します。これは、一般的なストアドプロシージャーという頻 繁に批判される、データベース自体の文脈や範囲の中で、これらの手順 を保存して実行することなく実現されます。



残念なことに、このソリューションはより詳細なアクセス制御とデータアクセスの監査機能を複雑にします。nova-conductor サービスは RPC 経由でリクエストを受信するため、メッセージングのセキュリティを改善する重要性を強調させます。メッセージキューにアクセスするすべてのノードは、nova-conductor により提供されるこれらの方式を実行し、データベースを効率的に変更するかもしれません。

最後に、Grizzly リリース時点では、nova-conductor が OpenStack Compute 全体で使用されないというギャップが存在することに注意してください。その設定に依存して、nova-conductor を使用しても、導入者が個々のコンピュートホストにデータベースの権限を与える必要性を避けられないかもしれません。

nova-conductor は OpenStack Compute のみに適用されるので、Telemetry (Ceilometer)、Networking、Block Storage のような他の OpenStack コンポーネントの動作のために、コンピュートホストから直接データベースにアクセスする必要があるかもしれないことに注意してください。

導入者は nova-conductor を有効化または無効化する前に両方の設定の利点とリスクを比較検討すべきです。Grizzly リリースでは nova-conductor の利用を推奨する準備ができていません。しかしながら、追加の機能が OpenStack にもたらされるので、この推奨について変更されると確信しています。

nova-conductor を無効化するために、以下の事項を(コンピュートホストの)nova.conf ファイルに記入します。

[conductor]

use_local = true

第34章 データベース通信セキュリ ティ

データベースサーバーの IP アドレスバインド	149
データベース通信	149
MySQL SSL 設定	150
PostgreSQL SSL 設定	150

本章はデータベースとのネットワーク通信に関連する問題を取り扱いま す。これには、IP アドレスのバインドや SSL を用いた暗号化ネット ワーク诵信を含みます。

データベースサーバーの IP アドレスバ インド

サービスとデータベース間の機微なデータベース通信を隔離するため に、データベースサーバーが隔離された管理ネットワーク経由のみで データベースと通信できるように設定することを強く推奨します。デー タベースサーバーがクライアントからの诵信用のネットワークソケット をバインドするインターフェースまたは IP アドレスを制限することに より、これを実現できます。

MvSQL のバインドアドレスの制限

my.cnf の場合:

[mysqld]

bind-address dip address or hostname of management network interface>

PostgreSQL のバインドアドレスの制限

postgresal.conf の場合:

listen addresses = <ip address or hostname of management network interface>

データベース通信

データベース通信を管理ネットワークに制限することに加えて、クラウ ド管理者がそれらのデータベースのバックエンドに SSL を要求するよ

うに設定することを強く推奨します。データベースのクライアント接続 に SSL を使用することにより、改ざんや盗聴から通信を保護できます。 次のセクションで議論するように、SSL を使用することにより、データ ベースのユーザー認証に X.509 証明書(一般的に PKI として参照され ます)を使用するフレームワークも提供できます。以下は、2 つの有名 なデータベースバックエンド MySQL と PostgreSQL に SSL を典型的に 設定する方法について示します。



注記

注: 証明書と鍵ファイルをインストールするとき、ファイル のパーミッションが制限されていることを確認します。たと えば、chmod 0600 を実行すると、データベースサーバー上の 他のプロセスやユーザーによる権限のないアクセスを防ぐた めに、所有者がデータベースデーモンのユーザーに制限され ます。

MySQL SSL 設定

以下の行をシステム全体の MvSQL 設定ファイルに追加する必要がありま す。

my.cnf の場合:

[[mysqld]]

ssl-ca=/path/to/ssl/cacert.pem ssl-cert=/path/to/ssl/server-cert.pem ssl-key=/path/to/ssl/server-key.pem

オプションとして、暗号化通信に使用される SSL 暗号を制限した い場合、暗号の一覧と暗号文字列を設定するための構文は http:// www.openssl.org/docs/apps/ciphers.html を参照してください。

ssl-cipher='cipher:list'

PostgreSQL SSL 設定

以下の行をシステム全体の PostgreSQL 設定ファイル postgresql.conf に追加する必要があります。

ssl = true

オプションとして、暗号化通信に使用される SSL 暗号を制限したい場合、暗号の一覧と暗号文字列を設定するための構文は http://www.openssl.org/docs/apps/ciphers.html を参照してください。

ssl-ciphers = 'cipher:list'

サーバー証明書、鍵、認証局 (CA) のファイルを \$PGDATA ディレクトリの以下のファイルに置く必要があります。

- \$PGDATA/server.crt サーバー証明書
- ・ \$PGDATA/server.key server.crt に対応する秘密鍵
- \$PGDATA/root.crt 信頼された認証局
- \$PGDATA/root.crl 証明書失効リスト

第35章 ケーススタディ: データ ベース

アリスのプライベートクラウド	153
ボブのパブリッククラウド	153

このケーススタディでは、アリスとボブがどのようにデータベースを選 択し、それぞれのプライベートクラウドとパブリッククラウド用に設定 するのかについて議論します。

アリスのプライベートクラウド

アリスの組織は高可用性に関心があります。そのため、データベースに MvSQL を使用することにしました。彼女はさらに、管理ネットワークに データベースを配置し、アクセスを確実にセキュアにするために、サー ビス間の相互認証とともに SSL を使用します。データベースの外部ア クセスはなく、データベースとそのアクセスエンドポイントに、組織の 自己署名ルート証明書で署名した証明書を使用します。アリスは各デー タベースユーザーに対して別々のユーザーアカウントを作成し、認証の ためにパスワードと X.509 証明書の両方を使用するようデータベースを 設定します。高精細なアクセス制御ポリシーと監査をサポートしたいの で、nova-conductor サブサービスを使用しないことにします。

ボブのパブリッククラウド

ボブはプロジェクトのデータの確実な分離に関心があります。そのた め、彼はより強力なセキュリティ機能が知られている Postgres データ ベースを使用することにしました。データベースは管理ネットワークに 置かれ、サービス間の相互認証とともに SSL を使用します。データベー スは管理ネットワークにあるので、組織の自己署名ルート証明書で署名 した証明書を使用します。ボブは各データベースユーザーに対して別々 のユーザーアカウントを作成し、認証のためにパスワードと X.509 証明 書の両方を使用するようデータベースを設定します。高精細なアクセス 制御をしたいので、nova-conductor サブサービスを使用しないことにし ます。

第36章 データプライバシ関連

データの所在	 155
データの処分	 156

OpenStack はマルチテナンシーをサポートするよう設計されており、 これらのテナントには、まず間違いなく異なるデータ要件があるでしょ う。クラウド構築者とオペレータとして、あなたは自身の OpenStack 環 境が様々なデータプライバシー関連と規制を扱える事を確認する必要 があります。OpenStack 実装に関連するので、本章ではデータプライバ シーにまつわる以下のトピックを扱います。

- データの所在
- データの処分

データの所在

データのプライバシーと分割は、ここ数年クラウド採用の最初の障壁と してずっと言及されてきました。クラウド中でデータを所有するのは誰 か、このデータの管理人としてクラウドオペレータは結局信用できるの か否かという事は、これまで重要な問題でした。

多数の OpenStack サービス群は、テナントやテナント情報の所在に属す るデータとメタデータを管理します。

OpenStack クラウドに保存されたテナントデータは以下の項目を含まれ ます:

- Swift オブジェクト
- Compute のインスタンスの一時的ファイルシステムストレージ
- Compute インスタンスのメモリ
- Cinder のボリュームデータ
- Comptue アクセス用パブリックキー
- ・ Glance 中の仮想マシンイメージ
- ・マシンのスナップショット
- OpenStack Compute の設定用ドライブ拡張に渡されたデータ

以下の不完全な一覧を含む、OpenStack クラウドが保存したメタデータ:

- 組織名
- ・ ユーザの「実名」
- 実行中のインスタンスのサイズ、バケット、オブジェクト、ボリュー ム、その他クォータ関連の項目
- 実行中のインスタンス又は保存されたデータの経過時間
- ユーザの IP アドレス
- Compute イメージ作成用に内部で生成されたプライベートキー

データの処分

OpenStack オペレータは、ある一定レベルのテナントデータ破棄保証が 提供できるよう努力しなければんりません。ベストプラクティスは、ク ラウドシステムメディア(デジタル・非デジタル)を破棄、組織コント ロール外へのリリース、再利用の為の開放より前にオペレータがメディ アをクリアする事を推奨しています。メディアのクリア方法は、特定の セキュリティドメインと情報のデリケートさが与えられた、適切なレベ ルの強度と完全性を実装すべきです。

> 「データのサニタイズは、情報が取得あるいは再構築で きない事の合理的な保証が得られるよう、システム媒体 から情報を削除する為に使用されるプロセスです。サニ タイズ技術(媒体の情報のクリア、破棄、破壊を含む) は、こうした媒体が再利用・譲渡・破棄された際に、組 織の情報が閲覧権限のない個人に開示される事を防ぎま す。I 「NIST Special Publication 800-53 Revision 37

NIST が採用した汎用のデータ破棄とサニタイズのガイドラインは、セ キュリティ制御を推奨しています。クラウドオペレータは以下のことを すべきです。

- 1. 媒体サニタイズと破棄行為の追跡・文書化・検証を行うこと。
- 2. 適切なパフォーマンスを検証する為、サニタイズ設備と過程の評価を 行うこと。
- 3. 持ち運び可能なリムーバルストレージデバイスをクラウドインフラに 接続する前にサニタイズすること。

4. サニタイズできないクラウドシステム媒体を破壊すること。

OpenStack デプロイでは、以下の事も実施する必要があるでしょう。

- ・ 安全なデータの消去
- インスタンスメモリの消去
- ・ ブロックストレージボリュームデータ
- Compute インスタンスの一時ストレージ
- ・ 物理サーバのサニタイズ

安全に消去されなかったデータ

OpenStack 中でいくつかのデータは削除されるかも知れませんが、上記 で触れた NIST 標準の文脈における安全な消去ではありません。これは 一般に、データベースに保存された上記で定義したメタデータと情報の 大半又は全てに当てはまります。これは、データベースとシステム設定 のどちらか又は両方で、自動バキュームと定期的な空き領域のクリアを 実施する事で解決する事ができるかも知れません。

インスタンスメモリの消去

様々なハイパーバイザの特色はインスタンスメモリの扱いにあります。 This behavior is not defined in OpenStack Compute, although it is generally expected of hypervisors that they will make a best effort to scrub memory either upon deletion of an instance, upon creation of an instance, or both. この挙動は OpenStack Compute で 定義されておらず、ハイパーバイザがインスタンス作成時または削除 時、あるいはその両方において、ベストエフォートでメモリのクリン アップを行うだろうと一般に考えられています。

Xen は、専用のメモリ範囲をインスタンスに明確に割り当て、インスタ ンス(又は Xen の用語でドメイン)破棄時にそのデータをクリンアップ します。KVM はより大いに Linux のページ管理に依存しています。 KVM のページングに関する複雑なルールセットは、KVM の文書で定義されて います。

Xen のメモリバルーン機能の使用は情報漏えいの結果になりかねないと いう事への注意は重要です。

これらや他のハイパーバイザでは、ハイパーバイザ毎のドキュメントを 参照すると良いでしょう。

Cinder のボリュームデータ

OpenStack Block Storage のプラグインは様々な方法でデータの保存を 行います。多くのプラグインはベンダー又はストレージ技術に特化し ていますが、その他は LVM や ZFS といったファイルシステム辺りのよ り手作りのソリューションです。安全にデータを破壊する方法はプラグ イン毎、ベンダーのソリューション毎、ファイルシステム毎に異なるで しょう。

ZFS のようないくつかのバックエンドは、データの漏洩を防ぐために copy-on-write に対応しています。この場合、まだ書き込まれていな いブロックからの読み込みは常にゼロを返します。LVM のような他の バックエンドでは copy-on-write を標準でサポートしておらず、よって Block Storage プラグインが以前に書き込まれたブロックをユーザがア クセスする前に上書きする役割を担います。あなたが選択したボリュー ムバックエンドが提供する機能をレビューし、これらの機能が提供しな い事についての回避策が利用できるかを調べる事は重要です。

最後に、これは OpenStack の機能ではありませんが、ベンダーと開発者 がボリュームの暗号化機能をサポートするか、あるいは追加可能である かも知れません。この場合、データの破壊は単にキーを破棄するだけで す。

Compute インスタンスの一時ストレージ

一時ストレージの作成・削除は選択したハイパーバイザや OpenStack Compute プラグインに依存するでしょう。

compute 用の libvirt プラグインは、ファイルシステム又は LVM 上の 一時ストレージを直接管理出来ます。ファイルシステムストレージは一 般にデータを削除する際に上書きはしませんが、ユーザに対して汚れた エクステンドが用意されないという保証があります。

ブロックデバイスベースである LVM をバックエンドにした一時ストレー ジを使用する場合、OpenStack Compute は情報漏えいを防ぐために、安 全にブロックを削除する必要があります。これらには、過去において、 不適切な一時ブロックストレージデバイスの削除に関連する情報漏洩の 脆弱性がありました。

データが含まれたエクステンドがユーザに用意されないので、一時ブ ロックストレージデバイス用としてファイルシステムストレージは LVM より安全なソリューションです。しかしながら、ユーザデータが破壊さ れない事を覚えておく事は重要であり、このためバックエンドのファイ ルシステムの暗号化が提案されています。

物理サーバのサニタイズ

Nova の物理サーバドライバは開発中だったのですが、Ironicと呼ばれる 独立したプロジェクトに移管される事になりました。この文書の執筆時 点では、Ironic には物理ハードウェア上にあるテナントデータのサニタ イズ機能はまだありません。

加えて、物理マシンのテナントでは、システムファームウェアの修正が 可能です。##link:Management/Node Bootstrapping## で説明されている TPM 技術は、許可されていないファームウェアの変更を検知する解決策 を提供します。

第37章 データ暗号化

Object Storage オブジェクト	161
Block Storage ボリューム & インスタンスの一時ファイルシステ	
Δ	162
ネットワークデータ	162

このオプションは、データをディスクに保存する箇所やデータをネット ワーク経由で転送する箇所でテナントデータを暗号化する実装者用で す。ユーザが自分自身のデータをプロバイダに送信する前にデータを暗 号化するという一般的な推奨の上またはその先にあるものです。

テナントの為のデータ暗号化の重要性は、攻撃者がテナントデータにア クセスできる事をプロバイダが想定するリスクに広く関係しています。 政府での要件があるかも知れませんし、(ポリシー単位の要件と同様) パブリッククラウド提供者用の随意契約に関しては、随意契約の中、あ るいは判例法の中でさえ要求されるかも知れません。テナント暗号化ポ リシーを選択する前に、リスク分析と法務コンサルの忠告を受ける事を お勧めします。

暗号化の単位は、好ましい方から順にインスタンス単位又はオブジェク ト単位、プロジェクト単位、テナント単位、ホスト単位、クラウド集 合単位です。この推奨順は、実装の複雑さと困難さの順序の逆です。現 在、いくつかのプロジェクトでは、テナント単位ですら対度の荒い暗号 化の実装が困難又は不可能です。実装者がテナントデータの暗号化を最 善策とする事をお勧めします。

時々、データ暗号化は単に暗号鍵を捨てるという事による、信頼できる テナントやインスタンス単位のデータ削除可能性と明確に関係がありま す。そうするよう記述すべきですし、信頼できる安全な方法でこれらの 鍵を破壊する事が従来になります。

ユーザ用のデータ暗号化をする機会は現存します。

- Object Storage オブジェクト
- Block Storage ボリューム & インスタンスの一時ファイルシステム
- ネットワークデータ

Object Storage オブジェクト

Object Storage 中のオブジェクトの暗号化の可能性は、現時点ではノー ド単位のディスクレベル暗号化に限定されています。しかしながら、オ

ブジェクト単位の暗号化用のサードパーティ拡張やモジュールが存在し ます。これらのモジュールはアップストリームに提案されていますが、 この文書を書いている時点では公式に認可されていません。下記はそれ らの幾つかへのポインタです。

https://github.com/Mirantis/swift-encrypt

http://www.mirantis.com/blog/on-disk-encryption-prototype-foropenstack-swift/

Block Storage ボリューム & インスタン スの一時ファイルシステム

暗号化ボリュームの可否は選択したサービスバックエンドに依存しま す。いくつかのバックエンドは暗号化を全くサポートしないかも知れま せん。

Block Storage と Compute は両方、LVM ベースのストレージをサポー トしているので、両システムに簡単に適用可能な例を提供します。LVM を用いたデプロイでは、暗号化はベースの物理ボリュームに対して実 施できます。暗号化ブロックデバイスは、pvcreate を使用して復号 化したブロックデバイスの上に作成した LVM 物理ボリューム (PV) を 用いて、標準の Linux ツールを使用して作成する事ができます。それ から、vgcreate 又は vgmodify ツールを使用して、暗号化した物理ボ リュームを LVM のボリュームグループ (VG) に追加できます。

Havana リリース向けの1機能が、ディスクに書き込まれる前の VM デー タの暗号化を提供しています。これは、ストレージデバイス上でもデー タのプライバシーが管理される事を可能にします。このアイデアは自 己暗号化ドライブが機能する方法と同様です。この機能は、VM には通 常のブロックストレージデバイスとして見えますが、仮想化ホストでは ディスクにデータが書き込まれる前にデータが暗号化されます。ブロッ クサーバは、特別な処理がスナップショットやライブマイグレーション といった Block Storage の機能に向けて要求される事を除いて、暗号化 されていないブロックを読み書きする場合と全く同様に処理が行われま す。この機能は独立した鍵管理を使用する事に注意して下さい。

ネットワークデータ

compute のテナントデータは IPSec 又は他のトンネルで暗号化できま す。OpenStack での共通または標準の機能ではありませんが、やる気と 興味がある実装者に1つの選択肢が利用できます。

イド

Block Storage は、マウント可能なボリュームの提供に向けた様々な機 構をサポートします。Block Storage の各バックエンドドライバ用に 推奨を指定する事はこのガイドの範囲外です。性能の為に、多くのスト レージプロトコルは暗号化されていません。iSCSI のような幾つかのプ ロトコルは、認証と暗号化セッションを提供できます。これらの機能を 有効にする事を推奨します。

第38章 鍵管理

165

頻繁に触れられるテナントデータのプライバシーとクラウドプロバイ ダーの法的責任の限度についての懸念に対処するために、OpenStack コ ミュニティはデーターの暗号化を様々な個所へ適用することに興味を 持っています。エンドユーザーがクラウドにデータをセーブする前に それらを暗号化することは比較的に簡単で、メディアファイル、デー タベースアーカイブなどテナントオブジェクトに実行可能な方法です。 しかし、クライアント側の暗号化が仮想マシンのイメージを使用する場 合、ブロックストレージなどクライアントの介入では、データの更なる 利用のために解除する鍵を提示する形式が必要です。しかし、クライア ント側の暗号化が仮想マシンのイメージを使用する場合、ブロックスト レージなどクライアントの介入では、データの更なる利用のために解除 する鍵を提示する形式が必要です。シームレスにデータを保護し、クラ イアントの鍵を管理し対話的に鍵を提供することで負担をかけることな く、それがアクセスできるようにするには、OpenStack 内に鍵管理サー ビスを求められます。OpenStack の一環として、暗号化と鍵管理サービ スの提供は、データ保存セキュリティ導入を容易にし、クラウド・プロバ イダーの法的責任を制限する追加の利点と、プライバシーとデータの誤 使用に関する顧客の懸念に対処しています。プロバイダの法的責任は、 マルチテナントのパブリッククラウドで誤った調査によってテナント データを引き渡す事が懸念されています。

鍵管理は、まだ開発の初期段階で、OpenStack の正式コンポーネン トになる過程の途中です。詳細は、https://github.com/cloudkeep/ barbican/wiki/ pagesを参照してください。

鍵管理は、鍵の作成と安全な保存(サービスマスター鍵付き)をサポート しなければなりません。設計上の問題として現状まだ議論されているも のとして、いくつの相互運用性プロトコル(KMIP)をサポートするか、鍵 の形式、認証管理があります。鍵管理は、第三者のハードウェアセキュ リティモジュール(HSM)を必要とする配備を容易化するためにプラグイン 可能になります。

OpenStack のブロックストレージ Cinder は、ボリュームの暗号化を提 供するために鍵管理との統合を検討した最初のサービスです。

参考資料:

Barbican

• KMIP

第39章 ケーススタディ: テナント データ

アリスのプライベートクラウド	167
ボブのパブリッククラウド	167

アリスとボブの話に戻ると、このセクションでは、彼らの特定のテナン トのデータのプライバシー要件についてより詳細に説明します。具体的 には、アリスとボブの両者がテナントのデータ、データの破壊、データ の暗号化をどのように対処するかを見てみます。

アリスのプライベートクラウド

アリスのケーススタディで説明したように、データ保護は非常に重要で す。アリスは、あるテナントのデータの情報漏洩が、他のテナントデー 夕の損害を引き起こさないように、保証することが必要です。アリスは また、データ破壊の文書化を必要とする強い規制上の要件を持っていま す。アリスは、以下の方法でこれを提供します:

- プログラムやプロジェクトが終了する際に、好ましくないテナント データを削除するための手順を確立すること
- CMDBのチケット発行を使用して、顧客データとメタデータの両方の破 壊を追跡する
- ・ ボリュームストレージ
- ・ 物理サーバーの問題
- 安全な一時ディスクを提供するために、アリスは暗号化ファイルシス テム上に gcow2 のファイルを実装しています。

ボブのパブリッククラウド

ボブのケーススタディの最初で説明したように、テナントのプライバ シーは非常に重要です。ボブはインフラレイヤーで相互にテナントを分 離する要件およびアクションに加えて、ボブはまたテナントデータのプ ライバシーを保する必要があります。 ボブは以下を用いて、これを提供 します:

・顧客がデータを量産する時に、好ましくない顧客データを削除するた めの手順を確立する

- CMDBのチケット発行を使用して、顧客データとメタデータの両方の破 壊を追跡します。
- ・ボリュームストレージ
- ・ 物理サーバーの問題
- ・安全な一時ディスクを提供するために、ボブは暗号化ファイルシステ ム上に qcow2 のファイルを実装しています。

第40章 ハイパーバイザーの選択

OpenStack	におけるハイパーバイザー	169
選択基準		170

仮想化はクラウドを構築できるようにする柔軟性や他の利点を提供しま す。しかしながら、仮想化スタックは、ハイパーバイザーへの攻撃に関 連するリスクを減らすために、適切にセキュア化する必要もあります。 つまり、仮想化スタックがインスタンスやゲスト仮想マシン間を分離 できても、分離が完全ではない状況があります。仮想化スタックを理解 して選択すること、本章に書かれているベストプラクティスに従うこと は、クラウドセキュリティの階層的なアプローチに含めることができま す。最後に、パブリッククラウドにおける顧客間、プライベートクラウ ドにおける部門間、ハイブリッドクラウドにおける両者間で、マルチテ ナントを前提に提供するために、仮想化スタックのセキュア化は必須で す。

本章では、ハイパーバイザーの選択について説明します。さらに以降の 章では、仮想スタックを安全に保つために必要な基礎情報を説明しま す。

OpenStack におけるハイパーバイザー

OpenStack がプライベートデータセンターに導入されているか、パブ リッククラウドサービスとして導入されているかによらず、基礎となる 仮想化技術はスケーラビリティ、リソース効率、稼働時間においてエン タープライズレベルの能力を提供します。そのような高レベルな利点は OpenStack がサポートする多くのハイパーバイザー技術で一般的に利用 可能である一方、各ハイパーバイザーのセキュリティアーキテクチャー や機能に顕著な違いがあります。とくに、伸縮可能な OpenStack 環境に 特有であるセキュリティ脅威ベクターを考慮するときです。アプリケー ションが単一の IaaS プラットフォームの中に統合されるので、ハイ パーバイザーレベルでのインスタンス分離が最も重要になってきます。 セキュアな分離性に関する要件は、企業、政府、軍事関連のコミュニ ティに渡り、当てはまります。

OpenStack のフレームワークの中で、クラウド環境を最適化するため に、いくつものハイパーバイザーおよび対応する OpenStack プラグイ ンから選択できます。OpenStack セキュリティガイドの観点では、ハイ パーバイザーはセキュリティに必須となる機能セットに関連するため、 ハイパーバイザーの選択における考慮事項について注目します。しかし ながら、これらの考慮事項は特定のハイパーバイザーの得失について徹 底的に調査したことを意味するわけではありません。NIST は Special

Publication 800-125, "Guide to Security for Full Virtualization Technologies"でさらなるガイドラインを提供しています。

選択基準

ハイパーバイザーの選択において、セキュリティを保証するために考慮 すべき重要な要因がいくつかあります。特に下記の面に注目します。

- チーム習熟度
- 製品やプロジェクトの成熟度
- 認証、証明
- ・ 追加のセキュリティ機能
- ハードウェア対ベアメタル
- ハードウェア関連
- ・ コモンクライテリア (Common Criteria)

加えて、OpenStack デプロイ用のハイパーバイザーの選択時、以下のセ キュリティ関連の条件の評価を推奨します。

- ハイパーバイザーはCommon Criteria認定を取得していますか?取得し ている場合はどのレベルですか?
- ・採用している暗号化技術は第三者によって認定されていますか?

チームのノウハウ

多分、ハイパーバイザー選択における一番重要な観点はある特定のハイ パーバイザープラットフォームの管理と保守におけるあなたのスタッフ のノウハウです。あなたのチームが与えられた製品、その設定、クセに 慣れていればいるほど、設定ミスは少なくなります。加えて、あなたの スタッフが与えられたハイパーバイザーについて組織を横断してノウハ ウを広めていけば、あなたのシステムの可用性は向上し、職務分掌の開 発が可能になり、チームメンバーが対応できない場合での問題を軽減し ます。

製品やプロジェクトの成熟度

ハイパーバイザー製品またはプロジェクトの成熟度もセキュリティ上 重要です。製品の成熟度はクラウドを配備してから大きな影響が現れま す。セキュリティガイドでは、下記の面に注目します。

- ・ノウハウの入手先
- ・ 活発な開発者とユーザーのコミュニティ
- タイムラインとアップデートの入手先
- インシデントレスポンス

ハイパーバイザーの完成度の最大の指標の1つに、それを取り巻くコ ミュニティのサイズと活気があります。これはセキュリティに関するの で、コミュニティの質はあなたが追加のクラウドオペレーターを必要 とする、利用可能なノウハウに影響します。これはまた、ハイパーバイ ザーがいかに広く開発されているかの印でもあり、同様に、リファレン スアーキテクチャやベストプラクティスの戦闘準備につながるのです。

さらに、コミュニティが KVM や Xen のようなオープンソースのハイ パーバイザーを取り巻くので、その質はバグ修正やセキュリティ更新 の適時性に直接的な影響があります。商用ハイパーバイザーとオープ ンソースのものを調査するとき、リリース間隔やサポートサイクルだ けではなく、バグやセキュリティ問題のアナウンスから、パッチや対 応までの時間間隔を調査したいでしょう。最後に、OpenStack Compute のサポート能力は、お使いのハイパーバイザーにより異なります。 ハイパーバイザーによりサポートされる OpenStack Compute の機能 は、OpenStack Hypervisor Support Matrix を参照してください。

証明書

ハイパーバイザーを選択する際にもう1つ考慮すべき点は、様々な公式 の認証や証明書が利用可能かという事です。あなたの特定の組織の要件 ではないかも知れませんが、これらの認証や証明書は、成熟度、商利用 可能、特定のハイパーバイザーが目標としてきたテストの徹底さを物語 ります。

コモンクライテリア (Common Criteria)

共通の条件は国際的に標準化されたソフトウェア評価プロセスです。こ れは、宣伝目的でソフトウェア技術の実行を検証する為に政府や企業が 使用します。政府部門では、NSTISSP No. 11 のみ政府機関にコモンクラ イテリア認証(2002年7月に登場したポリシー)を受けたソフトウェアの 調達権限を与えます。特に、Opentack はコモンクライテリア認証を受け ておらず、多くの入手可能なハイパーバイザーは受けている事に注意す べきでしょう。

Common Criteria のプロセスは、技術的な機能の評価に加えて、技術 がどのように開発されているのかを評価します。

- どのようにしてソースコード管理が行われるのか?
- どのようにしてユーザがビルドシステムへのアクセスを許可されるの か?
- 技術は配布前に暗号署名されるのか?

KVM ハイパーバイザーはアメリカ政府から Common Criteria 認証され た商用ディストリビューションです。インスタンス分離を強制するため の基礎的な技術を提供し、仮想マシンの実行環境を分離できることが検 証されました。仮想マシンの分離に加えて、KVM は次のとおり Common Criteria 認証されています。

> "provide system-inherent separation mechanisms to the resources of virtual machines. This separation ensures that large software component used for virtualizing and simulating devices executing for each virtual machine cannot interfere with each other. Using the SELinux multi-category mechanism, the virtualization and simulation software instances are isolated. The virtual machine management framework configures SELinux multi-category settings transparently to the administrator"(システム固有の分離機構を仮想マシン のリソースに提供する。この分離により、各仮想マシン 用に実行される仮想および擬似デバイスに対して使用さ れる大規模なソフトウェアコンポーネントが、お互いに 干渉しないことを保証する。仮想マシンの管理フレーム ワークは、管理者に対して SELinux のマルチカテゴリ設 定を透過的に設定する。)

Red Hat、Microsoft、VMWare のような多くのハイパーバイザーベンダー は、Common Criteria 認証を取得していますが、基礎となる機能セット は異なります。以下の要件を最低限確実に満たすために、ベンダーの請 求内容を評価することを推奨します。

IDと認証	pluggable authentication modules (PAM) を使用した識別と認証はユーザーパスワードに基づいています。 使用されるパスワードの質は設定オプションにより強制できます。
監査	システムは、個々のシステムコールを含む大多数のイベントおよび信頼されたプロセスにより生成されたイベントを監査する機能を提供します。監査データは通常のファイルにASCII形式で収集されます。システ

	ムは、監査レコードを検索するため のプログラムを提供します。
	システム管理者は、関心のあるイベントに監査を制限するために、ルールベースを定義できます。これには、特定のイベント、特定のユーザー、特定のオブジェクトやこれらすべての組み合わせに監査を制限する機能が含まれます。
	監査レコードはリモート監査デーモ ンに転送できます。
任意アクセス制御	任意アクセス制御 (DAC) は、ユーザー、グループ、その他に対する標準 UNIX パーミッションを含むアクセス制御リスト (ACL) に基づいてファイルシステムオブジェクトへのアクセスを制限します。アクセス制御機構は権限のないアクセスからIPC オブジェクトも保護します。
	システムは POSIX ACL をサポートする ext4 ファイルシステムを含みます。この種類のファイルシステムにあるファイルにユーザー単位でアクセス権を定義できます。
強制アクセス制御	強制アクセス制御 (MAC) は、サブジェクト (主体) とオブジェクト (対象) に割り当てられたラベルに基づいて、オブジェクトへのアクセスを制限します。機密性のラベルがプロセスとオブジェクトに自動的に付けられます。これらのラベルを使用して強制されたアクセス制御ポリシーは、BellLaPadula アクセス制御モデルから派生したものです。
	SELinux カテゴリが仮想マシンとそのリソースに付けられます。仮想マシンのカテゴリがアクセスされるリソースのカテゴリと同じ場合、これらのカテゴリを使用して強制されたアクセス制御ポリシーは、仮想マシンのそのリソースへのアクセスが許可されます。
	TOE は、仮想マシンへのアクセスを 制御するために、非階層的なカテゴ リを実装します。
ロールベースアクセス制御	ロールベースアクセス制御(RBAC)は、全権を持つシステム管理者の必要性を減らすために、役割を分割できるようにします。
オブジェクト再利用	ファイルシステムのオブジェクト、 メモリ、IPC オブジェクトは、他の

	ユーザーに属するプロセスにより再 利用される前に、クリアされます。
セキュリティ管理	セキュリティ的に重要なシステムパラメーターの管理が、管理ユーザーにより実行されます。root 権限(または RBAC 使用時の特定のロール)が必要となる一組のコマンドが、システム管理のために使用されます。セキュリティ関連のパラメーターは特定のファイルに保存されます。おらは、システムのアクセスに対して保護されます。
セキュア通信	システムは SSH を使用する信頼チャネルの定義をサポートします。パスワードによる認証がサポートされます。少しの暗号スイートのみが、評価された設定でそれらのプロトコルのためにサポートされます。
ストレージ暗号化	システムは dm_crypt 経由でスト レージの機密性を提供するために 暗号化ブロックデバイスを提供しま す。
TSF 保護	動作中、カーネルソフトウェアと データがハードウェアメモリ保護 機構により保護されます。カーネル のメモリとプロセスの管理コンポー ネントにより、ユーザープロセスが カーネルストレージや他のプロセス のストレージにアクセスできないこ とが保証されます。
	非カーネル TSF ソフトウェアとデータが DAC とプロセス分離機構により保護されます。評価済みの設定で、予約済みユーザー ID root は TSF設定を定義するディレクトリとファイルを所有します。一般的に、設定ファイルやバッチジョブのキューのような、内部 TSF データを含むファイルとディレクトリも、DAC パーミッションにより読み取りから保護されます。
	システム、ハードウェア、ファーム ウェアのコンポーネントは、権限の ないアクセスから物理的に保護され る必要があります。システムカーネ ルは、プログラムから利用できる CPU 命令ファンクション以外に、 ハードウェア機構自身へのすべての アクセスを調停します。

さらに、スタックオーバーフロー攻 撃に対する保護機構が提供されま す。

暗号標準

いくつかの暗号アルゴリズムは、認証と識別、データ転送、保存データ の保護のために、OpenStack の中で利用可能です。ハイパーバイザーの 選択時、以下が推奨アルゴリズムで、仮想化層のサポートを確実にする ための実装標準です。

アルゴリズム	鍵の長さ	想定用途	セキュリティ 機能	実装標準
AES	128 ビッ ト、192 ビッ ト 256 ビット	暗号化 / 復号	保護された データ転送、 保存データの 保護	RFC 4253
TDES	168 ビット	暗号化 / 復号	保護された データ転送	RFC 4253
RSA	1024 ビッ ト、2048 ビット 3072 ビット	認証、鍵交換	識別と認証、 保護された データ転送	U.S. NIST FIPS PUB 186-3
DSA	L=1024, N=160 ビット	認証、鍵交換	識別と認証、 保護された データ転送	U.S. NIST FIPS PUB 186-3
Serpent	128、196、256 ビット	暗号化 / 復号	保存データの 保護	http:// www.cl.cam.ac.u ~rja14/ Papers/ serpent.pdf
Twofish	128、196、256 ビット	暗号化 / 復号	保存データの 保護	http:// www.schneier.co paper- twofish- paper.html
SHA-1	-	メッセージダ イジェスト	保存データの 保護、保護さ れたデータ転 送	U.S. NIST FIPS 180-3
SHA-2(224、25 384、512 ビット)	6.	メッセージダ イジェスト	保存データの 保護、識別と 認証	

FIPS 140-2

アメリカでは、National Institute of Science and Technology (NIST) が Cryptographic Module Validation Program として知られるプロセ スにより暗号アルゴリズムを認証します。NIST は、以下を保証する Federal Information Processing Standard 140-2 (FIPS 140-2) に適合 するアルゴリズムを認証します。

> FIPS 140-2 への適合性を検証された製品は、機密情報 (アメリカ)や指定情報(カナダ)の保護のために、両国 (アメリカとカナダ) の連邦機関により受け入れられま す。CMVP の目標は、検証済み暗号モジュールを含む物品 調達で使用するために、検証済み暗号モジュール利用を 推進することと、連邦機関へのセキュリティ評価基準を 提供することです。

ハイパーバイザーの基礎技術の評価時、ハイパーバイザーが FIPS 140-2 に認証されているかどうかを考慮します。正式な認証は、指定された暗 号アルゴリズムの実装が、アメリカ政府機関のポリシーごとに強制さ れる FIPS 140-2 への適合性だけではなく、モジュール仕様、暗号モ ジュールのポートとインターフェース、ロール、サービス、認証、有限 オートマトン、物理セキュリティ、運用環境、暗号鍵管理、EMI/EMC、自 己テスト、設計保証、他の攻撃の緩和に対する適合性をレビューされる ことを意味します。

ハードウェア関連

さらに、ハイパーバイザープラットフォームの評価時、ハイパーバイ ザーを実行するハイパーバイザーを考慮すべきです。加えて、ハード ウェアで利用可能な追加機能を評価します。また、それらの機能が OpenStack 環境の一部として選択したハイパーバイザーによりどのよう にサポートされるかを考慮します。そのためにも、ハイパーバイザーは それぞれ自身のハードウェア互換性リスト(HCL)を持つでしょう。互換 性のあるハードウェアの選択時、まずどのハードウェア仮想化技術がセ キュリティの観点から重要であるかを理解することが重要です。

記述	技術	説明
I/O MMU	VT-d / AMD-Vi	PCI パススルーの保護 に必要です
Intel Trusted Execution Technology	Intel TXT / SEM	動的証明サービスに必 要です
PCI-SIG I/O 仮想化	SR-IOV, MR-IOV, ATS	PCI Express デバイス をセキュアに共有する ために必要です

ハードウェア対ベアメタル

イド

ハイパーバイザーの選択に関する議論をまとめるために、LXC (Linux コンテナー)やベアメタルシステムの利用と KVM のようなハイパーバイザーの利用の違いを思い起こすことが重要です。具体的には、このセキュリティガイドの焦点は、大規模にハイパーバイザーと仮想化のプラットフォームを持つことを前提にしています。しかしながら、お使いの環境がベアメタルや LXC 環境を使用する必要があれば、その環境に関する特有の違いに注意を払いたいでしょう。とくに、ノードが再配備する前にデータを適切に無害化されることをエンドユーザーに保証する必要があります。加えて、ノードを再利用する前に、ハードウェアが汚染されていたり、侵入されたりしていないことを保証する必要があります。

OpenStack はベアメタルのプロジェクトを持ちますが、ベアメタル実行の具体的なセキュリティ実装に関する議論は本書の範囲外であることに注意すべきです。

最後に、Book Sprint の時間的制約のため、実装例とアーキテクチャー例にハイパーバイザーとして KVM を使用することにしました。



注記

use of LXC in Nova に関する OpenStack Security Note があります。

追加のセキュリティ機能

ハイパーバイザー選択時に検討すべき他の事項は、特定のセキュリティ機能の利用可否です。とくに、Xen Server の XSM (Xen Security Modules)、sVirt、Intel TXT、AppArmor のような機能を利用しています。これらの機能の存在は、セキュリティプロファイルを向上するだけでなく、良い基盤を提供する役に立つでしょう。

以下の表は一般的なハイパーバイザーにおけるこれらの機能の対応状況 を示します。

	KSM	XSM	sVirt	ТХТ	AppArmor	cGroups	MAC ポ リシー
KVM	Х		Х	Х	х	х	х

Xen	Х	Х		x
ESXi		Х		
Hyper-V				

KSM: Kernel Samepage Merging

XSM: Xen セキュリティモジュール

xVirt: Linux ベースの仮想化向けの強制アクセス制御

TXT: Intel Trusted Execution Technology

AppArmor: MAC を実装している Linux セキュリティモジュール

cgroups: リソース使用量を制御するための Linux カーネル機能

MAC ポリシー: 強制アクセス制御は SELinux または他のオペレーティン グシステムを用いて実装されます

* この表にある機能はすべてのハイパーバイザーに適用できないかもし れません。また、ハイパーバイザー間で直接対応付けできないかもしれ ません。

第41章 仮想化層のセキュリティ強 化

物理ハードウェア(PCI パススルー)	179
仮想ハードウェア (QEMU)	180
sVirt: SFLinux + 仮想化	183

本章の初めに、インスタンスによる物理ハードウェアと仮想ハードウェ アの両方の使用、関連するセキュリティリスク、それらのリスクを軽減 するためのいくつかの推奨事項について議論します。SELinux 強制アク セス制御を仮想化コンポーネントと統合するためのオープンソースプロ ジェクトである sVirt の議論で本章を終わります。

物理ハードウェア (PCI パススルー)

多くのハイパーバイザーは PCI パススルーとして知られる機能を提供し ます。これにより、インスタンスがノードにあるハードウェアの一部に 直接アクセスできます。たとえば、インスタンスがハイパフォーマンス コンピューティング用の compute unified device architecture (CUDA) を提供するビデオカードにアクセスするために使用されます。この機能 は 2 種類のセキュリティリスクをもたらします。ダイレクトメモリアク セスとハードウェア感染です。

ダイレクトメモリアクセス(DMA)は、特定のハードウェアがホストコ ンピューターで仟意の物理メモリアドレスにアクセスできる機能です。 ビデオカードはときどきこの機能を有しています。しかしながら、イ ンスタンスは指定された任意の物理メモリアクセスをすべきではありま せん。なぜなら、これはホストシステムと同じノードで実行している他 のインスタンスを完全に表示できるかもしれないからです。ハードウェ アベンダーはこれらの状況で DMA アクセスを管理するために input/ output memory management unit (IOMMU) を使用します。そのため、ク ラウドアーキテクトは、ハイパーバイザーがこのハードウェア機能を使 用するよう設定されていることを確実にすべきです。

KVM: How to assign devices with VT-d in KVM

Xen: VTd Howto



注記

IOMMU 機能は、Intel により VT-d、AMD により AMD-Vi とし て提供されています。

ハードウェア感染は、インスタンスが悪意のある変更をファームウェア やデバイスの他の部分に行うときに発生します。このデバイスは他のイ ンスタンス、またはホスト OS により使用されるため、悪意のあるコー ドはこれらのシステムの中に拡散する可能性があります。最終的な結果 として、あるインスタンスがセキュリティドメインの範囲外で実行でき ます。これは何らかのハードウェアを共有している状況における潜在的 な問題です。仮想ハードウェアよりも物理ハードウェアの状態をリセッ トすることが難しいため、この問題はこの状況に特有のものです。

ハードウェア感染問題の解決策はドメイン固有です。戦略はインスタン スがどのようにしてハードウェア状態を修正可能かを特定する事、その 後インスタンスがハードウェアを使用している際に修正をリセットする 方法を検知する事です。例えば、使用後のファームウェアの再度フラッ シュが挙げられます。明らかに、いくつかのファームウェアは多数の 書き込み後に故障するので、上記の作業はハードウェア寿命とセキュリ ティを天秤にかける必要があります。TPM 技術(link:Management/Node Bootstrappingで説明)は未承認のファームウェア変更を検知する解決策 を提供します。選択した戦略に関わらず、この種のハードウェア共有に 関するリスクを理解する事は、与えられたデプロイシナリオ用に適切に リスクを軽減する上で重要です。

加えて、PCI パススルーに関連したリスクと複雑性のため、これはデ フォルトで無効化されるべきです。特定の用途のために有効化する場 合、ハードウェアが再発行される前に確実にクリアするために、適切な プロセスを実行する必要があります。

仮想ハードウェア(QEMU)

仮想マシンの実行時、仮想ハードウェアは仮想マシンにハードウェアイ ンターフェースを提供するソフトウェア層です。インスタンスは必要 となるネットワーク、ストレージ、ビデオ、他のデバイスを提供する ためにこの機能を使用します。これで覚えておくことは、お使いのほと んどのインスタンスは排他的に仮想ハードウェアを使用することです。 一部はハードウェアに直接アクセスする必要があります。主要なオー プンソースのハイパーバイザーはこの機能のために QEMU を使用しま す。QEMU は仮想化プラットフォームのニーズを満たしますが、作成と維 持することが非常に挑戦的なソフトウェアプロジェクトであるとわかっ てきました。QEMU の機能のほとんどは、多くの開発者が理解しにくい 低レベルなコードで実装されています。さらに、QEMU により仮想化され るハードウェアには、独自の癖を持つレガシーデバイスが数多くありま す。これを一括りにするので、QEMU はハイパーバイザー突破攻撃を含む 多くのセキュリティ問題の元になってきました。

上記の理由として、QEMU 堅牢化の率先したステップの実行が重要で ある事が挙げられます。我々は3つの特定のステップを推奨していま す。コードベースの最小化、コンパイラーの堅牢化、sVirt・SELinux・ AppArmor 等の強制アクセス制御の使用です。

QFMU コードベースの最小化

古くからある 1 つのセキュリティ原則は、システムから未使用のコン ポーネントを削除することです。QEMU はさまざまな種類の仮想ハード ウェアデバイスをサポートします。しかしながら、少しのデバイスだけ が指定されたインスタンスに必要になります。多くのインスタンスは virtio デバイスを使用します。しかし、いくつかのレガシーなインスタ ンスは、glance メタデータを使用して指定できる、特定のハードウェア にアクセスする必要があります。

glance image-update ¥ --property hw disk bus=ide ¥ --property hw cdrom bus=ide ¥ --property hw vif model=e1000 ¥ f16-x86 64-openstack-sda

クラウドアーキテクトは、どのデバイスがクラウドユーザーに利用可能 であるかを判断すべきです。必要ないすべてのデバイスは QEMU から削 除すべきです。この手順は、QEMU 設定スクリプトに渡されるオプション を変更した後で、QEMU を再コンパイルする必要があります。最新の完全 なオプション一覧は、QEMU ソースディレクトリの中で ./configure -help を単に実行します。お使いの環境に必要なものを判断し、残りのオ プションを無効化します。

コンパイラーのセキュリティ強化機能

次の手順は、コンパイラーのセキュリティ強化オプションを使用して QEMU をセキュリティ強化することです。最近のコンパイラーは、出力バ イナリのセキュリティを改善するために、さまざまなコンパイル時オプ ションを提供します。これらの機能には、より詳細を以下で説明します が、relocation read-only (RELRO)、Stack Canaries、never execute (NX), position independent executable (PIE), address space layout randomization (ASLR) があります。

ほとんどの最近の Linux ディストリビューションは、すでにコンパイ ラーのセキュリティ強化を有効化して QEMU をビルドしています。そ のため、以下の情報を続ける前に、既存のバイナリを確認したいでしょ う。この確認を手助けできるツールの 1 つは checksec.sh と呼ばれま す。

- RELocation Read-Only (RELRO): 実行ファイルのデータ部分をセキュ リティ強化します。全体 RELRO モードと部分 RELRO モードが gcc に よりサポートされます。QEMU 完全 RELRO が最善の選択肢です。これ により、グローバルオフセットテーブルが読み込み専用になり、出 力実行ファイルのプログラムデータセクションの前にさまざまな内部 データ部分が置かれます。
- Stack Canaries: バッファーオーバーフロー攻撃を防ぐ役に立てるた めに、スタックに値を置き、それらの存在を検証します。
- Never eXecute (NX): Data Execution Prevention (DEP) としても知 られています。実行ファイルのデータ部分を必ず実行できなくしま す。
- Position Independent Executable (PIE): 位置に依存しない実行ファ イルを生成します。ASLR のために必要です。
- Address Space Layout Randomization (ASLR): コード領域とデータ領 域の両方を確実にランダムにします。実行ファイルが PIE を用いてビ ルドされるとき、カーネルにより有効化されます(最近の Linux カー ネルはすべて ASLR をサポートします)。

すべてを一緒に利用し、いくつか追加の有用な保護を追加して、QEMU コ ンパイル時に以下の gcc コンパイラーオプションを推奨します。

CFLAGS="-arch x86 64 -fstack-protector-all -Wstack-protector --param sspbuffer-size=4 -pie -fPIE -ftrapv -D FORTIFY SOURCE=2 02 -Wl,-z,relro,-z,now"

コンパイラーが確実に適切なセキュリティ強化を動作させるようコンパ イルした後で、お使いの QEMU 実行ファイルをテストすることを推奨し ます。

ほとんどのクラウド環境は QEMU のようなソフトウェアを手動でビルド したくないでしょう。プロセスが確実に繰り返し可能であり、最終結果 を簡単にクラウドにデプロイできるようにするために、パッケージを使 用するほうが良いでしょう。以下の参考情報は、既存のパッケージにコ ンパイラーのセキュリティ強化オプションを適用することの詳細を提供 します。

- ・ DEB パッケージ: Hardening Walkthrough
- ・ RPM パッケージ: How to create an RPM package

強制アクセス制御

コンパイラーのセキュリティ強化機能により、QEMU プロセスへの攻撃 をより難しくできます。しかし、攻撃者が成功すると、攻撃の影響範囲 を抑えたいでしょう。強制アクセス制御は、QEMU プロセスの権限を必 要な範囲に制限することにより、これを実現します。これは sVirt / SELinux または AppArmor により実現できます。sVirt 利用時、SELinux はすべての QEMU プロセスが別々のセキュリティドメインで動作するよ う設定されます。AppArmor は同様の機能を提供するよう設定できます。 以下のインスタンス分離のセクションで sVirt の詳細を示します。

sVirt: SELinux + 仮想化

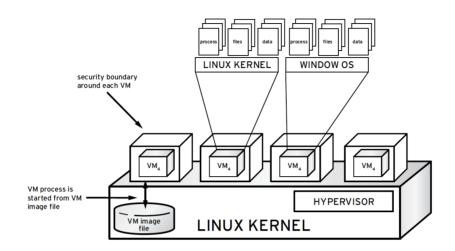
KVM は複数のテナントを分離する基本技術を提供します。カーネルレ ベルの独特のアーキテクチャーを用いて、National Security Agency (NSA) により開発されたセキュリティ機構です。開発の起源は 2002 年 までさかのぼり、Secure Virtualization (sVirt) 技術は最近の仮想化 向けの SELinux の応用技術です。SELinux は、ラベルに基づいた分離制 御を適用するために設計され、仮想マシンのプロセス、デバイス、デー タファイル、それらの上で動作するシステムプロセス間の分離を提供す るために拡張されました。

OpenStack の sVirt 実装は、2 種類の主要な脅威ベクターに対して、ハ イパーバイザーホストと仮想マシンを保護することを目指しています。

- ・ ハイパーバイザーの脅威 仮想マシンの中で動作している侵入されたア プリケーションは、バックエンドのリソースにアクセスするためにハ イパーバイザーを攻撃します。たとえば、ホスト OS、アプリケーショ ン、物理マシンにあるデバイスです。バックエンドの物理マシンが単 一の仮想アプリケーションにある脆弱性のために侵入されうるため、 これは仮想化に特有の脅威ベクターであり、考慮すべきリスクを表し ます。
- ・ 仮想マシン(マルチテナント)の脅威 仮想マシンの中で動作してい る侵入されたアプリケーションは、他の仮想マシンとそのリソースに アクセスし、制御するためにハイパーバイザーを攻撃します。仮想マ シンのイメージファイルの集合が単一のアプリケーションにある脆弱 性のために侵入されうるため、これは仮想化に特有の脅威ベクターで あり、考慮すべきリスクを表します。実ネットワークを保護するため の管理技術が仮想マシン環境にそのまま適用できないため、この仮想 ネットワークへの攻撃はおもな関心事です。

各 KVM ベースの仮想マシンは SELinux によりラベル付けされているプ ロセスです。これは各仮想マシンのセキュリティ境界を効率的に確立し

ます。このセキュリティ境界は、Linux カーネルにより監視され、強制 されます。ホストマシンのデータファイルや他の仮想マシンのような、 仮想マシンの境界外のリソースへのアクセスは制限されます。



上に示したとおり、sVirt による分離は仮想マシン内で動作している ゲストオペレーティングシステムに関わらず提供されます。Linux や Windows の仮想マシンを使用できます。さらに、多くの Linux ディスト リビューションはオペレーティングシステム内の SELinux を提供してい ます。仮想マシンが内部の仮想リソースを脅威から保護できます。

ラベルとカテゴリ

KVM ベースの仮想マシンインスタンスは、svirt image t として知られ る、独自の SELinux データタイプでラベル付けされています。カーネル レベルの保護により、悪意のあるソフトウェアのような権限のないシス テムプロセスが、ディスクにある仮想マシンのイメージファイルを操作 することを防ぎます。仮想マシンが電源オフのとき、イメージは以下の ように svirt image t として保存されます。

```
system u:object r:svirt image t:SystemLow image1
system u:object r:svirt image t:SystemLow image2
system u:object r:svirt image t:SystemLow image3
system u:object r:svirt image t:SystemLow image4
```

svirt image t ラベルは独自にディスク上のイメージファイルを識別 し、SELinux ポリシーがアクセス制限できるようにします。KVM ベース の Compute イメージが電源投入された際、sVirt はイメージに乱数の IDを付与します。sVirt は技術的には1ハイパーバイザーノードあたり

524,288 個の仮想マシンに数字IDを付与する事ができますが、OpenStack デプロイでこの制限に遭遇する事はまずないでしょう。

この例は sVirt カテゴリー識別子を示します。

system_u:object_r:svirt_image_t:s0:c87,c520 image1 system u:object r:svirt image t:s0:419,c172 image2

ブーリアン

SELinux の管理負担を減らすために、多くのエンタープライズ Linux プラットフォームは sVirt のセキュリティ設定を簡単に変更するため に、SELinux ブーリアンを利用します。

Red Hat Enterprise Linux ベースの KVM 環境は以下の sVirt ブーリア ンを利用します。

	T
sVirt SELinux ブーリアン	説明
virt_use_common	仮想化がシリアル通信ポートとパラレル通信ポートを使用することを許可します。
virt_use_fusefs	仮想化が FUSE マウントされたファイルを読み取ることを許可します。
virt_use_nfs	仮想化が NFS マウントされたファイルを管理することを許可します。
virt_use_samba	仮想化が CIFS マウントされたファイルを管理することを許可します。
virt_use_sanlock	制限された仮想マシンが sanlock を 操作することを許可します。
virt_use_sysfs	仮想マシンがデバイス設定(PCI)を 管理することを許可します。
virt_use_usb	仮想化が USB デバイスを使用することを許可します。
virt_use_xserver	仮想マシンが X Window System と通信することを許可します。

第42章 ケーススタディ:インスタ ンス分離

アリスのプライベートクラウド	187
ボブのパブリッククラウド	187

このケーススタディでは、アリスとボブが所有するインスタンスが正し く分離されていることを確認する方法について説明します。まずはハイ パーバイザーの選択とQEMUの強化、強制アクセスコントロールの適用に ついて検討します。

アリスのプライベートクラウド

アリスは豊富な知識を持っている上、細かいポリシー強制のためにXen security module(XSM)を採用したいため、Xenをハイパーバイザーに選択 します。

アリスはソフトウェアパッケージングとメンテナンスにそれなりのリ ソースを割り当てる予定です。これらのリソースを活用し、QEMUから多 数コンポーネントを取り除くなど大幅カスタマイズをします。コンポー ネントを取り除くことで、攻撃可能な部分は削減されます。また、QEMU のコンパイラ強化オプションがすべて有効になっていることも確認しま す。長期メンテナンスコストが増えてしまうことを理解した上でこれら の作業や設定を選択しています。

インスタンス間の分離を強めるため、アリスはXSMポリシー(Xen向け)と SELinuxポリシー(Linux domain0とデバイスドメイン向け)を作成してい ます。また、TPMのハイパーバイザーの起動を計測するためにXenに含ま れるIntel TXTサポートを採用しています。

ボブのパブリッククラウド

パブリッククラウドではクレジットカードを所持していればユーザーに なれるため、本質的に信頼性が低いことからボブはインスタンス分離に 非常に気を遣っています。ボブはクラウドを配備するチームのメンバー の採用を開始したばかりなので、メンバー候補の検索条件として任意の 特定スキルを指定できます。それを踏まえ、ボブは技術的な特徴、所持 する証明等、コミュニティサポートを基準にハイパーバイザーを選択し ます。KVMはEAL 4+共通項目評価とラベル化されたセキュリティ保護プロ フィール(LSPP)によってインスタンス分離を保証しています。これらの

強みとOpenStackコミュニティのKVMへの豊富なサポートを総合して考え た結果、ボブはKVMを採用することにします。

ボブはQEMUを再パッケージするために発生するコストを検討し、そのた めのリソースをプロジェクトに割くことはできないと判断します。幸 い、彼の使用しているLinuxのディストリビューションではコンパイラ 強化オプションが有効になっているため、そのQEMUパッケージを採用し ます。最後に、仮想スタックに関わるSELinuxポリシーを管理するために sVirtを利用します。

第43章 インスタンスのセキュリ ティサービス

インスタンスへのエントロピー	189
ノードへのインスタンスのスケジューリング	190
信頼されたイメージ	192
インスタンスのマイグレーション	195

仮想環境でインスタンスを運用する長所の一つは、ベアメタルで配備し た際には利用できないセキュリティ管理方法の選択肢が増えることで す。仮想スタック上のクラウドテナントの情報管理を改善する技術は多 数存在します。

高いセキュリティ要件を持つOpenStackユーザーや配備者はこれらの技術 の採用を検討すると良いかもしれませんが、状況によっては適用できな い場合があります。クラウド運用においては、規範的なビジネス要件の ために技術の選択肢が削られることがあります。また、run stateなど、 仕組みによってはインスタンス内のデータを調べる機構もあり、システ ムのユーザーからは好まれないものもあります。

本章では、これらの仕組みの詳細とどのような状況においてインスタン スのセキュリティが向上されるかを説明します。また、プライバシー観 点における懸念箇所にも焦点をあてます。データのパススルー、イント ロスペクション、またエントロピー元の提供などが該当します。本セク ションでは、下記のセキュリティサービスに焦点を当てます:

- インスタンスへのエントロピー
- ノードへのインスタンスのスケジューリング
- 信頼されたイメージ
- インスタンスのマイグレーション

インスタンスへのエントロピー

エントロピーとは、インスタンスがアクセスできるランダムデータの質 と提供元のことを捉えています。暗号化技術は一般的にランダム性を採 用しており、高品質なエントロピーのプールが必要です。通常、仮想マ シンは十分なエントロピーを確保することが容易ではありません。エン トロピー不足は一見まったく関係のないところで露見することがありま す。例えば、インスタンスがSSHキーの生成を待っているため、ブート が遅くなることがあります。また、エントロピー不足を解決するために ユーザーがインスタンス内部から低品質なエントロピー元を採用し、結 果的にクラウド内で稼働するアプリケーションのセキュリティを下げる こともあります。

これらの課題は、クラウドアーキテクトが高品質のエントロピーをクラ ウドインスタンスに提供することで対応できます。例えば、クラウド 内にインスタンス用に適量なハードウェア乱数生成器(HRNG)があれば 解決できます(適量はドメインによって異なる)。一般的なハードウェ ア乱数生成器なら通常運用されている50-100台のコンピュートノード 分のエントロピーを生成することが可能です。高帯域ハードウェア乱数 牛成器(Intel Ivy Bridgeや最新プロセッサなどと提供されるRdRand instructionなど)はさらに多くのノードに対応できます。エントロピー の量が十分かどうかを判断するためには、クラウド上で運用するアプリ ケーションの要求を理解している必要があります。

クラウドトでエントロピーが利用可能となったら、次はインスタンスか らエントロピーを供給できるようにします。エントロピー収集デーモン (Entropy Gathering Daemon EGD)では、分散システム上でエントロピー を平等かつ安全な配布を実現しています。Libvirtのエントロピー元とし てEGDを使用するためのサポートも提供されています。

これらの機能に対して、コンピュートは未対応です。これらの機能との 連携のため、開発者による実装の作業はあまり多く発生しないと思われ ます。

ードへのインスタンスのスケジューリ ング

インスタンスを生成する前に、イメージのインスタンス化のためのホス トを選択する必要があります。この選択はnova-schedulerによって行わ れ、さらにコンピュートとボリューム要求の伝達方法も決定します。

Grizzlyのデフォルトのnova schedulerはフィルタースケジュラーです。 他にもスケジューラーは存在します(詳細はOpenStack Configuration ReferenceのSchedulingを参照)。フィルタースケジューラーはフィル ターと連携し、インスタンスの起動場所を決めます。このホスト選択 作業があることによって、管理者は様々なセキュリティ要件を満たすこ とができます。クラウド配備種別によっては、次のような構成が組めま す。例えばデータ分離が大きな懸念事項の場合、テナントのインスタン スは必ず同一のホスト上に配置するように設定できます。または、耐障 害性のためにテナントのインスタンスをできるだけ異なるホスト上に配 置するように設定できます。下の図は、フィルタースケジュラーの働き を表しています。



スケジューラーを提供しているすべてのOpenStackプロジェクトにおい て、スケジュールフィルタを使用することによってお客様やデータを分 離できます。さらに安全ではないと判断されたクラウド上のマシンの破 棄も行えます。クラウドを構築する際には、あらゆるセキュリティ目的 のためにスケジュールフィルターの実装を選択できます。

下記ではセキュリティコンテキストにおいて役に立つ幾つかのフィ ルターを紹介します。OpenStack Configuration ReferenceのFilter Schedulerセクションにすべてのフィルター関連ドキュメントが掲載され ています。要件に合わせてご参照ください。

テナントによるホスト全体予約

現在、ホスト全体予約のブループリントが公開されています。これに よって効率面の負担はありますが、テナントは抱えるインスタンスのみ のためにホストを確保できます。

ホストアグリゲート

ホストアグリゲート自体はフィルターではありませんが、管理者にマシ ンの集合体へキーバリューペアの割り当てを可能にします。これによっ てユーザーではなく、クラウド管理者によるコンピュートホストリソー スの分配ができます。各ノードは複数のアグリゲートを持つことができ

ます。(詳細はOpenStack Configuration ReferenceのHost Aggregatesセ クションを参照ください。)

AggregateMultiTenancyIsolation

テナントを特定のホストアグリゲート(集合体)に分離します。ホスト がfilter tenant idというメタデータキーを持つアグリゲートの場合、 そのテナント(あるいはそのテナント一覧)のみからインスタンスを作成 します。ホストは複数のアグリゲートに所属することができます。メタ データキーを持たないアグリゲートに属する場合、すべてのテナントか らインスタンスを作成できます。

DifferentHostFilter

特定のインスタンスのグループとは異なるホスト上にインスタンスをス ケジュールします。このフィルタを利用するには、要求時にスケジュー ル情報としてキーにdifferent hostを指定し、値にはインスタンスuuid のリストを渡す必要があります。SameHostFilterとは反対の働きを持つ フィルターです。

GroupAntiAffinityFilter

GroupAntiAffinityFilterはグループに含まれるすべてのインスタンスは 異なるホストで稼働していることを保証します。このフィルタを利用す るには、要求時にスケジュール情報としてキーにgroupを指定し、値には インスタンスuuidのリストを渡す必要があります。

信頼済コンピュートプール

Intel TXTを使用したシステムから送られたPCRの認証によってスケ ジューラーの対応を定義するためにOpen Attestation Project (OATS)と 連携するスケジューラーフィルターがあります。

OpenAttestationエージェントはベンダー依存ではないTrouSerSライブラ リを採用していますが、本機能は類似したAMD社のSEMと互換性があるか は不明です。

信頼されたイメージ

ユーザーはインストール済イメージあるいは自身がアップロードしたイ メージを使用します。どちらの場合においても、採用したイメージは改 ざんされていないことを確認したいでしょう。確認のためには、正式版 のチェックサムなどの検証用情報と稼働しているイメージの証明情報が 必要です。このセクションでは、イメージの扱いに関するベストプラク ティスと関連する既知の課題について説明します。

イメージ作成プロセス

OpenStackが提供するドキュメントではイメージの作成とGlanceへのアッ プロード方法について説明しています。ただし、オペレーティングシス テムのインストールや強化のための設定方法やプロセスに関しては利用 者が既に知識を持っていると想定しています。参考として、アップロー ド前にイメージがセキュアかどうかを確認するため情報を下記に説明し ます。また、イメージの採取には様々な方法があり、それぞれにおいて イメージの出所を検証するための独自の手順があります。

最初の選択肢は、信頼された提供元からブートメディアを入手すること です。

mkdir -p /tmp/download directorycd /tmp/download directory

wget http://mirror.anl.gov/pub/ubuntu-iso/CDs/precise/ubuntu-12.04.2-serveramd64.iso

wget http://mirror.anl.gov/pub/ubuntu-iso/CDs/precise/SHA256SUMS wget http://mirror.anl.gov/pub/ubuntu-iso/CDs/precise/SHA256SUMS.gpg gpg --keyserver hkp://keyserver.ubuntu.com --recv-keys 0xFBB75451 gpg --verify SHA256SUMS.gpg SHA256SUMSsha256sum -c SHA256SUMS 2>&1 | grep OK

次の選択肢は、OpenStack Virtual Machine Image Guideの活用です。 こちらの場合、あなたの所属する組織のOS強化ガイドラインやRHEL6 STIGのような信頼性の高い第三者団体が提供するガイドラインに従うこ とを推奨します。

最後の手段として説明するのはイメージの自動生成機構の使用です。次 の例では、Oz image builderを採用しています。OpenStackコミュニティ では、disk-image-builderというさらに新しいツールが公開されていま す。本ツールはセキュリティ観点において未検証です。

OzでNIST 800-53 セクションAC-19(d) の実装を手助けするRHEL 6 CCE-26976-1の例

```
<template>
<name>centos64</name>
<os>
  <name>RHEL-6</name>
  <version>4</version>
  \langle arch \rangle x86 64 \langle /arch \rangle
  <install type='iso'>
```

イド

```
<iso>http://trusted local iso mirror/isos/x86 64/RHEL-6.4-x86 64-bin-DVD1.
iso</iso>
 </install>
 <rootpw>CHANGE THIS TO YOUR ROOT PASSWORD</rootpw>
<description>RHEL 6.4 x86 64</description>
<repositories>
 <repository name='epel-6'>
   <url>http://download.fedoraproject.org/pub/epel/6/$basearch</url>
    <signed>no</signed>
 </repository>
</repositories>
<packages>
  <package name='epel-release'/>
 <package name='cloud-utils'/>
 <package name='cloud-init'/>
</packages>
<commands>
  <command name='update'>
 vum update
 yum clean all
  sed -i '/^HWADDR/d' /etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0
 echo -n > /etc/udev/rules.d/70-persistent-net.rules
 echo -n > /lib/udev/rules.d/75-persistent-net-generator.rules
 chkconfig -- level 0123456 autofs off
 service autofs stop
  </command>
</commands>
</template>
```

本ガイドでは、手動イメージ構築プロセスは複雑で人為ミスが生まれや すいため推奨していません。Ozやdisk-image-builderのような自動シ ステム、ブート後のイメージ強化のためにChefやPuppetのような構成管 理ツールなどを採用することによって一貫したイメージの作成だけでな く、時間が経過しても強化ガイドラインとベースイメージのコンプライ アンス追跡が可能です。

パブリッククラウドサービスを使用する場合、クラウドプロバイダーに デフォルトイメージの作成プロセスのアウトラインを確認することを 推奨します。また、自身が作成したイメージのアップロードが可能な 場合、起動する前にイメージに変更が加えられていないかを確認したい でしょう。これらの手順については、イメージの出所に関する次のセク ションを参照してください。

イメージの出所と妥当性確認

残念ながら、現在はインスタンス起動直前にコンピュートにイメージの ハッシュを検証を強制する方法がありません。状況を理解するために、

イメージ起動の際にイメージがどのように扱われるのかを簡単に説明し ます。

イメージはGlanceサービスからノードのNovaサービスへ供給されます。 この転送はSSLによって保護されている必要があります。イメージがノー ドに転送されたら、一般的なchecksumで検証され、起動するインスタン スのサイズに合わせてディスクが拡張します。以降、このノードで同じ サイズの同一イメージを起動する場合はこの拡張されたイメージから起 動されます。拡張されたイメージは起動前に再検証されないため、改ざ んの可能性があります。これでは作成されたイメージのファイルの手動 確認以外に確認方法がありません。

将来的にコンピュートまたはイメージサービスでインスタンス起動の前 にイメージのハッシュを検証する機構を提供することが期待されてい ます。さらに考えられる強力な代替手段はユーザーにイメージを署名さ せ、インスタンスの起動前に署名の検証を実行させることです。

インスタンスのマイグレーション

OpenStackと下層の仮想レイヤーによってOpenStackノード間のイメージ のライブマイグレーションを実現しています。これにより、インスタン スのダウンタイムなくOpenStackコンピュートノードのシームレスなロー リングアップデートが可能です。ただし、ライブマイグレーションには それなりのリスクが伴うことを注意する必要があります。リスクを理 解するために、ライブマイグレーションの動作を理解することが重要で す。次はライブマイグレーションの際のおおまかな流れを紹介していま す。

- 1. 目的先ホストでインスタンスを起動
- 2. メモリを転送
- 3. ゲスト&syncディスクを停止
- 4. 転送状態となる
- 5. ゲストを起動

ライブマイグレーションのリスク

ライブマイグレーションのステージによっては、インスタンスのランタ イムメモリやディスクの今テンスが平文でネットワーク上転送されま す。そのため、ライブマイグレーション中には対処が必要なリスクがあ ります。次は一部のリスクの詳細を列挙しています。

- Denial of Service (DoS): マイグレーションプロセス中に何かが失 敗した場合、インスタンスを失う可能性があります。
- データの公開:メモリやディスクの転送は安全に行う必要がありま す。
- データの操作:メモリやディスクの転送が安全ではない場合、マイグ レーション中にユーザーデータが攻撃者によって改ざんされる可能性 があります。
- コードの挿入:メモリやディスクの転送が安全ではない場合、マイグ レーション中に攻撃者によってディスクやメモリ上の実行ファイルが 操作される可能性があります。

ライブマイグレーションのリスクの軽減

ライブマイグレーションに関連するリスクを軽減するためには様々な手 法があります。次のリストで詳しく説明します。

- ライブマイグレーションの無効化
- マイグレーションネットワークの分離
- ライブマイグレーションの暗号化

ライブマイグレーションの無効化

現在、OpenStackではデフォルトでライブマイグレーションを有効にして います。ライブマイグレーションはnova policy.jsonファイルへ下記の 行を追加することによって無効化できます。

```
"compute extension:admin actions:migrate": "!",
"compute extension:admin actions:migrateLive": "!",
```

マイグレーションネットワーク

一般的には、ライブマイグレーションで発生するトラフィックは管理セ キュリティドメインに制限するべきです。平文であり、稼働中のイン スタンスのディスクとメモリを転送するということを踏まえると、安 全性を確保するためにはライブマイグレーションのトラフィックを専用 のネットワークに分離することを推奨します。専用ネットワークにトラ フィックを分離することで、露出の危険性を下げることができます。

ライブマイグレーションの暗号化

あなたのユースケースでライブマイグレーションが有効な場 合、libvirtdによるトンネル化、暗号化されたライブマイグレーショ ンが行えます。ただし、この機能は現在のOpenStackダッシュボードや nova-clientコマンドで実装されておらず、libvirtdの手動設定のみで しか利用できません。暗号化されたライブマイグレーションと通常のラ イブマイグレーションの違いは、次のとおりです。最初に、稼働してい るハイパーバイザーからインスタンスのデータをlibvirtdへコピーしま す。次に、両ホストのlibvirtdプロセス間に暗号化されたトンネルが作 成されます。最後に、目的先libvirtdプロセスがインスタンスを下層の ハイパーバイザーへコピーします。

第44章 ケーススタディ:インスタ ンス管理

アリスのプライベートクラウド	199
ボブのパブリッククラウド	199

このケーススタディでは、アリスとボブがインスタンスのエントロ ピー、インスタンスのスケジューリング、信頼できるイメージ、インス タンスのマイグレーションを尊重しつつ、彼らのクラウドを設計する方 法について議論します。

アリスのプライベートクラウド

アリスはインスタンス群に高い品質の多くのエントロピーに対するニー ズがあります。このため、彼女は各 compute ノード上で RdRand 命令を サポートする Intel Ivy Bridge チップセットを持つハードウェアの購 入を決めました。エントロピー収集デーモン(EGD)と LibVirt の EGD サポートを使用して、Alice はこのエントロピープールが各 compute ノード上のインスタンスに配信されるようにします。

インスタンススケジューリングでは、全てのクラウド負荷が適切な起動 時間保証を示すノードにデプロイされるようにする為、アリスは信頼で きる compute プールを使用します。クラウド中で使用されるイメージが クラウド管理者に既知で信頼できる方法で作成されたものである事を保 証するため、アリスはユーザにイメージをアップロードする権限を与え ない事を決めました。

最後に、アリスはインスタンスのマイグレーションを無効化しました。 この機能はこのクラウドで実行される予定の高パフォーマンスアプリ ケーション負荷にはほとんど不要だからです。これにより、インスタン スマイグレーションにまつわる様々なセキュリティ関連を避ける事がで きます。

ボブのパブリッククラウド

ボブは、金融業界の企業ユーザの幾つかにとってエントロピーが重要と なる事を理解しています。しかしながら、費用と複雑さが増える為、ボ ブは彼のクラウドの初回導入分にハードウェアエントロピーの導入を見 送る事を決めました。彼は自分の2世代目のクラウドアーキテクチャに 向けた後の改善では、早期のフォローとしてハードウェアエントロピー を追加します。

ボブは、顧客が高品質なサービスを受けられるようにする事に興味があ ります。彼は、インスタンススケジューリングを超えた過剰なほど明確 なユーザコントロールの提供が、サービス品質(QoS)にマイナス影響 を与える事を心配しています。ですので、この機能を無効化しました。 ボブは使用するユーザに対して既知の信頼できるソースからのクラウド 中のイメージを提供します。加えて、彼はまた、ユーザに自分のイメー ジアップロードを許可します。しかしながら、ユーザは一般に自分のイ メージを共有できません。これは、クラウド中の他のユーザのセキュリ ティにマイナスインパクトを与えかねない、悪意あるイメージを共有す る事からユーザを守る助けになります。

マイグレーションでは、ボブは最小のユーザダウンタイムでのローリン グアップデートをサポートする為に、安全なインスタンスマイグレー ションを有効にしたいと思っています。ボブは、全てのマイグレーショ ンが独立した VLAN 上で実行されるようにします。彼は、Nova クライア ントツールが暗号化マイグレーションをより良くサポートするまで暗号 化マイグレーションの実装を遅らせる計画を立てています。

第45章 フォレンジングとインシデ ント対応

監視ユースケース	201
参考資料	203

多数の活動がクラウド環境内で行われます。これはハードウェア、オペ レーティングシステム、仮想マシンマネージャ、OpenStackサービス群、 インスタンス作成やストレージアタッチのようなクラウド⇔ユーザ活 動、全体の土台であるネットワーク、最後に様々なインスタンス上で実 行されるアプリケーションを使用するエンドユーザのミックスです。

ログの牛成と収集は OpenStack インフラのセキュリティ監視の重要なコ ンポーネントです。ログは日々の管理者・テナント・ゲストの行動に加 え、あなたの OpenStack デプロイを構成する Compute、Networking、ス トレージ、他のコンポーネントの活動の可視性を提供します。

ロギングの基本: ログを集中収集する方法と同様、設定、ログレベル設 定、ログファイルの位置、ログの使用とカスタマイズ方法は、OpenStack Operations Guide で充分にカバーされています。

ログは率先したセキュリティや継続的なコンプライアンス活動に有用で あるのみならず、インシデントの調査と対応の為の情報源としても有用 です。

例えば、Identity サービスまたはその代替認証システムへのアクセスロ グ解析は、アカウント等を選択してイベントを制限する/しないで、失 敗したログイン、それらの頻度、アクセス元IPアドレスを警告します。 ログ解析は検知をサポートします。

検知時、追加のアクションになるのは、IP のブラックリストだったり、 ユーザのパスワードを補強する事を推奨したり、ユーザアカウントが休 眠状態である場合はその無効化でさえあったりします。

監視ユースケース

イベントの監視はより率先的で、リアルタイムの検知と対応を提供しま す。監視の助けとなるいくつかのツールがあります。

OpenStack クラウドインスタンスの場合、ハードウェア、OpenStack サービス、クラウドリソース使用量を監視する必要があります。最後 は、柔軟性、ユーザの変化するニーズへのスケール性への要求から生じ るものです。

ここで、ログ収集、解析、監視を実装する際に考慮すべき重要なユース ケースがいくつかあります。これらのユースケースは、様々な商用や オープンソースのツール、自作のスクリプト等を通じて実装・監視でき ます。これらのツールとスクリプトは、電子メールや組み込まれたダッ シュボードで管理者に送信されるイベントを生成できます。あなたの場 合のネットワークに適用できる追加のユースケースや、変則的な挙動を 考慮できるようにするものを考慮する事は重要です。

- ・ ログ牛成無しの検知は価値の高いイベントです。このようなイベント はサービス障害、または一時的にログをオフにしたり、監視者から隠 れるためにログレベルを変更した侵入者を示している可能性がありま す。
- ・ スケジュール外の start/stop のようなアプリケーションイベント は、潜在的なセキュリティ的なウラについての監視と確認作業を行う イベントでもあるでしょう。
- ユーザログイン、再起動のような OpenStack サービスマシン上の OS イベントもまた、使用/誤用への価値ある洞察を与えます。
- OpenStack サーバ群の負荷を検知可能にする事はまた、高可用化対応 の為に負荷分散用追加サーバを導入する為の対応を可能にする事でも あります。
- ・ 行動可能な他のイベントはネットワークブリッジがダウンした事で す。compute ノード上で設定がクリアされた iptables や、インスタ ンスへのアクセスの重大なロスはユーザを不幸にします。
- identity サービス中のユーザ/テナント/ドメイン削除に伴う見捨 てられたインスタンスかあのセキュリティリスクを低減する為、シ ステム中で通知を生成する事と、インスタンス削除、アタッチしたボ リュームの切断、CPU やストレージリソースの回収等のイベントに適 切に対応する OpenStack コンポーネントを用意する事について議論が あります。

クラウドには多数の仮想インスタンスがあり、これらのインスタンスの 監視はハードウェア監視と CRUD イベントのみ含むログファイルの背後 にあります。

侵入検知ソフトウェア、アンチウイルスソフトウェア、スパイウェア検 知・削除ユーティリティのようなセキュリティ監視制御は、攻撃や侵入 が発生した時と方法を示すログを生成できます。クラウドマシン上にこ

れらのツールをデプロイする事は、価値と保護を提供します。(クラウ ド上でインスタンスを実行する)クラウドユーザも自身のインスタンス 上でこのようなツールを実行したいかも知れません。

参考資料

http://www.mirantis.com/blog/openstack-monitoring/

http://blog.sflow.com/2012/01/host-sflow-distributed-agent.html

http://blog.sflow.com/2009/09/lan-and-wan.html

http://blog.sflow.com/2013/01/rapidly-detecting-large-flowssflow-vs.html

第46章 ケーススタディ: 監視と口 グ採取

アリスのプライベートクラウド	205
ボブのパブリッククラウド	205

このケーススタディでは、アリスとボブがパブリッククラウドとプライ ベートクラウドの中で監視とロギングを実行する方法を議論します。ど ちらのインスタンスでも、時間同期とログの集中保存が適切なアセスメ ントの実施と変則的な事のトラブル対応に極めて重要となります。単な るログの収集はそれほど有用ではなく、利用できるイベントを生成する 為のロバストな監視システムを構築する必要があります。

アリスのプライベートクラウド

プライベートクラウドでは、アリスはテナントの要件についてより深く 理解しており、そのため監視やログ採取上で適切な全景や法令遵守を追 加できます。アリスは重要なサービスとデータを認識し、少なくともこ れらのサービス上でログが採取されるようにし、中央ログサーバにログ が集約されるようにする必要があります。また、障害可能性の数を制限 する為、相互関係・警告を実装する必要があります。相互関係と警告を 実装するために、アリスはログデータを彼女の組織の既存の SIEM ツー ルに送信します。セキュリティ監視は継続プロセスであり、ネットワー クトラフィック活動と使用量についてより深く理解する為に、アリスは ユースケースと警告の定義を継続する必要があります。

ボブのパブリッククラウド

ログが作成された際、(パブリッククラウドプロバイダとして)法律順 守と状況判断の両方で、ボブはログ採取に興味があります。これはつ まり、ボブの顧客のコンプライアンス監査の為、彼らの代わりにタイム リーかつ関連のあるログ又はレポートを提供する為の彼の能力と同様、 コンプライアンスはプロバイダとしてのボブが従うべきものであるとい う事です。それを念頭に置いて、ボブは彼のインスタンス、ノード、イ ンフラデバイス全てで外部の良好と知られている時間デバイスを用いて 時間同期を実行するよう設定しています。加えて、ボブのチームは彼の 顧客用に、ボブの SIEM ツールからセルフサービスでログ取得を実行す る為の Django ベースの Web アプリケーションを構築しています。ボブ は、顧客とクラウド管理者の双方に運用判断を提供する為、ロバストな 警告セットがあり、彼の CMDB インテグレーションを持つSIEM ツールも 使用します。

第47章 コンプライアンス概要

セキュリティ原則 207

OpenStackの環境構築において、監督当局からの要求、法的な要件、顧客 ニーズ、プライバシーへの配慮、セキュリティのベストプラクティスな ど、様々な理由でコンプライアンス活動が必要となるでしょう。コンプ ライアンス活動を適切に実施することで、このガイドで議論した他のセ キュリティトピックスは統合、強化されます。この章の目的は以下の通 りです。

- 共通のセキュリティ原則を確認する
- 業界認定や監督当局の認証を得るために必要な、共通コントロールフ レームワークと認定リソースを説明する
- 監査人がOpenStack環境を評価する際のリファレンスとなる
- OpenStackおよびクラウド環境におけるプライバシーの考慮事項を説明 する

セキュリティ原則

業界標準のセキュリティ原則は、コンプライアンス認証、認定のための 基準を提供します。もしそれらの原則が対象のOpenStack環境で考慮、適 用されていれば、認証を得る活動はシンプルになるでしょう。

- 1. 多層防御: クラウドアーキテクチャ内にあるリスクの存在場所を特定 し、そのリスクを緩和すべく、コントロールします。特に懸念される 部分では、多層防御はさらなるリスク緩和のため、相互補完的なコン トロールを提供します。たとえば、クラウド内のテナント間の十分な 独立性を確保するには、QEMUの強化、SELinuxサポートのハイパーバイ ザーを使う、強制アクセス制御の適用、攻撃対象面の縮小、などの対 応を推奨します。この基本的な原則により、懸念される部分が強化さ れます。なぜなら仮に、ある階層が危険にさらされても、他の階層が 防御し攻撃面を最小化するからです。
- 2. フェイルセーフ: 障害が発生した際に、システムは独立、安全な状態 で停止するように構成されているべきです。たとえば、SSL証明書の検 証では、もしそのCNAMEがサーバーのDNS名と一致しなければ、ネット ワーク接続を切断し、停止すべきでしょう。CNAMEが一致しないのに接 続の継続してしまうようなソフトウェアも存在します。それが安全性 が低く、好ましくない状況であるにも関わらずです。

- 3. 最小権限: ユーザーとシステムサービスには最小限のアクセス権限の みを付与すべきです。アクセス権限は役割、責任と職務にもとづき ます。この最小権限原則は、いくつかの国際セキュリティポリシーに 明記されています。たとえば米国のNIST 800-53 AC-6項が挙げられま す。
- 4. コンパートメント化: システムは、仮にあるマシンやシステムレベル のサービスが危険にさらされたとしても、影響がない他のシステムと は分離されているべきです。SELinuxの正しい使用は、この目標を達成 するのに役立ちます。
- 5. プライバシー保護の奨励: システムとそのユーザーに関わる、収集可 能な情報量は最小限とすべきです。
- 6. ロギング機能: 適切なロギングは、不正利用の監視や障害対応、証拠 収集に役立ちます。多くの国において、それを再度証明する必要が無 い、Common Criteria認定をうけた監査サブシステムの採用を強くおす すめします。

第48章 監査プロセスの理解

監査の範囲を決める	209
内部監査	210
外部監査に備える	210
外部監査	211
コンプライアンスの維持	211

情報システムのセキュリティコンプライアンスは、二つの基本的なプロ セスの完了を前提としています。

- 1. セキュリティコントロールの実装と運用 情報システムを標準と規制 の範囲内で運用しつづけること、それは、正式なアセスメント前でも 行うべき内部活動です。なお監査人はこの時点で、ギャップ分析、助 言、認証取得の可能性向上のために関与することがあります。
- 2. 独立した検査と検証 システムのセキュリティコントロールが標準と規 制の範囲に従って実装され、効率的に運用されているか。これを中立 的な第三者へ、認証を得る以前に証明しなければなりません。多くの 認証はその継続を保証するため、包括的な継続監視の一部として、定 期的な監査を必要とします。

監査の範囲を決める

何をコントロールするのか、OpenStack環境をいかにデザイン、変更し ていくかを明確にするため、監査範囲は初期の計画段階で決定すべきで す。

OpenStack環境の範囲をコンプライアンス目的で明確化する際は、制御機 能や仮想化技術など、慎重に扱うべきサービスの周辺を優先するよう、 考慮すべきです。それらを妥協することは、OpenStack環境全体に影響を 与えかねません。

範囲を限定することで、限定された環境に対し、OpenStackの設計者は高 いセキュリティ品質を確立しやすくなります。しかしその取り組みの中 で、セキュリティ強化の範囲や機能を不当に省かないことが重要です。 典型的な例はPCI-DSSガイドラインです。決済に関わるインフラはセキュ リティを精査されるでしょう。が、その影でその周辺サービスが放置さ れれば、そこが攻撃に対し無防備となります。

コンプライアンスに取り組む際、複数の認証で共通の領域と基準を明確 にできれば、効率的に手間を減らすことができます。この本で取り上

げている監査原則とガイドラインの多くは、それらを特定するのに役立 ちます。加えて、総合的なリストを提供するガイドラインが多くありま す。以下に例を挙げます。

Cloud Security Alliance Cloud Controls Matrix (CCM)はクラ ウドプロバイダーのセキュリティを総合的に評価するにあたっ て、プロバイダーとユーザーの両方に役立ちます。CSA CCMはISO 27001/2、ISACA、COBIT、PIC、NIST、Jericho Forum、NERC CIPといっ た、多くの業界で認められた標準、規制をひも付けた統制フレームワー クを提供します。

SCAP Security Guideはもうひとつの有用なリファレンスです。まだ出 来たばかりですが、米国連邦政府の認証、推奨への対応に重点を絞っ たツールとして普及すると予想されます。たとえば、SCAP Security Guideは現在、security technical implementation guides (STIGs)と NIST-800-53にある程度対応しています。

これらのコントロールマッピングは、認証間で共通の統制基準を特定し ます。また、監査人と被監査者両方にとって問題となる、特定のコンプ ライアンス認証、認定に必要なコントロールセットを可視化するのに役 立ちます。

内部監査

クラウドが導入されたのであれば、内部監査が必要です。あなたが採用 を決めた統制基準と、あなたのクラウドの設計、機能、配備戦略を比 較する時です。目的はそれぞれの統制がどのように扱われているか、 ギャップがどこに存在するか、理解することです。そして、その全てを 将来のために文書化します。

OpenStackクラウドを監査するとき、OpenStackアーキテクチャー固有の マルチテナント環境を理解することが重要です。データの廃棄、ハイ パーバイザーのセキュリティ、ノードの強化、および認証メカニズムな ど、いくつか重要な部分があります。

外部監査に備える

内部監査の結果が良好であれば、いよいよ外部監査の準備です。この段 階では、いくつかの鍵となる活動があります。概要は以下です。

• 内部監査での良好な状態を維持してください。それらは外部監査の実 施期間に証明として役立ちます。またそれは、コンプライアンス統制 に関する詳細な質疑応答の備えとなります。

- ・ クラウドがコンプライアンスを維持し続けるために、自動テストツー ルを導入してください。
- ・ 監査人を選ぶ

監査人の選定は困難を伴うことがあります。クラウドのコンプライアン ス監査経験がある人を見つけてくるのが理想です。OpenStackの経験が あれば、なお良しです。このプロセスを経験している人に相談するのが ベストでしょう。なお、費用は契約の範囲と監査法人に大きく依存しま す。

外部監查

これが正式な監査プロセスです。監査人は、特定の認定向けのセキュ リティ統制を確認し、これらの統制が監査期間において実行されていた か、その証明を求めます(たとえば、SOC 2監査は一般的に6-12ヶ月のセ キュリティ統制を評価します)。どのような統制上の不具合も記録され、 外部監査の最終報告書で文書化されます。OpenStack環境のタイプに依存 しますが、これらの報告書を顧客はあとから見ることができます。それ ゆえ統制上の不具合を避けることは重要です。これが監査への準備が重 要である理由です。

コンプライアンスの維持

このプロセスは一度の外部監査で終わることがありません。多くの認証 は継続的なコンプライアンス活動、すなわち、定期的な監査を要求し ます。常に遵守を確実とするため、自動化されたコンプライアンス検 証ツールをクラウド内に作ることをおすすめします。これは他のセキュ リティ監視ツールに加えて実装されるべきです。このゴールがセキュリ ティおよびコンプライアンスであることを忘れないでください。これら のどちらかに不具合があれば、将来の監査で非常に面倒なことになりま す。

第49章 コンプライアンス活動

Information Security Management System (ISMS)	213
リスク評価	213
アクセスとログの検査	213
バックアップと災害対策	214
セキュリティトレーニング	214
セキュリティの検査	214
脆弱性の管理	214
データの分類	215
例外プロヤス	215

コンプライアンスのプロセスを大きく推進する、標準的な活動は数多く あります。この章ではいくつかの代表的なコンプライアンス活動を紹介 します。これらはOpenStack固有ではありませんが、関係がわかるよう、 このガイドの関連する節への参照も記載します。

Information Security Management System (ISMS)

Information Security Management System (ISMS)は包括的なポリシー とポロセスの集合です。組織が情報資産に関するリスクを管理するた め、作成、維持します。もっとも一般的なクラウド向けISMSはISO/IEC 27001/2です。より厳格なコンプライアンス認証取得に向けて、セキュリ ティ統制と実践の確かな基盤を構築します。

リスク評価

リスク評価フレームワークは、組織やサービス内のリスクを特定しま す。また、それらのリスクと実装、緩和戦略それぞれの責任者を明確に します。リスクは全てのサービスで特定されるべきで、その範囲は技術 統制から環境災害、人的要因など多岐にわたります。人的要因の例は、 悪意ある内部監視者(や不良計員)などです。リスクは発生確率や影響度 など、多様な指標を使って評価されます。OpenStack環境のリスク評価 は、,このガイドで触れられている統制のギャップを含みます。

アクセスとログの検査

定期的なアクセスとログの検査は、認証、認可とサービス配備における 責任を明確にするため、必要です。これらのトピックに関するOpenStack 向けのガイダンスは、ロギングの節で詳細に説明します。

バックアップと災害対策

災害対策(Disaster Recovery, DR)とビジネス継続計画(Business Continuity Planning, BCP)はISMSとコンプライアンス活動で共通の要件 です。それらの計画は定期的な検査と文書化が必要とします。OpenStack の主要領域はマネジメントセキュリティ領域にあたり、すべての単一障 害点(Single Point of Failures, SPOFs)が特定されなければいけませ ん。詳細は、安全なバックアップとリカバリーの節を参照してくださ い。

セキュリティトレーニング

年次でのロール別セキュリティトレーニングは、ほぼすべてのコンプラ イアンス認証、認定で必須の要件です。セキュリティトレーニングの効 果を最適化するため、一般的にはロール別に実施します。たとえば開発 者、運用担当者、非技術者別、などです。加えて、このガイドにもとづ くクラウド、OpenStackセキュリティに関するトレーニングの実施が理想 的でしょう。

セキュリティの検査

OpenStackは人気のあるオープンソースプロジェクトです。多くのソース コードとアーキテクチャーはデベロッパー、組織、企業によって精査さ れています。これはセキュリティの観点から大きな利点ですが、セキュ リティ検査はサービスプロバイダーにとって、それでもなお重大な懸念 事項です。環境は変化しつづけますが、セキュリティは必ずしも開発者 の一番の関心事ではないからです。包括的なセキュリティ検査プロセス として、アーキテクチャー検査、脅威のモデリング、ソースコード分析 と侵入テストなどが挙げられます。そして、セキュリティ検査には広く 公開されている多くのテクニックと推奨があります。よくテストされた 例として、Microsoft Trustworthy Computing Initiativeのとりくみと して作成された、Microsoft SDLがあります。

脆弱性の管理

セキュリティアップデートはプライベート、パブリックを問わず、あら ゆるIaaS環境において重要です。脆弱なシステムは攻撃面を広げ、攻撃 者にターゲットをさらしてしまいます。一般的なスキャニング技術と脆 弱性検知サービスはこの脅威を和らげるのに役立ちます。スキャンが認 証されたものであり、その緩和戦略が単なる境界線の防御力向上にとど まらないことが重要です。OpenStackのようなマルチテナントアーキテク

チャーは特にハイパーバイザーの脆弱性に影響されやすく、それはシス テムの脆弱性管理の重点項目です。詳細はインスタンス隔離の節を参照 してください。

データの分類

データの分類作業は、多くの場合、顧客情報を事故、故意の窃盗、損 失、不適切な公開から保護するため、情報の分類と扱いの方法を定義し ます。一般的にこの作業は、情報を機密性の有無、個人識別の可不可 (Personally Identifiable Information, PII)による分類を含みます。 使用される基準はその環境、背景によって様々です(政府、ヘルスケアな ど)。そして根本的な原則は、そのデータ分類が明確に定義され、通常利 用されていることです。もっとも一般的な保護メカニズムには、業界標 準の暗号化技術が挙げられます。詳細はデータセキュリティの節を参照 してください。

例外プロセス

例外プロセスはISMSの重要な要素です。とある行動が組織の定義したセ キュリティポリシーに準拠していない場合、それは記録されなければい けません。適正な理由と緩和策の詳細が含まれ、関係当局に認められる 必要があります。OpenStackのデフォルト構成は、様々なコンプライアン ス基準、記録されるべきコンプライアンス基準を満たすべく、変化して いくでしょう。またそれは、コミュニティへの貢献によって修正されて いく可能性があります。

第50章 認証とコンプライアンスの 報告書

商業規格	217
SOC 3	218
ISO 27001/2	219
HIPAA / HITECH	219
政府標準	220

コンプライアンスとセキュリティは排他的でなく、あわせて取り組む べきものです。OpenStack環境は、セキュリティの強化なしに、コン プライアンス要件を充足することができないでしょう。以下のリスト は、OpenStackアーキテクト向けの、商業規格および政府機関の認証を得 るための基本的な知識とガイダンスです。

商業規格

OpenStackの商用環境向けには、まずは開始点として、SOC 1/2とISO 27001/2の検討を推奨します。そこで要求されるセキュリティ活動を確実 に実行することで、セキュリティのベストプラクティスと共通統制基準 を導入を促進し、政府系認定などの、より厳格なコンプライアンス活動 の取得にも役立ちます。

これらの基本的認証を取得したのち、より環境特有の認証を検討しま す。たとえば、クラウドがクレジットカードのトランザクションを扱う のであればPCI-DSSが必要ですし、ヘルスケア情報を保持するならHIPPA が、連邦政府向けにはFedRAMP/FISMA、ITAR認証が必要となるでしょう。

SOC 1 (SSAE 16) / ISAE 3402

Service Organization Controls (SOC)基準は米国公認会計士協会 -American Institute of Certified Public Accountants (AICPA)によっ て定められています。SOC統制はサービスプロバイダーの関連財務諸表と 主張を評価します。たとえばSarbanes-Oxley法への準拠などです。SOC 1 はStatement on Auditing Standards No. 70 (SAS 70) Type II 報告書 を代替します。これらの統制は物理的なデータセンターを評価範囲に含 みます。

SOC 1報告書には二つの種類があります。

- Type 1 サービス提供組織がその管理について説明し、その公正さを レポートします。特定時点で関連する管理対象を統制できているか、 その設計の持続可能性も報告します。
- Type 2 サービス組織が統制対象を統制するために使用するシステ ム、設計の持続性、および運用効率性に関する管理者の説明内容が公 正かをレポートします。特定期間を通しての説明も必要です。

詳細はAICPA Report on Controls at a Service Organization Relevant to User Entities' Internal Control over Financial Reportingを参 照してください。

SOC 2

Service Organization Controls (SOC) 2は、サービス提供組織がユー ザーデータとその情報の機密性とプライバシーを制御するために使って いるシステムのセキュリティ、可用性、および処理の完全性に関する統 制の自己証明です。ユーザーの例は、サービス組織を統制する人、サー ビス組織の顧客、監視当局、ビジネスパートナー、サプライヤー、およ びサービス組織の理解者やそれを統制する人です。

SOC 2報告書には二つの種類があります。

- Type 1 サービス提供組織がその管理について説明し、その公正さを レポートします。特定時点で関連する管理対象を統制できているか、 その設計の持続可能性も報告します。
- Type 2 サービス組織が統制対象を統制するために使用するシステ ム、設計の持続性、および運用効率性に関する管理者の説明内容が公 正かをレポートします。特定期間を通しての説明も必要です。

詳細はAICPA Report on Controls at a Service Organization Relevant to Security, Availability, Processing Integrity, Confidentiality or Privacyを参照してください。

SOC 3

Service Organization Controls (SOC) 3はサービス提供組織のため の公的なサービス報告書です。これらのレポートはサービス組織のセ キュリティ、可用性、処理の完全性、機密性、またはプライバシーに 関する統制の保証を求めるユーザーニーズを満たすためのレポートで す。ただし、SOC 2報告書ほどの情報は必要ありません。SOC 3報告書は AICPA/Canadian Institute of Chartered Accountants (CICA) @Trust Services Principles, Criteria, and Illustrations for Security,

Availability, Processing Integrity, Confidentiality, and Privacy をもって作成されています。SOC 3は一般的に使われる報告書であ り、Webサイト上で証明書として自由に配布できます。

詳細はAICPA Trust Services Report for Service Organizationsを参照 してください。

ISO 27001/2

ISO/IEC 27001/2はBS7799-2の後継標準で、Information Security Management System (ISMS)の要件です。ISMSは組織が情報資産のリス クを管理するために作成、維持する、ポリシーとプロセスの包括的な セットです。それらのリスクはユーザー情報のConfidentiality - 機密 性、Integrity - 完全性、および Availability - 可用性 (CIA)に深く 関係しています。CIAセキュリティの三要素は、このガイドの多くの章で 基本となっています。

詳細はISO 27001を参照してください。

HIPAA / HITECH

Health Insurance Portability and Accountability Act (HIPAA)は米国 の健康保険における可搬性と責任に関する法律で、カルテ情報の収集、 保存、および廃棄に関するルールを定めています。この法律は、保護医 療情報 (Protected Health Information, PHI)は、権限のない人が"利用 できない、読めない、複合できない"ように変換されなければいけないこ と、また、データが保存中でも、処理中でも、暗号化するべきであるこ とに言及しています。

HIPPAは認証ではなく、カルテ情報の保護に関するガイドラインで す。PCI-DSSと似ています。PCIとHIPAAの両方でもっとも重要な課題は、 クレジットカード情報とカルテ情報が流出しないようにすることです。 クラウドプロバイダーによる流出があった場合、PCIとHIPAAの統制下に おいて検査されます。その内容が遵守に足るものであれば、そのプロバ イダーはすみやかに是正措置の実行と情報流出の通知、およびコンプラ イアンス活動予算の大幅な追加を期待されます。もし足るものでなけれ ば、現地での査察、罰金、merchant ID (PCI)の失効、および評判に大き な傷がつくことが予想されます。

カルテ情報を所有するユーザーや組織はHIPPAの要件をサポート し、HIPAA対象事業者となる必要があります。もしこの事業者がサービス を、この場合は対象のOpenStackクラウドがカルテ情報を利用、保存、ア クセスしうるのであれば、HIPAA Business Associate Agreement - BAA の締結が必要です。BAAはHIPAA対象事業者と、HIPAA要件に従ってカルテ

情報を扱っているOpenStackサービスプロバイダーの間で締結されます。 もしサービスプロバイダーがセキュリティ統制、強化を怠るなど、カル テ情報を要件通りに扱っていなければHIPAAの罰金や罰則が適用されるこ とがあります。

OpenStackアーキテクトはHIPAAの条項を解釈し、対応します。データ暗 号化はその中核となる活動です。現在、OpenStack環境に保存される、い かなる保護カルテ情報にも暗号化を要求され、業界標準の暗号化アルゴ リズムの採用が期待されます。なお、将来予定されている、たとえばオ ブジェクト暗号化などのOpenStackプロジェクトは、法令遵守のためHPAA ガイドラインの適用を促進するでしょう。

詳細はHealth Insurance Portability And Accountability Actを参照し てください。

PCI-DSS

Payment Card Industry Data Security Standard (PCI DSS) (#Payment Card Industry Standards Councilで定義されました。目的は、クレ ジットカード不正の防止のため、カード所有者情報に関する統制度を 向上することです。コンプライアンス検査は年次で、外部のコンプライ アンス評価報告書(Report on Compliance, ROC)を作成する認定評価機 関 (Qualified Security Assessor, QSA)、もしくは、自己評価問診票 (Self-Assessment Questionnaire, SAQ)によって実施されます。これは カード所有者のトランザクション量に依存します。

カード情報を保存、処理、転送するOpenStack環境は、PCI-DSSの対象で す。カード情報を扱うシステムやネットワークが正しく分離されていな いすべてのOpenStackコンポーネントは、PCI-DSSのガイドラインに適合 しません。PCI-DSSでいう分離は、マルチ手ナンシーを認めておらず、 (サーバーおよびネットワークの)物理的な分離が必要です。

詳細はPCI security standardsを参照してください。

政府標準

FedRAMP

"Federal Risk and Authorization Management Program (FedRAMP)は米 国連邦政府全体のプログラムであり、クラウド製品とサービスのセキュ リティ評価、認証、および継続的モニタリングの、標準化された手順を 提供します"NIST 800-53はFISMAとRedRAMPの両方の基礎であり、特にク ラウド環境における保護を提供するために選択されたセキュリティ統制

を強制します。セキュリティ統制に関する具体性と政府標準を満たすた めの文書量を、FedRAMPは徹底しています。

詳細はhttp://www.gsa.gov/portal/category/102371を参照してくださ L1°

ITAR

International Traffic in Arms Regulations (ITAR)は米国政府規制の 集合であり、米国軍需品リスト(United States Munitions List, USML) と関連技術情報に関係する防衛物品・サービスの輸出入を統制しま す。ITARは正式な認証というより、"軍事活動支援"の位置づけでクラウ ドプロバイダーから提示されます。この統制は一般的に、NIST 800-53 フレームワークにもとづき、分離されたクラウド環境の実装を意味しま す。FISMA要件により、米国民かつ身元審査された人のみがアクセスでき るよう、追加の統制で補完します。

詳細はhttp://pmddtc.state.gov/regulations laws/ itar official.htmlを参照してください。

FISMA

米国連邦情報セキュリティマネジメント法 - Federal Information Security Management Act requires、FISMAは、政府機関は多数の政府セ キュリティ標準を実装するために、包括的な計画を作成する必要がある として、2002年 電子政府法 - E-Government Act of 2002 内で制定され ました。FISMAは多数のNIST公表文献を活用し、政府のデータを保存、処 理する情報システムを作成するためのプロセスを説明しています。

このプロセスは三つの主要カテゴリに分割されています。

- システムのカテゴリ分け 情報システムは連邦情報処理規格(Federal Information Processing Standards Publication 199, FIPS 199)で定 められたセキュリティカテゴリに分類されます。これらのカテゴリは システムの情報漏洩の潜在的な影響を反映しています。
- 統制の選択 FIPS 199で定められたシステムセキュリティのカテゴリ にもとづき、組織は情報システムのための特定のセキュリティ統制要 求を特定すべく、FIPS 200を活用します。たとえば、もしシステム が"中程度"と分類されているのであれば、安全なパスワードの強制が 求められるでしょう。
- ・ 統制の適用 システムのセキュリティが特定されれば、OpenStackアー キテクトは選択した統制を適用するために、NIST 800-53を活用しま す。たとえば、安全なパスワードの構成を仕様化するなど。

第51章 プライバシー

プライバシーはコンプライアンスプログラムの重要な要素になりつつあ ります。顧客はプライバシーの観点から、データがいかに扱われている か関心を高めており、データを扱う企業はより高い基準を期待されてい ます。

OpenStack環境では、組織のプライバシーポリシー、米国 - EU間のセー フハーバーフレームワーク、ISO/IEC 29100:2011 プライバシーフレーム ワークなど、プライバシー特化ガイドライン遵守の証明を求められるこ とが多いです。米国ではAICPAが重視すべき10のプライバシー項目を公表 しており、ビジネス用途のOpenStack環境はそのうちのいくつか、もしく は全原則の立証を期待されます。

個人情報の保護に取り組むOpenStackアーキテクトを支援するた め、OpenStackアーキテクトには、NIST刊行 800-122 "Guide to Protecting the Confidentiality of Personally Identifiable Information (PII). をおすすめします。このガイドは以下を保護するプ ロセスについて述べています。

> "政府機関が保有するあらゆる個人情報、(1)個人を特 定、追跡しうるあらゆる情報、たとえば氏名、社会保障 番号、出生年月日、出生地、母の旧姓、生体情報など。 および、(2)個人に結びつく、結びつけられるあらゆる情 報、たとえば医療、教育、金融、雇用情報など"

包括的なプライバシー管理には、十分な準備、考慮と投資が必要です。 また、グローバルなOpenStackクラウドの構築時には、さらなる複雑さに 気づくでしょう。米国および、それより厳しいEUのプライバシー法令の 違いが良い例です。加えて、クレジットカード番号や医療情報など、機 密性の高い個人情報を扱う場合にはさらなる注意が必要です。これら機 密性の高い情報はプライバシー法令だけでなく、監視当局や政府規制に も関連します。政府によって発行されたものなど、ベストプラクティス に従うことで、OpenStack環境向けの総合的なプライバシー管理ポリシー が確立、実践されていくでしょう。

第52章 ケーススタディ: コンプラ イアンス

アリスのプライベートクラウド	225
ボブのパブリッククラウド	226

このケーススタディでは、アリスとボブがどのように一般的なコンプラ イアンス要件に対応するかを説明します。これまでの章で、さまざま なコンプライアンス認証と標準について言及しました。アリスはプラ イベートクラウドでコンプライアンスに取り組み、いっぽうボブはパブ リッククラウド向けのコンプライアンスに注力します。

アリスのプライベートクラウド

アリスはOpenStackプライベートクラウドを米国政府向けに構築してい ます。具体的には、信号処理向けの柔軟なコンピューティング環境で す。アリスは政府向けコンプライアンス要件を調査した結果、これから 構築しようとしているプライベートクラウドはFISMAおよびFedRAMP認定 が必要であると判断しました。これは政府系機関、行政部、および契約 者、どのような立場であっても、認定クラウドプロバイダー(Certified Cloud Provider, CCP)になるために必要な手続きです。特に信号処理 は、FISMAはそれを"深刻で壊滅的な影響"をシステムに与えうるとしてい るため、FISMA影響度が"高"となりがちです。加えてFISMA Moderateレベ ルにおいて、アリスはそのプライベートクラウドを確実にFedRAMP認証と しなければいけません。これはクラウド内に政府の情報を保有する、全 ての機関に求められてる条件です。

これらの厳しい政府規制の要件を満たすため、アリスは多くの活動を行 います。範囲の決定作業は、実装すべき統制の量に影響するため、特に 重要です。これはNIST刊行 800-53で定められています。

彼女のプライベートクラウドで使われる全ての技術は、NIST 800-53と FedRAMPに従い、FIPS認証技術であることが求められます。米国国防省が 関わる場合、国防省のIA - Information AssuranceおよびIA-enabled対 象機器/システムの構成標準であるSecurity Technical Implementation Guides (STIGs) も関係します。OpenStack向けのSTIGが無くとも、アリ スはさまざまな要素を考慮し、各OpenStackサービス毎に、いくつかの 潜在的な要件を考慮しなければいけません。たとえば、networking SRG - Security Requirements GuidesとApplication SRGはどちらも対象です (list of SRGs)。他の重要な統制として、クラウド内の全てのIDではPKI が使われ、SELinuxが有効であり、すべての全ての通信経路が暗号化で

き、持続的に監視が行われ、かつ明快に文書化されていること、などが 挙げられます。なお、アリスはオブジェクトの暗号化を考慮しませんで したが、これはプロバイダーというよりは、テナントの責任であるから です。

もしアリスが十分な範囲を定義し、それらのコンプライアンス活動を実 施できたのであれば、次は認定外部監査人によるFedRAMP認証の取得プ ロセスに移ります。一般的にこのプロセスは最長6ヶ月を要します。この ステップを経て、Authority to Operate - 注意影響レベル認定 を取得 し、OpenStackクラウドサービスを政府に提案できるようになります。

ボブのパブリッククラウド

ボブは新たなOpenStackクラウド環境のコンプライアンス活動を任されて います。このクラウドは小規模の開発者やスタートアップだけでなく、 大規模企業向けにも注力しています。ボブは個人開発者はコンプライア ンス認証を意識することが多くないが、いっぽうで大規模企業向けには 認証が重要であることを認識しています。ボブは特にSOC 1、SOC 2、お よびISO 27001/2認証を早急に取得したいと考えています。そこでボブ は3つの認証に共通する統制を特定するため、Cloud Security Alliance Cloud Control Matrix (CCM)を参考にしました(たとえば、定期的な アクセス検査、監査可能なロギングや監視サービス、リスク評価活動、 セキュリティレビューなど)。それからボブは、パブリッククラウドの ギャップ評価、結果のレビュー、そして特定されたギャップを埋めるた め、経験ある監査人チームと契約します。ボブは他のチームメンバーと ともに、それらのセキュリティ統制と活動が一般的な監査期間(~6-12ヶ 月)において、定期的に、確実に機能するようにします。

監査期間の最後にボブは外部監査人チームとの調整を行います。目的 は、6ヶ月以上にわたって無作為なタイミングで実施した、セキュリティ 統制のレビューです。そして、監査人チームはボブにSOC 1とSOC 2、ま た別途ISO 27001/2向けの公式な報告書を提供します。ボブのパブリック クラウド採用における勤勉な取り組みの結果、指摘されるような追加の ギャップはありませんでした。ボブは正式な報告書を彼の顧客にNDA下で 提供でき、また、SOC 1、SOC 2、およびISO 27001/2に準拠していること を彼のウェブサイトでアピールできるようになりました。

付録A コミュニティのサポート

目次

ドキュメント	227
ask.openstack.org	228
OpenStack メーリングリスト	229
OpenStack wiki	229
Launchpad バグエリア	229
OpenStack IRC チャネル	230
ドキュメントへのフィードバック	231
OpenStackディストリビューション	231

The following resources are available to help you run and use OpenStack. The OpenStack community constantly improves and adds to the main features of OpenStack, but if you have any questions, do not hesitate to ask. Use the following resources to get OpenStack support, and troubleshoot your installations.

ドキュメント

OpenStackのドキュメントは、 docs. openstack, orgを参照してくださ い。

ドキュメントにフィードバックするには、 OpenStack Documentation Mailing Listの <openstack-docs@lists.openstack.org>か、Launchpad のreport a bugを活用してください。

OpenStackクラウドと関連コンポーネントの導入ガイド:

- Installation Guide for Debian 7.0
- Installation Guide for openSUSE and SUSE Linux Enterprise Server
- Red Hat Enterprise Linux, CentOS, and Fedora向けインストールガ イド
- Ubuntu 12.04 (LTS)向けインストールガイド

OpenStackクラウドの構成と実行ガイド:

- Cloud Administrator Guide
- Configuration Reference
- Operations Guide
- · High Availability Guide
- Security Guide
- Virtual Machine Image Guide

OpenStackダッシュボードとCLIクライアントガイド

- API Quick Start
- · End User Guide
- · Admin User Guide
- コマンドラインインターフェースのリファレンス

OpenStack APIのリファレンスガイド

- OpenStack API Complete Reference (HTML)
- API Complete Reference (PDF)
- OpenStack Block Storage Service API v2 Reference
- OpenStack Compute API v2 and Extensions Reference
- OpenStack Identity Service API v2.0 Reference
- OpenStack Identity Service API v2.0 Reference
- OpenStack Networking API v2.0 Reference
- OpenStack Object Storage API v1 Reference

トレーニングガイドはクラウド管理者向けのソフトウェアトレーニング を提供します。

ask.openstack.org

During the set up or testing of OpenStack, you might have questions about how a specific task is completed or be in a situation where a feature does not work correctly. Use the ask.openstack.org site to ask questions and get answers. When you visit the http://ask.openstack.org site, scan the recently asked questions to see whether your question has already been answered. If not, ask a new question. Be sure to give a clear, concise summary in the title and provide as much detail as possible in the description. Paste in your command output or stack traces, links to screen shots, and any other information which might be useful.

OpenStack メーリングリスト

回答やヒントを得るとっておきの方法は、OpenStackメーリングリストへ質問や問題の状況を投稿することです。同様の問題に対処したことのある仲間が助けてくれることでしょう。購読の手続き、アーカイブの参照はhttp://lists.openstack.org/cgi-bin/mailman/listinfo/openstackで行ってください。特定プロジェクトや環境についてのメーリングリストは、on the wikiで探してみましょう。すべてのメーリングリストは、http://wiki.openstack.org/MailingListsで参照できます。

OpenStack wiki

OpenStack wikiは広い範囲のトピックを扱っていますが、情報によっては、探すのが難しかったり、情報が少なかったりします。幸いなことに、wikiの検索機能にて、タイトルと内容で探せます。もし特定の情報、たとえばネットワークや novaについて探すのであれば、多くの関連情報を見つけられます。日々追加されているため、こまめに確認してみてください。OpenStack wikiページの右上に、その検索窓はあります。

Launchpad バグエリア

OpenStackコミュニティはあなたのセットアップ、テストの取り組みに価値を感じており、フィードバックを求めています。バグを登録するには、https://launchpad.net/+loginでLaunchpadのアカウントを作成してください。Launchpadバグエリアにて、既知のバグの確認と報告ができます。すでにそのバグが報告、解決されていないかを判断するため、検索機能を活用してください。もしそのバグが報告されていなければ、バグレポートを入力しましょう。

使いこなすヒント:

明瞭で簡潔なまとめを!

- Provide as much detail as possible in the description. Paste in your command output or stack traces, links to screen shots, and any other information which might be useful.
- Be sure to include the software and package versions that you are using, especially if you are using a development branch, such as, "Icehouse release" vs git commit bc79c3ecc55929bac585d04a03475b72e06a3208
- 環境固有のお役立ち情報、たとえばUbuntu 12.04や複数ノードインス トール

Launchpadバグエリアは下記リンクを参照してください。

- Bugs: OpenStack Block Storage (cinder)
- Bugs: OpenStack Compute (nova)
- Bugs : OpenStack Dashboard (horizon)
- Bugs : OpenStack Identity (keystone)
- Bugs: OpenStack Image Service (glance)
- Bugs: OpenStack Networking (neutron)
- Bugs: OpenStack Object Storage (swift)
- Bugs: Bare Metal (ironic)
- Bugs: Data Processing Service (sahara)
- Bugs: Database Service (trove)
- Bugs: Orchestration (heat)
- Bugs: Telemetry (ceilometer)
- Bugs: Queue Service (marconi)
- Bugs: OpenStack API Documentation (api.openstack.org)
- Bugs: OpenStack Documentation (docs.openstack.org)

OpenStack IRC チャネル

OpenStackコミュニティはFreenode上の#openstack IRCチャネルを 活用しています。あなたはそこに訪れ、質問することで、差し迫っ た問題へのフィードバックを迅速に得られます。IRCクライアントをインストール、もしくはブラウザベースのクライアントを使うには、http://webchat.freenode.net/にアクセスしてください。また、Colloquy (Mac OS X, http://colloquy.info/), mIRC (Windows, http://www.mirc.com/), or XChat (Linux)なども使えます。IRCチャネル上でコードやコマンド出力結果を共有したい時には、Paste Binが多く使われています。OpenStackプロジェクトのPaste Binはhttp://paste.openstack.orgです。長めのテキストやログであっても、webフォームに貼り付けてURLを得るだけです。OpenStack IRCチャネルは、#openstack on irc.freenode.netです。OpenStack関連IRCチャネルは、https://wiki.openstack.org/wiki/IRCにリストがあります。

ドキュメントへのフィードバック

ドキュメントにフィードバックするには、 OpenStack Documentation Mailing Listの <openstack-docs@lists.openstack.org>か、Launchpad のreport a bugを活用してください。

OpenStackディストリビューション

OpenStackのコミュニティサポート版を提供しているディストリビューション

- Debian: http://wiki.debian.org/OpenStack
- ・ CentOS、Fedora、およびRed Hat Enterprise Linux: http://openstack.redhat.com/
- openSUSE \(\subseteq \subseteq \subseteq \subseteq \subseteq \subseteq \notal\); //en. opensuse. org/
 Portal: OpenStack
- Ubuntu: https://wiki.ubuntu.com/ServerTeam/CloudArchive

アクセス制御リスト

A list of permissions attached to an object. An ACL specifies which users or system processes have access to objects. It also defines which operations can be performed on specified objects. Each entry in a typical ACL specifies a subject and an operation. For instance, the ACL entry (Alice, delete) for a file gives Alice permission to delete the file.

ACL

「アクセス制御リスト」参照。

API

アプリケーションプログラミングインターフェース。

BMC

Baseboard Management Controller. The intelligence in the IPMI architecture, which is a specialized micro-controller that is embedded on the motherboard of a computer and acts as a server. Manages the interface between system management software and platform hardware.

CA

Certificate Authority or Certification Authority. In cryptography, an entity that issues digital certificates. The digital certificate certifies the ownership of a public key by the named subject of the certificate. This enables others (relying parties) to rely upon signatures or assertions made by the private key that corresponds to the certified public key. In this model of trust relationships, a CA is a trusted third party for both the subject (owner) of the certificate and the party relying upon the certificate. CAs are characteristic of many public key infrastructure (PKI) schemes.

Chef

An operating system configuration management tool supporting OpenStack deployments.

CMDB

構成管理データベース。

DAC

Discretionary access control. Governs the ability of subjects to access objects, while enabling users to make policy decisions and assign

security attributes. The traditional UNIX system of users, groups, and read-write-execute permissions is an example of DAC.

DHCP

Dynamic Host Configuration Protocol. A network protocol that configures devices that are connected to a network so that they can communicate on that network by using the Internet Protocol (IP). The protocol is implemented in a client-server model where DHCP clients request configuration data such as, an IP address, a default route, and one or more DNS server addresses from a DHCP server.

Diango

Horizon 中で広く使用される Web フレームワーク。

DNS

Domain Name Server, A hierarchical and distributed naming system for computers, services, and resources connected to the Internet or a private network. Associates a human-friendly names to IP addresses.

Puppet

An operating system configuration-management tool supported by OpenStack.

Diq0

Message queue software supported by OpenStack; an alternative to RabbitMQ.

RabbitM0

OpenStackでデフォルトで採用されているメッセージキューのソフトウェア。

SPICE

The Simple Protocol for Independent Computing Environments (SPICE) provides remote desktop access to guest virtual machines. It is an alternative to VNC. SPICE is supported by OpenStack.

Virtual Network Computing (VNC)

Open source GUI and CLI tools used for remote console access to VMs. Supported by Compute.

ZeroMQ

OpenStack によりサポートされるメッセージキューソフトウェア。RabbitMQ の 代替。0MQ とも表記。